魔法少女ハーレムなのは

雨を飴だとアーメンしたアメンボ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私、こと茅野かすみは考えた。

愛しのなのはちゃんの愛らしさ・可愛さを万人に知らしめたいと。

私には前世の記憶がある。私は前世でオタクの限りを尽くして生きていた(前世でも女)。そのためこの世界が『魔法少女リリカルなのは』の世界と酷似していると知っている。

基本原作通りを予定。

日常ものが多くなると思います。

ギャグ中心の少しシリアスを考えております。

序でに他の連載作品とは一切違う設定作品です。御気を付けて。

目　次

プロローグ①　魔法少女ハーレムなのは計画　作成中 ―― 1
プロローグ②　魔法少女ハーレムなのは計画　草案 ―― 9
第一話　魔法少女ハーレムなのは計画　始動 ―― 22
第二話　魔法少女ハーレムなのは計画　実行 ―― 32
第三話　魔法少女ハーレムなのは計画　再実行 ―― 46
～魔法少女ハーレムなのは計画　再考中～（閑話休題） ―― 60
第四話　魔法少女ハーレムなのは計画　記録 ―― 70
第五話　魔法少女ハーレムなのは計画　脇道 ―― 86
第六話　魔法少女ハーレムなのは計画　邪魔 ―― 103
第七話　魔法少女ハーレムなのは計画　主人公 ―― 119
第八話　魔法少女ハーレムなのは計画　フェイト ―― 139

プロローグ①　魔法少女ハーレムなのは計画　作成中

私、こと茅野かすみは考えた。
愛しのなのはちゃんの愛らしさ・可愛さを万人に知らしめたいと。
私には前世の記憶がある。私は前世でオタクの限りを尽くして生きていた(前世でも女)。そのためこの世界が『魔法少女リリカルなのは』の世界と酷似していると知っている。つまり、限定的とはいえこの後の展開が分かるということだ。
私は死んだとき、神様（自称）にあった。神様は私に一つ転生特典なるものを授けてくださった。私はその能力と前世での知識をなのはちゃんのために使う。私の天使、私のアイドル、私のヒーロー、そしてこの世界の主人公、高町なのはちゃん、その人のために！
「どうしたの？かすみちゃん。急に立ったりして」
「いや～、なんでもないよ、なのはちゃん♪」
やばいやばい。なのはちゃんに変な子だと思われちゃうところだった。自らの決意を再確認しガッツポーズをしてしまった自分を恥じる。しかし、仕方がないと思う。それだけ私は「魔法少女ハーレムなのは計画」を実行することに熱意をもやしているのだから。
不思議なものを見るようななのはちゃんのあどけない表情。めっ、ちゃ可愛い。もう一度言う。めっ、ちゃ可愛い！
「そう？ならいいんだけど・・・それでね、その二人と仲良くなったからね、明日のお昼休みにかすみちゃんにも紹介したいの！いいかな？」
「うん！わかった♪なのはちゃんのお友達なら大歓迎だよ！」
この二人というのは、アリサ・バニングスちゃんと月村すずかちゃんのことだ。なのはちゃんとこの二人の出会いは原作と同じ流れであったらしい。しかし、本当に残念なことにその日に限って熱を出してしまって、あの大事な大事なシーンを見逃してしまったのだ。かすみ、一生の不覚なり。今さっきその話を聞いてなのはちゃんの勇士を

見れなかったことに心の中で涙する。・・・・・・え？決意表明しながらよく話が聴けたかって？バッカ！そんなんでなのはちゃんＬｏｖｅを語れません！私の脳のリソースは半分がなのはちゃんのためにある。それぐらい常識でしょ。

　そんなことを考えていると、大人の女性が近づいてくる。なのはちゃんのお母さん高町桃子さんだ。手にはお皿でここ翠屋名物のシュークリームがのっている。

「はい、ふたりとも」

「あ、お母さん、ありがとう」

「ありがとうございます。桃子お母さん」

「ふふ。元気なのはいいけど、ふたりともお店ではあまりはしゃぎすぎないようにね」

「「はーい！」」

　桃子さんは本当に優しくて、そしてきれいだ。あの年で高校生くらいの見た目。将来のなのはちゃんが楽しみだ。序でに高町家とは色々あって、今では桃子さんは私にとって第二の母とでもいうべき人。だから、「桃子お母さん」と呼んでいる。桃子さんも嫌な顔をせず、逆にうれしそうにしてくれるから本当に幸せな気持ちになる。親子そろって私のハートを打ち抜いてくれて・・・本当に罪深い。

「そうだ！明日の放課後、ふたりの用事がなかったらここに連れてこない？」

「あ、いい考えなの。私、アリサちゃんとすずかちゃんのメールアドレス知ってるから今日訊いてみるね」

　すでにメールのやり取りも行っているらしい。まだ数日しか経っていないのに。というか、私というこの世界にとってイレギュラーがいるのにも関わらず、原作通りになっていることに気が付いた。なのはちゃんがアリサちゃんたちと出会ったのは昼休みの時で、本当ならなのはちゃんは私とお昼を食べていたというのに。それも熱で数日休んだことで数日ともお昼を一緒に食べたとか。世界の修正力というものか？それよりもアリサちゃんとすずかちゃんがうらやましい。・・・・・・まぁ、土日はなのはちゃんを独占できたから許すと

しますか。それにいずれは同志となるのだから恨むのは筋違いか。
そう思うと今すぐに会いたくなってきたな。
「今日はふたりとも何か用事でもあるの？ないのなら今からでも会いたいのだけど・・・」
「ああ、うん。そうだね♪今から訊いてみるよ」
そう言ってなのはちゃんは携帯電話を取り出して、操作する。終始ニコニコのなのはちゃん。友達同士が友達になるのが楽しみなのだろう。その気持ちはどことなく分かる気がする。私も前世で読んだ漫画でいまだ接点のないキャラクターが友達になっていくのを楽しみにしていた記憶がある。・・・あれ、少し違うか。
「あ♪アリサちゃんからメールが来たよ」
「はやい！」
まだメール送っていないというのにこの速さ。アリサちゃんになのはちゃんポイント１０Ｐを上げよう。
「えっとね・・・ひまだから今から会えないかな、って。すずかちゃんにも送ってるみたい」
「ならいまから翠屋に集合～♪」
さてと、これからどうやってふたりをなのはちゃんの魅力に憑りつかせようか。本当に楽しみだ。

～～～～～

私はアリサ・バニングス。数日前仲良くなった月村すずかっていう紫髪のおとなしい女の子と一緒にもう一人の友達高町なのはの家族が経営する喫茶翠屋に赴いた。
それはいい。こっちから暇だから会いたいと言ったのだから。正直友達なんて今までできたことがなかったから勇気を出して送ったのだ。それから翠屋に赴くことになったのだが――――――――
「――――――と言う訳で、ふたりはどれがいいと思う？」
「・・・・・・」
今目の前に大量の写真。そのどれもに、私の友人なのはが写ってい

た。
「か、かすみちゃ～～～ん／／／」
　写っている本人はゆでだこのように恥ずかしがっているのが分かる。それもそうだろう。写真は色々なものがあり、中でも水着写真や寝間着写真などもし私だったら絶対悶絶しそうな服装や格好のものが半数を占めている。まぁ、残り半分もよくよく見れば家族の思い出のようなものばかりで、どこか親ばかっぽさを感じさせた。
「でっ！どれがいい？」
「うわっ！近いわよあんた！」
　急に顔を近づけられてびっくりする。どれがいいと訊かれても、これは少し困る内容だった。
　隣を見れば同じように困った表情のすずかの顔がある。
「ええっと、どれかを選べというなら、これかな？」
「って！何選んでんのよ！」
　ちょっとやばい。すずかは少し混乱しているわね。確かにこんな状況で何をすればいいのか、と訊かれたら何がベストなのかはわからないが、少なくとも下着姿の写真を選ぶのは違うと思う。ほら、なのはだって、あまりの恥ずかしさに湯気が出ているし。というかこれ写真のなのはカメラに気づいてないんだけど。もしかして隠しカメラ？はぁ、一体どうすればいいというのだろう。新しい友達が犯罪を犯している状況。・・・あれ？一瞬すずかの瞳の色が変わった気がするけど・・・気のせいか。
　目の前の少女を見る。黒髪黒目の日本人形を思わせる容姿。つまり可愛いのだ。なのはやすずか、それから自惚れでなければ私もだけど、私たちは結構可愛いと思う。それはまぁ周りから言われているというのもあるし、そもそもなのはたちは本当に可愛い。ただそれとは別の可愛さをかすみは秘めている。なのはのような小動物っぽい可愛さやすずかの色っぽい可愛さ。それとは違う可愛さだ。・・・・・もちろん、なのはの写真にデレデレしていなければの話だが。何だかもったいない気がする。
　最初は私たちよりもなのはの友達になっているっていうことが少

しばかり気に入らなかった。いや、本当に少しだけで別に私よりもなのはと仲良しなことに嫉妬したとかじゃなく、・・・・・ただなんとなくはじめての友達をとられたような気がして。だけど実際に会ってみると拍子抜けでなんか気を張り詰めていたこっちが恥ずかしい。

なのはが写真を隠そうとするがそれをかすみが阻止している。なのはは凄く必死なのに対してかすみは凄く幸せそうな顔をしている。たぶん、彼女はどんななのはでも好きなのだろう。だから、からかわれているなのはも好きということだ。

私は目の前の光景からテーブルにある多量の写真に目を移す。正直ここまでの量を撮り溜めていることに呆れかえるしかなかった。私服姿のなのは。髪を下したなのは。逆にサイドに髪を結ったなのは。寝ぼけたなのはにシャッター光に目を細めるなのは。色々とあり過ぎてちょっと笑えてきた。なんだか新鮮というか、五六年の短い半生でこれだけの思い出があるということに素直な驚きも混じっていた。

ふと、一枚の写真が目に付く。それを手に取って目の前に持ってくる。もし、どれか一枚を選ぶとすればこの写真かな。

「アリサちゃんはその写真にしたの？どれ見せて♪」

「あっ、ちょっと！」

私の手元から写真が離れていく。手にした写真をみるかすみは少し感心した顔になった。

「流石アリサちゃん♪なのはちゃんポイント１００Ｐを差し上げます」

「「何そのポイント!!」」

気づいたらなのはと一緒に声を上げていた。少し大きかっただろうか。他にお客さんがいなくてよかった。まぁ、いてもいなくても悪いことだけど・・・・・。まぁ、私よりもうるさい奴がいるからいいか。

「ふふふ、説明しよう！なのはちゃんポイントとは、なのはちゃんに対する，愛，を測るための数値である！」

「愛って・・・・・・」

本当に呆れてものが言えない。ん？なのはが顔を赤くしてこちらをちらちらとみている。どうしたのだろうか。
「どうしたのよ、なのは。急にモジモジして」
「え、えっと・・・」
「ん？どうしたのかな、なのはちゃん。ちょっとか「あんたは黙っときなさい！」」
どうせろくなことを言わないかすみを黙らせて再びなのはを見る。本当にどうしたのだろうか。具合でも悪いのだろう。かすみからの辱めで熱でも出たのだろうか。そんなことを思いながら珈琲の入ったカップに手を付ける。もちろん砂糖ミルク入り。
「え、えっと、アリサちゃんって、私のこと愛してるの？」
口につけたコーヒーを正面に吹き付けてしまった。な、なんてことを急に訊き出すんだこの子は。あれ？でもさっきポイントのことを話していたからその時のか。結局かすみのせいなのね。そう思い前を向くと珈琲まみれのかすみがいた。・・・・・・まぁ、自業自得よね。コーヒーもったいないことしたけど。
「えっと、アリサちゃん。私、人がふくんだ珈琲をおいしくいただくほど変態ではないのだけれど」
「もちろんそんな勘違いしていないわよ！ていうか変態っていうのは認めているのね！」
「ア、アリサちゃん、結局私のこと好きなの？」
「あああぁ！もう、あんたはちょっと素直過ぎ！そんなことあるわけないでしょ！」
「じゃ、じゃあ、きらいなの？」
「それもちがっ！あああぁもう！本当にめんどくさい！」
嘲笑を向けるかすみ、泣き顔になるなのは。あああぁ、誰か話を収拾してほしい！こいつら本当にめんどくさい！いや、友達をめんどくさがるのはどうかと思うし、なのはは単体ではいいやつだからこいつが加わると一気にカオス度が上がってしまうのだ。つまり、かすみが悪い。
「私としては、アリサちゃんがどの写真を選んだのか気になるよ」

今まで黙っていたすずかが急に話し出した。いや、引っ込み思案な彼女にとって言い出すタイミングはここがベストだったのかもしれないが、私としては早くこの話題から離れてほしいのだ。って、なのはも興味持った顔しているし！

「ふふふ、アリサちゃんが選んだ写真はね・・・ジャガジャガジャガジャガジャン！これです！」

そういって写真をふたりに見せるかすみ。なのははそれをみて、最初にかすみがした表情とは違ってよくわからない顔をした。ただすずかは合点が行ったようだ。それは予想外。

「ねぇねぇ、かすみちゃん。どうして制服姿の私の写真を選んだだけでアリサちゃんが私を愛している理由になるの？」

「だからそこ！愛しているとか言いなさんな！」

「ふぇ？なんで？かすみちゃんは”好き”だとか”愛している”とか言えば言うほどともだちになれるって言っていたよ？」

結局お前のせいか、かすみぃぃぃ!!してやったりみたいな顔するなよおおぉ！

「さてと、大分場もあたたかくなってきたことだし、そろそろこの写真を選んだ理由をアリサちゃんの口から教えてもらいましょうか」

なんか言い出したこいつ。そんなこと言うとなのはもすずかもなんだか期待するような視線を向けてきた。どうしてそこまでそんな目で見てくるのかわからない。いつの間にか逃げ場がふさがれているこの現状。

少し渋ったが、この状況からはどうしても逃げれないと悟り溜息を一つ吐く。そして、自宅で試着でもしたのか、その写真を見つめる。

「・・・私とすずかは、かすみと違っていままでなのはの制服姿しか見ていなかったのよ？今回初めて私服を見たし、写真で水着とか寝間着とか、あ、あと下着とかも見たけど、・・・やっぱり私にとってはなのはらしいと言えば制服姿になるのよ」

まぁ、当たり前と言えば当たり前の理由だ。これがどうして愛とかなんだとかに繋がっていくのかは正直分からない。そして、キッとかすみをにらむ。

「これはね、なのはちゃん。まだ制服姿のなのはちゃんしか見れていないから寂しいと。それでこれからも仲良くなって色々ななのはちゃんを見たい、という潜在欲求の表れなんだよ」
「んなわけあるかぁ！」
「ふぇ？アリサちゃんは私と仲良くなりたくないの？」
「あああぁもうちがぁーーう！」
やっぱりこの二人、というかかすみの存在は私の安穏を妨げるものと確信した。

その後、流石に桃子さんに怒られた。
笑顔でも恐さをだせると初めて知った瞬間である。

プロローグ②　魔法少女ハーレムなのは計画　草案

アリサちゃんとすずかちゃんと友達になって二年の月日が流れた。原作開始の年だ。まだ春休みだが。

速いようで速かった。あっという間でした。丁度話数にすると書かれずに飛ばされるくらいには。

まぁ、何もなかったわけではなく、みんなで遊んだり、勉強したり、アリサちゃんやすずかちゃんのお屋敷に行ったり、犬や猫にまったりしたり、家でまったりしたり、ハーレムなのは計画の具体案を考えたり、いい案が出ずにムラムラしたり、なのはちゃんの写真で発散したり、色々と忙しい毎日を送らせてもらいました。え？何かおかしいだろうって？気のせいじゃないの？

取り敢えず、今は自宅にいる。今日はおじいちゃんが昼から出かけているから暇。なんでもゲートボールとか。いつもは私も連れて行ってもらうのだが今日はそんな気分ではなかったので遠慮した。たまにはおじいちゃんも友達同士だけでプレイするのもいいんじゃないかと思って。何だか残念そうな顔をしていたけど・・・・・・。

ゲートボールがない日は決まっておじいちゃんは面白い話を聞かせてくれる。でかい魚みたいなやつと戦った時の話とか、迷子になった森で大きな戦艦みたいな遺跡を発見したとか。・・・・・・あれ？おじいちゃんって管理世界の人？でも魔力はない気がするんだよね。というか「魔力がないわしじゃが～～～」というのがその話をするときの口癖だからないのだろう。よく素手だけで戦ってきたなおじいちゃん。うん、何にしても明らかに管理世界の人だよ。なんでここにいるんだろうか。

とまぁ、そんなこんなで暇すぎてどうかなりそうだ。学校の春休みの宿題もすぐ終わったし、なのはちゃんは翠屋のお手伝い。アリサちゃんとすずかちゃんは習い事だとか。だから、私だけ暇。序でに、以前働くなのはちゃんを撮りすぎていたらしばらく出禁を食らった。親しき者にも礼儀あり。

暇だ。
　取り敢えず、畳から起き上がって伸びをする。この家は純日本家屋って感じで前世では感じられなかった落ち着きを感じる。一歩出れば民家なのだが、昔からあるお侍さんの家ということで残っている。おじいちゃんはたしか五代目とか言っていた気がするがまぁ、特に関心はない。
「予習でもするかな・・・・・」
　学校の予習をすることにした。以前私は一度体験したから大丈夫だろうとたかをくくっていたのだが、しかし意外と内容が難しい。代数を使えば簡単に解ける問題を違う方法で解いたり、厳密には間違いでも小学生に分かりやすくするためにあえて違う表現をしたり、いちいち面倒くさい。つまり、ある程度知識があるものにとっては逆に小学校のお勉強は難しいのだ。だから、予習復習しないと特待生から落ちてしまう。序でに特待生は授業料だけでなく入学料及びその他の設備費等を払わなくてもよいのだ。払うものと言えば修学旅行の積み立てぐらいかな。まぁ、私立だけあって高いが。おじいちゃんはお金のことは気にするなとは言ったが、ただにしてくれるのならいい話はない。余り迷惑もかけたくないしね。
　と考えながら歩いていると蔵が見えた。
　まぁ、蔵があるんですねこの家。なのはちゃんの家は道場があるから特に珍しくはないのかもしれないけど。敷地面積で言うとこの家はなのはちゃんところより少し狭いぐらい？それでも広いほうだ。蔵があるくらいだし。まぁ、お嬢様たち（アリサちゃんたち）と比べると雲泥の差なのだが。
　しかし、この蔵。一度も入ったことがない。別に入るなとかお化けが出るとかそんなことは言われてはいない。ましてや鍵なんて最初からかかってすらいないと言っていた。泥棒対策はどうしているのだろうか？今まで気にならなかったのだけれど。・・・・・取り敢えず、入ってみようかな。
　庭用のサンダルをひっかけ蔵に向かう。小学生の身とはいえやはりこの蔵は大きい。二階建てぐらいよりは低いが三メートルはある

だろう。幅もなのはちゃん所の道場を少し狭くした感じで、立派な蔵だ。扉もそんなに大きくないが厳かな感じが出ている。
扉に手をかける。開かない。
扉を引く。開かない。
扉を強く引く。開かない。
両手で思いっきり引く。開かない。
体重をかけて両手で思いっきり引く。開かない。
「ちょっ、かた！」
全くビクともしないこの扉。たとえ小学生の非力な身なれど、流石にここまで固いのはおかしい。これだとおじいちゃんでも開けられないのではないだろうか。これは何かの呪文がないと入れない感じかもしれない。だからおじいいちゃんは入るなとは言わなかったのか。そもそも開けれないのだから。そう考えると無性に入りたくなる。
「でも、どうやって入れば・・・・・・ん？」
ふと下を見ると違和感があった。近づいてみて気が付いたのだが、引き戸になくてはならない溝がない。
「・・・・・・もしかして、これって」
そう言い、扉を両手で持ち上げる。そして、扉を外した。
「…………………………………………………………………………………………めっちゃ簡単に開いたわ。これっていちいち取り外さないと出入りできないのかしら？」
あれだ。よく古墳とかで入口の前にかぶせるだけの石の戸。あれに似ている。この扉の場合は木製で軽く、上下の枠にはめているだけの感じ。まぁ、開いたことだし入りますか。
中は普通に片付いていた。流石おじいちゃん。几帳面な性格が出てます。ところどころものが倒れないような工夫がしている。箪笥とかはつっかえ棒で固定していて、地震が起きても大丈夫そうだ。ものはたくさんあるが、通りやすいように道を作っており奥に進みやすそうだ。これも流石おじいちゃん。
蔵の中に入る。天井近い小窓と扉からの光しかなく暗い。こう

いった雰囲気は、何だかわくわくする。古いものの匂い。それはかび臭いにおいだけれど、どこか冒険心をたぎらせる。男の子っぽいと言われるかもしれないが、まぁ前世でも子供の時はよく男子どもと遊んでいたからそのせいかもしれない。・・・・・・今思ったのだが、精神が肉体に引っ張られている気がする。前世を含めると私はすでに三十過ぎだ。それなのに冒険心とか。いや、もちろん大人になっても大事なものではあるが、私はそう言ったものを高校の時に完全に捨てたと思っていたのに。

ひとつ目に付く箱があった。白い箱。他のは黒く、わずかな光しかない蔵の中では陰に隠れてしまって存在感がない。しかし、この箱は少しの太陽光を倍にして反射している。そんな感じを与えてくる。

「・・・」

周りを気にする。誰もいない。

「開けていいかな・・・？」

ちょっといけないことをしている気分になる。べつに何も言われていないのだが、それはつまり中のものを見ていいという訳でもないだろう。もちろんおじいちゃんはダメな場合は前もってちゃんと言うから大丈夫だとは思うのだが、なんだかそう思ってしまう。・・・・・いや、たぶんこれはそう思いたいのだろう。いけないことをしたい。子供は意外とそう言ったのにあこがれるのかもしれない。いけないことをする罪悪感とそれを上回る好奇心。その二つの感情のせめぎあいこそこどもをドキドキさせるのだ。

というわけで、白い箱開けました。まぁ、色々と考えたけど、結局は好奇心を持つことが子供の特権だからしょうがないということで。

開けたはいいけど特に何も起こらなかった。浦島太郎さんみたくはならなかったよ。それかおおきいつづらかちいさいつづらか。大きさからして小さいつづらだと思うのだけれどこれで蟲ばっかりだったらいやだな～。

そう思いながらもゆっくりと中身を見る。

そこには、尖った形の水晶があった。紫水晶（アメジスト）だ。たぶん。あれだ。ムー〇ンとかで出てきたやつだよ。ちっさく、私の手のひらに収まる

くらい。って、勝手に手に取ったけど大丈夫かな？
「なんだろう、これ・・・」
「Ｇｏｏｄ　ａｆｔｅｒｎｏｏｎ，ｐｒｅｔｔｙ　ｌａｄｙ♪」《こんにちは、可愛いお嬢さん♪》
「っ！しゃ、しゃべっ・・・あ」
「Ｏｕｃｈ！Ｂｅ　ｃａｒｅｆｕｌ，ｐｌｅａｓｅ！」《痛いわよ！丁寧に扱ってよね！》
　急にしゃべりだした宝石を慌てて落としてしまった。幼い子供の声だった。いやいやふつうそうなるでしょ。流石にこの世界魔法があると分かっていても急にしゃべりかけられたら驚くよ。そもそも実際には魔法はまだ見ていないから知識だけしか知らないわけだし。落としたのは仕方がないことだったのだ・・・・・。というか大丈夫だろうか壊れていないだろうか。これって、なんていうのだっけ。え、えっと。
「・・・・・Ｃｏｕｌｄ　ｙｏｕ　ｐｉｃｋ　ｕｐ　ｍｅ　ａｓ　ｓｏｏｎ　ａｓ　ｑｕｉｃｋｌｙ？」《早く拾ってほしいのですが？》
「え、えっと、・・・はいすいません」
　なぜしゃべるとかなぜ英語なのに意味が通じているのかとか、それはおいておいて取り敢えず拾うことにした。
「え、えっと、・・・・・・しゃべれるんだね」
「Ｙｅｓ．Ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ！」《ええ、もちろんよ！》
　何だかテンションの高い子だ。というか、これってあれだよね。リリカルな世界のデバイスとかいうものだよね。それもしゃべれるというからたぶんインテリジェントデバイス。レイジングハートやバルディッシュと同じ種類の。取り敢えず、訊いてみるしかない。しかし、何故管理外世界の人が知っているのか～とか、どこまで知っているのか～だとか訊かれるのめんどくさいから、いちいち遠回りな質問をしないといけなくなる。まぁ、べつに自分が転生者でこの世界が向こうの世界の作品になっているとか言ってもいいんだけど、精神科か脳外科をすすめられるだろうし、それなら知らないふりして、そして少し頭が切れるようなキャラでいきますか。まぁ、そんな場面は少な

いだろうしいつもは普段通りにしても大丈夫な感じで。
「えっと、色々と質問したいことが多いのだけど・・・・・・」
「Ｙｅｓ，Ｉ ｔｈｉｎｋ ｓｏ ｔｏｏ，ｂｅｃａｕｓｅ ｔｈｉｓ ｗｏｒｌｄ ｉｓ Ｎｏｎ－ＴＳＡＢ ａｄｍｉｎｉｓｔｒａｔｅｄ ｏｎｅ．」《ええ、そう思います。ここは管理外世界であるのだから》
よかった話が分かる子で。取り敢えず、落ち着ける場所がいいということで蔵から出た。もちろん扉はまた持ち上げて閉めたのだが、デバイスから驚かれた。独特な閉め方ですね、ということで。
まぁ、話は居間で聞いた。今はまだおじいちゃんがいないから自分の部屋じゃなくてもいいだろうと思って。
彼女の名前はアルファスデァムゾル。かっこ良さそうな名前だが女性らしい。デァムゾルが高い身分の少女を表しているらしい。訳すると”一番の淑女”だと。なんか違う気がする。長いからアルファスと呼ぼう。
色々な説明をされた。そして、彼女はミッドチルダ出身らしい。もちろんミッド式のインテリジェントデバイスで、魔法使いの杖という説明を受けた。これはもしかしてオリ主フラグですか？ご都合主義展開のテンプレですか？いやいや待て待て、だいたいここで期待させておいて後であなたリンカーコアがありませんよとか言われるパターンだよ。
「訊きたいんですけど、私って魔法使えるんですか？」
「Ｏｈ～，Ｉ ｅｘｐｅｃｔｅｄ ｙｏｕｒ ｓａｙｉｎｇ．Ｉ，ｌｌ ｍａｋｅ ｓｕｒｅ ｏｆ ｙｏｕｒ ｍａｇｉｃａｌ ｎａｔｕｒｅ．Ｐｌｅａｓｅ ｔａｋｅ ｍｅ ｉｎ ｙｏｕｒ ｈａｎｄ！」《ああ～、それは予想してました。あなたの魔力資質を確かめましょう。私を手に取ってください！》
「こう？」
「Ｙｅｓ，ａｎｄ ｋｅｅｐ ｙｏｕｒ ｍｉｎｄ，ｆｏｌｌｏｗ ｍｙ ｓａｙｉｎｇ ｐｌｅａｓｅ．Ａｌｌ ｉｓ ｂｅｌｏｗ ａｌｐｈａ．」《そうです。そして、心を落ち着かせて、私の言葉を続け

てください。全てはアルファより下である。》
「全てはアルファより下である。」
「Ａｌｐｈａ ｇｏｅｓ ｕｐ ａｌｌ．Ｔｈｅ ｆｉｒｓｔｓ ｏｆ ａｌｌ ｈａｖｅ ｔｈｅ ｏｒｉｇｉｎ，ａｎｄ Ａｌｐｈａ ｉｓ ｔｈｅ ｏｎｅ ｏｆ ａｌｌ．」《アルファはすべての先を行く。全てには起源があり、全ての起源はアルファである。》
「アルファはすべての先を行く。全てには起源があり、全ての起源はアルファである。」
「Ｔｈｕｓ ｗｅ ｍｕｓｔ ｋｎｏｗ ｉｔ．Ａｌｐｈａ，ｓ ｄａｍｓｅｌ，ｓｅｔ－ｕｐ！」《従って、我々はそれを知るべきである。アルファスデァムゾル、セットアップ！》
「従って、我々はそれを知るべきである。アルファスデァムゾル、セットアップ！」
・・・・・と言うか、何この呪文？パスワードとか？長いんだけど。意味もよくわからないし。とか思っているとなんか紫色の光の柱が立っている気がするのですが、これ他所の人が見たらどう思われるのだろう？ちょっとそこら辺考えていなかったわね。まぁ、そんなことはこの際どうでもよくて、これは魔法が使えるということでいいのかな？
「Ｆｉｒｓｔ ｏｆ ａｌｌ，ｙｏｕ ｓｈｏｕｌｄ ｉｍａｇｉｎｅ ｙｏｕｒ ｂａｒｒｉｅｒ－ｊａｃｋｅｔ ａｎｄ ｍａｇｉｃａｌ ｓｔｉｃｋ．」《取り敢えず、バリアジャケットと魔法の杖をイメージしてください。》
「あ、はい」
えっと、どんなのがいいかな？あまり明るすぎるのは自分の髪型から似合わないのは分かっているし、なら黒系？黒系っていうとあれだ。クロノくんのバリアジャケットが思いつくな。ならあれをベースにして、少しかわいい感じにまとめてっと。それから魔法の杖はシンプルにすっと伸びたステッキに先が逆円錐。それに決めたっと。
すると、光がはじけて変身が完了していた。あれ？変身シーンは？
「Ｉｔ ｉｓ ｃｏｍｐｌｅｔｅ．」《完成です。》

私のバリアジャケットはクロノくんの服の趣が一切ないゴスロリの長袖ロングスカートでところどころ白と紫が混じっており、杖は黒色で先端にアルファスの待機状態がはまっっている逆円錐型の枠が取り付けられていた。もう少しクロノくんっぽいの想像していたが、まぁかっこかわいい感じになっていっちゃいるのだが。

・・・・・普段ならうれしく思うのだけど、今はそれどころではない。

「ちょ、ちょっと、ええ～～！これでおしまい？うそ!?変身シーンは？あれだけ？一瞬だったよ！服がはじけてどんどん服が現れてってのがなかったよ!!」

「Ｔｒａｎｓｆｏｒｍａｔｉｏｎ　ｓｃｅｎｅ？Ｔｈｅｒｅ　ｉｓ　ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ　ｉｎ　ｐａｒｔｉｃｕｌａｒ．」《変身シーン？特に問題はありませんよ。》

「いやいや、あるよ！大ありだよ！魔法少女もので変身シーンがないっていうのはね、陸に引き上げられた魚、風のない鳥のようなものなのよ！」

「Ｉ，ｍ　ｓｏｒｒｙ，ｂｕｔ　Ｉ　ｃａｎ，ｔ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ　ｗｈａｔ　ｙｏｕ　ｍｅａｎ．」《ごめんなさい。あなたが何を言っているのか理解できません。》

いや確かに意味わからないこと言っているよ。前世でも特に魔法少女もので変身シーンを重要視していたわけではないし、べつに私が変身シーンで素っ裸になりたいわけでもない。でも、今の私にとってはとても重要なことなのだ。変身シーンがない。それはつまりーーーーーーー

「なのはちゃんの変身シーンが見れないって、ことだよおおおおおおっ！」

私は膝をつきうなだれた。

～～～～～

月村すずかです。春休みも残りわずかとなってまいりました。今はかすみちゃんの家になのはちゃんとアリサちゃんと一緒にお邪魔してます。

「かすみちゃ～～～ん！助けて～～！」

「なのはちゃんの頼みなら全力全開ですべて引き受けるよ！」

「ちょっとかすみ！あまりなのはを甘やかしすぎないの！」

今日集まった理由は残りの宿題を終わらせよう、というもの。去年はアリサちゃんの家で集まったから、今年はまだ行ったことがないかすみちゃんの家にしようということになりました。

序でに言うと、かすみちゃんとアリサちゃんはすべて終わっていて、私は計画通りあと少し。なのはちゃんは・・・・・・苦手な読書感想文やこくごドリルなどの国語の教科が全然終わっていない。それ以外は全部終わっているのだけど・・・・・・。涙目のなのはちゃん、いいかも。

「なのは！あんた、去年も言ったけど、ちゃんと計画通りやってたの!?」

「ちょっと、アリサちゃん。言い過ぎだよ」

「いや、これぐらいがちょうどいいのよ、なのはには」

凄く落ち込んでいるなのはちゃん。少しかわいそう。それを必死に写真に収めているかすみちゃんはちょっと騒がしいかも。まぁ、かすみちゃんの家だし、しょうがないか。後で写真貰おうかな。

「な、なのはだって、今回は計画通りしようと思っていたよ」

「じゃあ、なんで終わっていないのよ」
「いや、そのね。え～と、・・・にやはははは」
「笑ってごまかそうとしても、そうはいかないわよ！」
　アリサちゃんがどんどん追い詰めている。またショボーンとするなのはちゃん。かわいい。アリサちゃん頑張れ。・・・・・・あれ、私どっちの味方だっけ？
「だ、だって、分からないところが多すぎて」
「分からないところがあったら、他の人に聞くとかそう言ったことができるでしょ！」
「だ、だからね、かすみちゃんに訊いたんだけど・・・・・・」
　かすみちゃんの名前が出た途端、場の雰囲気が変わった。・・・・・・またかすみちゃんのせいなんだ。なのはちゃんに何かあればそれはだいたいかすみちゃんのせいっていうのが、定着しだしているような気がするのだけど・・・・・・。
「・・・はぁ、・・・ごめんなさい、なのは。またかすみのせいなのね」
「ちょ、ちょっと、どうして私のせいになるのよ！」
「あんた。なのはから宿題についてたずねられた時いったい何をしたのよ？」
「別にいつも通りだったよ。取り敢えず、電話で聞いてなのはちゃんの家まで行って、この間作ったメイド服とかゴスロリ衣装とか着せて写真撮影。でそのあと色々と変身ものの作品の変身ポーズをしてもらって「何宿題の邪魔してんのよ！」」
　いいな、かすみちゃん。私もメイド姿のなのはちゃん見たかったな。
「というか、なのはもなのはよ！普通に断ればいいじゃないそんなの！」
「にゃ、にゃはははは・・・・・・」
「・・・もしかしてだけど、それって毎回？」
「ええそうよ。ほぼ毎日なのはちゃんから電話があって、もうね、幸せ絶頂の春休みでした♪」
「・・・・・・なのは、今度からかすみじゃなくて私かすずかに訊きな

さい」
「え?・なん「なんでもよ!」・・・はいなの」
　なんだか、アリサちゃんがヒートアップしてきた。いつもは冷静なアリサちゃんだけどこうなってくるとたまに言わなくていいことも言ってしまうことがある。流石に止めるべきだと思うのだけど。・・・・・・ちょっと入りずらい。
「ちょｔ、ちょっとまってよアリサちゃん!・私から至福の時を奪おうというの!」
「知らないわよあんたのことなんて」
「そ、そんな。確かになのはちゃんが魅力的だからと言って、独り占めするのはどうかと思うな!・私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律に違反するよ!」
「独占禁止法ね。なのははものじゃないのよ!・もの扱いするあなたよりはちゃんと友達として見る私たちのほうがなのはのためになるわよ!」
「流石だよ、アリサちゃん!」
　かすみちゃんはすごく笑顔でアリサちゃんをほめた。なんだろうこれ。ぽんぽんと出てくる漫才みたい。
「いや～、冗談で言ったとはいえ、すぐにそんな返しをできるとは思わなかったよ!・流石アリサちゃんだ!・なのはちゃんポイント２００Ｐを差し上げましょう!」
「・・・・・・はぁ。こいつに何を言っても仕方がないわね」
「おやおや?・そんなことを言ってもよいのかな、アリサちゃん?」
　そう言ってポケットから何かしら機械を取り出した。それを皆に見せるようにボタンを押す。
『ちょｔ、ちょっとまってよアリサちゃん!・私から至福の時を奪おうというの!』
『知らないわよあんたのことなんて』
『そ、そんな。確かになのはちゃんが魅力的だからと言って、独り占めするのはどうかと思うな!・私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律に違反するよ!』

『独占禁止法ね。なのははものじゃないのよ！もの扱いするあなたよりはちゃんと友達として見る私たちのほうがなのはのためになるわよ！』

カチャ。取り出したのは録音機でした。

「これでアリサちゃんは愛するものとしてなのはちゃんをもの扱いする輩から正義のお説教をした。つまり、アリサちゃんのなのはちゃんに対する愛が再確認できたということだ！」

「かすみ、またそのパターンなわけ？流石に疲れてきたんだけど・・・・・・・」

心底うんざりした顔でローテーブルに突っ伏すアリサちゃん。こういった会話はこれで何度目だろうかと数えてみるが少なくとも二十回以上は繰り返しているはず。

「そ、そんなことより手伝ってよ～～～！」

なのはちゃんの絶叫。さっきのやり取りの間ずっとなのはちゃんは宿題をしていた。手伝いたいのだが、かすみちゃんみたいに手伝ったらなのはちゃんのためにならない。横からアドバイスをするくらいしか私たちにはできることがないのだ。

「さてと、流石にまじめな話をしましょうか。・・・なのはちゃん、終わりそう？春休みあと一週間しかないけど・・・・・・・」

「・・・・・・・かすみちゃん」

「アリサちゃん、ここは「駄目よ！」なのはちゃんが困っているんだよ！助けようよ！」

「別に助けるのはやぶさかじゃないんだけど、あんたの場合答えをただ教えているだけじゃないの！本当にそんなんでなのはのためになっていると思っているの？」

「い、いや。だってね、こんな簡単な問題、どうやって教えたらいいか分かんないんだもん」

「・・・・・・・どうせなのはは、そんな簡単な問題も解けないの」

「あああ、いや違って、なのはちゃん違うの！これは言葉のあやというか」

「かすみちゃんなんて知らない！」

「グフッ！」
かすみちゃんに精神攻撃。効果は抜群だ。かすみちゃんは畳の上に倒れた。かすみちゃんは今にも息絶えそうだ。しかし、アリサちゃんは見て見ぬふりをした。
「さてと、やっぱりここは教え上手なすずかだけが頼りよね」
「すずかちゃ～～～ん！」
「はいはい、なのはちゃん♪」

まぁ、色々とありましたが、結局いつも通りになりました。

「そう言えば、あんた。さっきメイド服とか作ったって言ってたけど・・・・・・まだ復活してないわね」
「あ、そうなの。かすみちゃんね、お洋服作るのとっても上手なの。なんでもかすみちゃんのおばあちゃんのお部屋に布類が多くて、捨てるに困るからってことでかすみちゃんがお洋服にしているんだって」
「はぁ、意外な才能ね・・・・・・」

第一話　魔法少女ハーレムなのは計画　始動

夢を見た。始まりの夢。すべてはここから始まったのだ。

なんて考え深くなってしまった朝。寝起きはいつも通り五時。え？小学生にしては早いって？朝食を作るにはちょうどいい時間だと思うのだけれど。最初の頃はおじいちゃんが作っていたのだが、台所が悲惨なことになるので今は私が作ることになっている。まぁ、前世でも料理はできるほうだったので別に苦も無くおじいちゃんも味に対しては特に何も言わないので楽といえば楽である。これって、オリ主系二次創作のテンプレだよね。まぁ、だいたいのオリ主が小学生で独り暮らしっていう意味の分からない設定だけど・・・。

話を早起きに戻すが、ここから学校までちょっと距離がある。だから、歩いて登校するにはちょうどいい時間なのだ。え？バスがあるじゃないかって？月一万よ！高い！私のおこづかい半年分が飛んでしまうよ！そんなことに使うのならなのはちゃんに着せる衣装を作るのに使う。それが私の信条よ。なのはちゃんもバス通だから一緒に登校できるじゃないかって？そんなこと知っているわよ！ただ違う方向だから同じバスじゃないのよ！ちくしょおおぉぉっ！

そんな重要で悔しいことを再確認しながら布団を片付け着替え終え部屋を出る。途中居間で新聞を読んでいたおじいちゃんにおはようを言って、台所に向かった。

夢はあの夢でした。物語の始まり。男の子が襲われている不思議な夢。なのはちゃんも同じ夢を見てその日にフェレットを拾い魔法の世界へと踏み入れていく。そんな始まりの夢。

・・・・・今思ったけど、私なのはちゃんと同じ夢見たんだ。やったー！めっちゃうれしい！確か同じ夢を見てしまうのは同じことを考えているからだとか。やばい朝から頬が緩みっぱなし。

ま、まぁ、そんな妄想は取り敢えずおいて、朝食の準備を。いつも通り、ごはんに味噌汁、目玉焼きに納豆と軽くサラダ。おじいちゃんが朝はこれじゃないと調子が出ないらしい。私もその生活に慣れてしまって朝食はこれ以外を考えられなくなってしまった。

さてと本日はどうしますかね。なのはちゃんたちは今日は塾だ。そして、その行きにユーノくんを発見するというのが原作の流れ。
しかし、私は塾には通っていない。これもお金がかかるからという単純な理由で。本当は学校も公立のほうに行こうとしていたのだが、なのはちゃんがいるほうがいいだろうということでおじいちゃんが私立に通わせてくれている。バス代も出そうと言ってくれたんだけど、ねぇ。・・・・・・まぁ、負担をかけたくないので勉強は頑張っています。
だから、そこでの原作介入はたぶんできないだろう。できるとすれば今夜。ジュエルシードの暴走体がなのはちゃんを襲うとき。
こちらにはデバイスのアルファスがある。アルファスによれば私の魔力資質は魔力量が約５０万で推定魔導士ランクはＡＡ?。ジュエルシードがＡＡかＡＡ?ランクのロストロギアだった気がするからギリで封印できない。魔力量を増やす訓練や魔法の練習はしているのだが、たったの数週間では間に合わなかったようだ。やはりなのはちゃんが封印する形になるのだろう。
つまり、私の役目はなのはちゃんが絶対に怪我をしないようにすることだ。まぁ、それぐらいしかできないとも言えるし、気をぬいたらそれすらもできないということでもある。
そして、私の目標も忘れてはいけない。そう、『魔法少女ハーレムなのは計画』だ。原作のフェイトちゃんやユーノくんのなのはちゃんとの関係はどこか期待させてくれるような気がするが、私はそれ以上の数をなのはちゃんに熱中させたい！男も女も関係なしに！なのはちゃんに恋い焦がれろ！そのための第一段階は現在も継続中だ。
と、ごはんが炊けたので朝食にしますか。
そう言えば、なぜアルファスはおじいちゃんの家にあったのだろうか?やはりおじいちゃんが管理世界の住人だからかな?でもおじいちゃん魔力ないから使えないし疑問が。アルファスは何も覚えていないとしらを切っているが明らかに何かを隠している。まぁ、なんとかなるだろう。
料理を居間に運び並べて手を合わせていただきます。今日もごは

んはおいしいです。別に私が作ったからじゃないよ。誰かと食べるのがとてもおいしいから。

～～～～～

「将来か～・・・」

そんな言葉が口から出る。先程の授業。将来の仕事について。深く考えたこともあれば、しかし答えが出るものでもなかった。今はお昼休み。友達のアリサちゃんとすずかちゃんと一緒にお昼ご飯を食べているところ。かすみちゃんは少しの間職員室で先生とお話し。あとで屋上に来るそうだ。

「アリサちゃんとすずかちゃんは、もう結構決まっているんだよね？」

「うちは、お父さんもお母さんも会社経営だし、いっぱい勉強して跡を継がなきゃ。・・・ぐらいだけど？」

「私は機械系が好きだから、工学系で専門職がいいな、と思っているけど」

「そっか、・・・ふたりともすごいよね」

無意識のうちにうつむいてしまう。たぶん、こんなにも具体的な将来の夢がある友達二人が少しうらやましくて。

「でも、なのはは喫茶翠屋の二代目じゃないの？」

「うん、・・・それも将来のヴィジョンの一つなんだけど・・・・・」

私が翠屋で働く姿を想像する。今でもお店のお皿洗いや給仕を手伝うこともあるし、何より働く両親の姿を間近で見てきたから他の仕事よりも具体的にイメージができる。あそこでお客さんの接客をしコーヒーを入れたりケーキを作ったり、時々クリスマスの時みたいな書き入れ時に忙しくて徹夜したり。瞼を閉じれば将来あの店にいるのがたやすく思い浮かぶ。

だけど、――――

「やりたいことは何かあるような気がするんだけど、・・・まだそれが何なのかはっきりしないんだ。私、特技も取柄も特にないし」

「バカチンッ！」

大きな声とともにレモンが飛んできた。驚いて顔を上げるとアリサちゃんが立ってこちらを睨んでいる。
「自分からそういうこと言うんじゃないの！」
「そうだよ！なのはちゃんにしかできないことときっとあるよ！」
すずかちゃんからも彼女にしては大きな声でアリサちゃんの言葉にうなずいた。
「だいたいあんた！理数の成績はこの私よりもいいじゃないの！それで取柄がないとはどの口が言う訳!?」
飛び掛かるアリサちゃん。逃げようとしたのが逆に背中から押さえつけられて口を引っ張られる。
「ひ、ひたいよ！あふぃらちゃん！だった、なにょは、ふんへいひはてゃし！」
「ああ”ん!?」
「はいくもにはてはし！」
「ちょ、ちょっとふたりとも！だめだよ？ね、ねえってば！」
「何してるの？三人とも？」
私たちとは違う声がした。みんなそっちのほうを向くと、お弁当を小脇にカメラを構えたかすみちゃんがいた。カメラから絶え間なくシャッター音が聞こえてくる。
「はふみひゃん！はふはてー！」
「ごめんね、なのはちゃん。何言っているのかはわかるけど、今可愛く撮れているからちょっと待ってね」
自分で言っといてなんだけど分かるんだ。
「・・・・・・あんたもたいがいね」
そう言って私を開放するアリサちゃん。うぅ～、お口がちょっと伸びたよ～。
「あれ～？そんなこと言えるのかな、アリサちゃん。周りに人集めて、なのはちゃんとイチャイチャする人には言われたくないな～」
「な!?」
口元をなでながら周りを見ると、確かに学校のみんなが面白そうなものを見るかのように集まっていた。

「い、いやこれはっ！」
「流石の私でもここまで人を集めてまではしないな～。と言う訳で、アリサちゃんになのはちゃんポイント３０Ｐ」
「ちょ、あんたは黙っときなさい！これは全部なのはのせいよ！」
　そう言いこちらを指さすアリサちゃん。そこで面白いことを思いついた。少しだけ体を起こしアリサちゃんのほうに斜めに体を傾ける。顔は少しそらし軽いこぶしを口元に添える。
「あ、アリサちゃん。なのはのこと愛してくれるのはうれしいんだけど、ちょっとゴーインだったの」
「ちょっ！ちがっ！うわあああああぁぁぁぁっ！／／／」
　あっ。アリサちゃんが崩れ落ちた。うなだれて顔は見えないが、真っ赤な耳が髪の間から出ている。すずかちゃんが遠いものを見るようにアリサちゃんを見ていた。なのはの口を引っ張ったお返しなの！かすみちゃんから教わったアリサちゃんをノックアウトする方法、覚えていてよかった♪ポイントはしゃべりながら恥ずかしそうにチラッチラッと目線を動かすこと。
「ぐふっ！」
　微笑むと、今度はかすみちゃんも崩れた。
「え？え！な、なんでかすみちゃんも!?」
「・・・・・・な、なのはちゃんの、悪戯っぽい笑顔に、・・・やられ（ガクッ）」
「ちょ、ちょっと、かすみちゃん！かすみちゃあああああぁぁぁぁん！」

　ふたりが復活するまで少し時間がかかりました。

「そ、そう言えば、かすみはなんで職員室に呼ばれてたの？」
　まだ少し顔が赤いアリサちゃんがかすみちゃんのほうを疲れたように訊く。今度はかすみちゃんも入れてお弁当を一緒に食べている。
「あ、ああ、あれね。えっと、春休みの自由研究があったじゃない？それで呼ばれたのよ」

「あれ？何か問題でもあったの？」
　すずかちゃんが不思議そうに訊ねる。
「問題というか、逆で・・・・・・」
「？何よ、歯切れが悪いわね。あんたの自由研究がどうかしたのよ？」
「たしか、かすみちゃんの自由研究って、重力定数がどうとかって話だったよね？」
「ああ、うん。振り子を使った重力定数の求め方。えっとね、それがなんだか大学の先生に好評で、生徒たちの実験の見本にしたいとかで・・・・」
　・・・やっぱりかすみちゃんもすごいな。そう言えばこの間先生がかすみちゃんのことを「この学校始まって以来の神童」と言っていたのを小耳にはさんだことがある。さっきアリサちゃんは私が理数の教科がすごいと言ってくれたけど、正直な話かすみちゃんには敵わないんだよね。学校の点数は同じ満点を取ることが多いけど、私と違ってかすみちゃんは大学の初歩の計算ができると言ってたし。・・・・・やっぱり私には取柄がないんだよね。
「かすみちゃん、すごいね」
「いや～、なのはちゃんに言われると先生に言われるより数万倍もうれしいよ♪」
「やっぱりすごいよ・・・」
「？・・・それより、さっきはどんな話をしてたの？」
　私の声が少し暗いのに気が付いたのか、話を変えようとするかすみちゃん。けれど、結局それは元に戻るだけで、私に夢がないことを再確認してしまうだけ。
「えっと、将来の夢について話してたの。私は工学系、アリサちゃんは経営関係。かすみちゃんは？将来何になりたいとかあるの？」
「なのはちゃんのお嫁さん」
「即答かい！」
「にゃ、にゃはははは・・・」
　なんだか、想像できてしまうのがある意味恐い気が。でも、それならやっぱりかすみちゃんも将来の夢は決まっていないのかな。自分

だけで悩んでしまったけど、正直まだまだ小学生だし、そんなに深く考えるようなことでもないのかも。かすみちゃんの夢を聞いたら少し安心した。
「あんたねぇ、少しはまじめに答えなさいよ・・・」
「ん～、まぁ、真面目な話をすると、このまま何もなければ理論研究者とか面白そうでいいんだけどね」
　ズキッ
「理論って、物理？」
「そうそう！特に素粒子や宇宙ってロマンがあると思わない？」
　ズキズキッ
「あんた、ときどき男の子っぽいこと言うわよね」
「えぇ～、女の子が考えてもいいでしょーが。ロマンや夢って言うのは人が恋い焦がれるものなんだよ！それを持った時の人間は本当に素晴らしくうつるものなの」
　ズキズキズキッ
「あ～、なんとなくだけど分かる気がするよ、かすみちゃん」
「すずかちゃんも工学とはいえ理系だからね。アリサちゃんはどちらかというと文系だしこの気持ちを理解できないんだろうな～」
「なによそれ」
「ね、なのはちゃん♪なのはちゃんもそう思うよね♪」
「・・・」
「あれ？なのはちゃん？」
「ふえ？」
　気が付くとかすみちゃんが心配そうにこちらを見ていた。
「どうしたの？なのはちゃん。何か悩みごと？」
「あ、えっと、」
「そうそう、それでね！なのはったら、将来の夢が思いつかないからって自分は特技も取柄もないって言うのよ！ちょっとふざけているとおもわない！」
　アリサちゃんがまた飛び掛かりそうな勢いで怒鳴りあげる。だって、本当のことだもん。自分には特技も取柄もない。だから、みんな

のように何かに対してロマンや夢を感じたりしない。あまり面白くない子。
「・・・・・・なのはちゃんはね、やさしいじゃん」
「・・・・え？」
　顔を上げるとかすみちゃんが優しく微笑んでいた。屋上の風はかすみちゃんの髪を流す。その髪は私を包み込もうとしているようだ。そんな気がした。
「なのはちゃんの特技はね、困っている人や悲しんでいる人が困っているって悲しんでいるって気が付くところ。なのはちゃんの取柄はね、困っている人を助けようとすること。悲しんでいる人に話しかけようとすること。・・・・・・言葉で言うのは簡単だけど、たぶんほとんどの人ができない。それほど難しいこと。でも、・・・それをできるなのはちゃんは多くの人を救える。救われた人はきっとなのはちゃんのことが大好きになる。アリサちゃんやすずかちゃん、もちろん私だって。そうだよね？アリサちゃん、すずかちゃん」
　呆気に取られていた二人に言葉を投げるかすみちゃん。
「え、ええ、もちろんよ！なのはがいなかったら私たち友達じゃなかったんだから」
「そうだね・・・私もただ臆病で引っ込み思案な性格から変わらなかったと思うし」
　投げられた言葉を拾って返すアリサちゃんとすずかちゃん。そこには一切誇張がないと思えた。私の勘違いでなければ、三人とも純粋な気持ちをそのまま伝えてくれている。
「それとも、私たちを疑っている？こんなにもなのはちゃんのことが大好きなのに」
「・・・・・・え、えっと、ごめんなさい」
「そこは謝罪じゃないでしょうが」
　アリサちゃんの呆れた声が耳をくすぶる。なんだか今日は、みんなには心配してもらってばかりだな。一生懸命に伝えようとしてくれて、そのおかげで一つ一つの言葉に「大好き」って気持ちが感じられる。なんですぐに気が付かなかったのかな。少し恥ずかしくなって

きた。どうしよう。でも、ここまで言ってくれたのだからちゃんと言わないと。小さくて短い、でも確かな言葉。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ありがとう、みんな」

「・・・・・・・・・・・グハッ!」

かすみちゃんが血を吐いて倒れた。

「え!ちょ、ちょっと、かすみちゃん!?」

「え?!ほ、ホント大丈夫なの?!ちょ、ちょっと、血が出てたけど!」

「か、かすみちゃんってば!どうしたの?!」

急に倒れるのはいつものことだけど、今回は血を出した。ただ事ではない雰囲気に場が苦しいものになってくる。

かすみちゃんが必死に何かを言おうと口を動かす。焦る私は取り敢えず口元に耳を近づけてどうにかかすみちゃんの言葉を聞き取ることができた。

「・・・恥ずかしがりながらの、ありがとう、最高・・・・・・」

満足そうな顔からは、絶え間なく鼻血が出ていた。

もう、かすみちゃんなんて知らない。

第二話　魔法少女ハーレムなのは計画　実行

念話が来るまで準備をしておく。

といっても、服とかをすぐに着替えれるようにってだけなんだけど。

今のところ原作介入はなのはちゃんの補助だけを考えている。だから、防御系・回復系・結界系・拘束系の魔法を先に覚えた。あれ？ユーノくんと同じ立ち位置？まぁ、前半はユーノくん怪我で魔力がないから、まぁいっか。

普通魔導士は使う魔法に適正の有る無しを伴うらしい。つまり、攻撃魔法が得意な人が必ずしも防御魔法が得意と言う訳ではないということだ。原作のなのはちゃんは防御攻撃回避ともに得意な感じだが、回復系の魔法はほとんど使っているシーンがない。あったとしても、海上のジュエルシードでフェイトちゃんが無理したときに魔力を分けた、という微妙なラインでだ。

まぁともあれ、アルファスとは初戦になるだろう。実際自分自身にあまり期待ができない。アルファスが言うには、魔力量が少ないのは対人戦の場合うまくやれば勝てるが、ロストロギア関係の戦闘では明らかに魔力量がものをいうらしい。神様からもらった転生特典もうまく使えば戦闘でも使えるが、それは対人の場合でジュエルシードの思念体にはあまり意味がないだろう、と思う。

そのとき、ノイズ音が聞こえた。波長の合っていない電波の独特な音。それがだんだんとチューニングされていくかのように、音が男の子の声へと聴こえてくる。

『ーーーこえますか？僕の声が、聴こえますか？』

はい、聞こえました。待ってたよ。

「Ｍｙ　ｌａｄｙ！Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｔｒａｎｓｍｉｓｓｉｏｎ　ｏｆ　ｍｉｎｄ　ｔｏ　ｗｉｄｅ　ａｒｅａ！」《お嬢さん！これは広域思念通話よ！》

「だ、だれが、送ってくるのかな？」

ユーノくんが送っています。知っているけどアルファスには内緒

なので、そうやって演技しておく。自分でやっといてなんだが、すごく白々しい。
『聴いてください、僕の声が聞こえるあなた！お願いです、僕に少しだけ力を貸してください！』
「Ｉ　ｃａｔｃｈ　ｗｈｅｒｅ　ｏｆ　ｓｅｎｄｅｒ．Ｗｈａｔ　ｗｉｌｌ　ｙｏｕ　ｄｏ？」《場所を特定できたわ。どうするの？》
『お願い！僕の所へ！時間が！危険が！もう！』
　そこで念話はプツリと消えた。
「・・・・・・行こう！アルファス」
　ここで行かないという選択肢もあった。原作介入して本来の物語から姿を変えてしまうという恐れもある。危険な思いをして最悪死んでしまうこともあり得た。世界が滅びる可能性も考えられる。しかし、そんな可能性のことはこの際どうでもいい。もちろん重要なことではある。いや、決して無視してはいけないことである。だけれども、なのはちゃんが危ない目に遭っている。優しいなのはちゃんが可愛いなのはちゃんが苦しい思いを辛い思いをしてしまう。私が原作介入をする理由はそれだけでいい。
　もちろん、私が死ぬことも世界が滅びることも絶対に阻止する。なぜなら、なのはちゃんが悲しむから。これも理由はそれだけでいい。たくさん理由を考えるのもいいことだが、こちらのほうがシンプルでかつ核心を突いていると思うから。
「取り敢えず、ばれないように、っと」
「誰にばれないようにじゃ？」
「だれって、・・・お、おじいちゃん！」
　おじいちゃんが出入り口の引き戸からヒョコッと顔をのぞかせていた。あれ？これってなんかフラグ立ってた？

～～～～～

「ご、ごめんなさあああぁぁぁぁい！」
　パトカーのサイレンが鳴り響く中、私高町なのははその場から逃げ

出すのであった。
胸に抱くのはフェレットさんと魔法の杖レイジングハート。絶賛今していることは国家権力からの逃亡。悪い人をお世話するのはいいけど、私をお世話してくれるのはごめんこうむりたいの～！
息が苦しくなってきても走り続ける。取り敢えず、どこか落ち着けてお巡りさんにも見つかりにくい場所は・・・。公園！ちかくの公園までとにかく頑張ろう。

「はぁ、はふ、はぁ、はぁ、hぁ・・・・・・」
取り敢えず椅子について落ち着く。パトカーは公園の脇を通っただけでこちらに気が付いていない様子。ひとまず安心かな。
「すいません」
「あ、起こしちゃった？ごめんね、乱暴で」
フェレットさんが目を覚ました。先ほどの戦闘、どうやらこのフェレットさんは無理をしていたらしくあの後すぐに意識を失っていたのだが、起きてくれた。
「怪我痛くない？」
「あ、けがは平気です。もうほとんど治っているから」
そう言って巻いていた包帯をほどく。
「ホントだ。怪我の痕がほとんど消えてる。すごーい」
「助けてくれたおかげで、残った魔力を治療に回せました」
「よくわかんないけど、そうなんだ。・・・・・・ねぇ、自己紹介していい？」
「あ、うん」
「えっへん♪私、高町なのは。小学校三年生。家族とか仲良しの友達はなのはって呼ぶよ」
「僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だから、ユーノが名前です」
「ユーノくんか。可愛い名前だね♪」
そう微笑んだのだが、フェレットさん改めユーノくんはどこか申し訳なさそうに頭を下げた。

「すいません。あなたを・・・「なのはだよ」・・・なのはさんを巻き込んでしまって」
「あ、その・・・」
　あまりにもすまなさそうに首を垂れるユーノくん。そんな姿に一瞬だが言葉が止まってしまう。そんな悲しそうにしないでほしい。どうにかしてあげたい。そう思ったから、
「えへ♪えっと、たぶん、私平気。あ、そうだ。ユーノくん怪我してるんだし、ここじゃ落ち着かないよね？取り敢えず、私の家にいきましょう。あとのことはそれから！・・・・ね♪」

～～～～～

「こんなことって・・・・・・・」
　私頑張ったよ。おじいちゃんを何とかごまかし、寝室に連れていき一応睡眠魔法で眠らせて、身支度してセットアップして、認識阻害の魔法をかけてそれで空を飛んでやってきました。というか、睡眠魔法とかあったんだ・・・。やっぱりアルファスに原作のことを秘密にしておくのは不便かな。
　眼下に広がるのは、ぼろぼろになった動物病院。何かしらの戦闘が行われたような光景。しかし、そこにはこの光景を作り出した存在がもうすでにいない。
「・・・・・・・・・うそでしょ、ほんとに」
　そんな声は爆発騒ぎを聞きつけた野次馬と今も鳴っているパトカーの音にかき消されていた。ゴスロリ調のバリアジャケットが風に揺れる。
　今頃なのはちゃんはユーノくんとの自己紹介でもしているのだろうか？それともすでに家に帰っていて恭也さんの説教でも受けているのだろうか？何にしても私が言うべきことは
「遅すぎたよ～～～・・・・・・」
　空中で肩を落とす。何よ！誰がこんな展開を望んだのよ！誰も望んでないよ!!おいっ！こんな展開にした奴出てこい!!こんな悲劇は

私は認めない！いや、悲劇は救いがあるからまだいい。これは惨劇だよ！さ・ん・げ・き!!え？喜劇だって？なのはちゃんの勇士が一切見れなかったのに喜劇であるはずがないでしょが!!分かってんのかこんにゃろおおおおおおおおぉぉぉっ!!!

・・・・・・むなしくなってきた。疲れてるわね。・・・ああもう。見れなかったよ。なんなのこれ？本当にこんな仕打ちないよ。・・・・・・真夜中の出来事、黒い影、狙われるマスコットキャラ、魔法の力を手に入れて、活躍、だけどピンチに、そこで登場する友人、ふたりの力で敵を封印、そして秘匿すべき魔法、ゆえに秘密を共有するふたり、今まで以上に仲良しさんに。・・・・・・そう妄想していた時が私にもありました。・・・え？今でも十分仲良しだって？いやね、最近はアリサちゃんとすずかちゃんになのはちゃんをとられ気味なのよ。なのハーレムが着実にできていくのはいいんだけど、私となのはちゃんの時間が最近めっきり減っててね。一緒にいてもたいていアリサちゃんかすずかちゃんがいるし。もちろんふたりともいい子だよ。私もふたりのこと大好きだよ。でもねえ～、・・・・・。

そう言えば最近、アリサちゃんもすずかちゃんもどんどんなのはちゃんと仲良くなってきて、時々私よりもなのはちゃんのこと詳しかったりするし、なんだか幼馴染ポジションが脅かされてきたな～～。いや、すでにそんなのないか。A・HA・HA・HA・HA・・・・・。なのはちゃんポイントも私だけマイナスだし。これじゃ私だけ置いてきぼりになっちゃうよ・・・・・・。

なんだか久しぶりにネガティブになってきた。

そもそもなのはちゃんの近くに居れるだけで十分幸せというのに、私は欲張ってそれ以上をとろうとしたからこんな仕打ちを受けたのかな？なのはちゃんのためだとか言っておきながら結局自分のために、自分の欲望のためになのはちゃんを見ようとしているようにも見える。それってあれだよね。エゴって言うんだよね。・・・・・・以前アリサちゃんが言っていた独占禁止法のことがひしひしと伝わってくる。あの時は冗談だったけど、もしかしたら潜在意識の中になのはちゃんをもの扱いしていたのかな？・・・・・・・なんだかな～、そ

う思ってくるとひどく自分が醜く見える。なのはちゃんとはじめて出会った時、私のせいで傷つけてしまったし、苦しめてしまったし、ひどくひどく自分のことしか見えていなかった。あのときからなにも・・・・・・・・・・・・。

って！この話は解決したの！いちいちぐじぐじ考えていたらまたなのはちゃんが悲しそうな顔するからダメって自分で決めたじゃん！どんなときでも、私は私らしく！なのはちゃんのため私は生きるって決めたんだ！こんなことでまた振出しに戻ってもただ自分を責めたという自己満足だけで終わってしまう！そんなのダメぇっ！

よし！かすみ、闇落ちエンド回避!!これはあれだよ、あまりにも落ち込み過ぎたからとかじゃなく、演技だよ！演技！そう、過去に闇があるほうが格好いいみたいな！失った片目がうずく～、とかそんな感じ！って、それ厨二病じゃん!?私厨二病だったの?!いやいや、私はなのはちゃんを愛している！それだけ!!厨二病でも何でもない!!

あれ？なんか話が全然関係ない所に行っている気がする？と、取り敢えず、今日は本当に何の役にも立たなかった。いいですよ～だ。どうせ役立たずですよ～だ。本当にどうしようかな。取り敢えず、原作介入の計画は最初っからやり直しになった。まぁ、計画通りに物事が進むほうが少ないんだから、これぐらいじゃへこたれません。

・・・・・今思ったのだけど、私が原作介入する意味ってあるのかな？戦闘ではユーノくんと同ポジションになりそうだし。よくよく考えたら原作でなのはちゃんが怪我したのって確かフェイトちゃんとの初戦闘、次元震、あとはA，sでヴィータちゃんとの初戦闘、空白期間での撃墜、ゆりかごでの戦闘、その後の後遺症・・・・・・普通にありますね。でも、前半だけで見るとひどい怪我がない。もちろんなのはちゃんに怪我をしてほしくないし、後半のは本当にどうなるか分からないからなのはちゃんを守る方向で決定はしているのだけれど・・・・・前半は逆に要らないんじゃないのかな？フェイトちゃんとの戦闘を通しての話し合い。これはフェイトちゃんを救う上でもフェイトちゃんをなのはちゃんの虜にさせる上でも必要不可欠だ！そうすると逆に、私邪魔な気がするのだけど・・・・・・。かすみ

ちゃん邪魔！とか言われたら私立ち上がれなくなるんじゃないかな・・・・・・。

・・・・・・取り敢えず、今日のところは帰ろうかな。

方向転換しようとしたところで少し目が留まる。大勢の野次馬。こんな時間でもよくこれだけ集まってくるよね、と思うのだが。その中でどこか見たことがあるようなアッシュグレーの肩に流れる長髪。背筋はピンッとしてどこか礼儀正しそう。そして、なんとな〜く猫っぽい・・目が合ってしまった。

「・・・」

少し距離があり認識阻害もあるのに、バッチリ目が合った。あれ？なんかやばくない？

取り敢えず、・・・・・・逃げる！

訳が分からず、取り敢えずやばいというのを理性のどこかが判断した。思い出した！あれは確か双子の猫の使い魔、姉のほうのリーゼアリアさんだよ！なんでここに?!ヴォルケンリッターの皆さんはたしか十月くらいに闇の書から出てくるはずだよ?!こんな早い時期にそれもこのタイミングでいるとは思わないでしょ！あり得るとしたら、早めの下見?何かしらの不安要素を叩き出して闇の書に集中したいとか?そんなのいつだっていいでしょうに！何故に今日?!

と、取り敢えず、こっちは自分が出せる最速で逃げてきた。あと少しで家だ。目が合ってすぐに逃げてきたし、流石に追ってこれないよね？

後ろを向く。誰もいない。

上を向く。誰もいない。

下を向く。誰もいない。

左右確認。誰もいない。

もちろん、前も誰もいない。

ここでようやく速度を落とす。流石に疲れた。本当の本気で逃げてきたからね。魔力と集中力がない。色々と無駄が多いのだろう。

もう家が目の前ーーーーー

「Ｌａｄｙ！」《お嬢さん！》
「へ？・・・ふあぁ?!」
　いつの間にか二本の輪っかに縛られた。はい?!どこから飛んできたの?!目視ではどこにもいないし、アルファスも気づいてなかったみたいだし！
「時空管理局リーゼアリアと言います。あなたに少しだけ訊きたいことがあるんだけど」
　いつの間にか目の前にさっきはなかった猫耳と尻尾を生やしたお姉さんがいた。

～～～～～

「なのはちゃ～～～ん!!!」
　バスを降りるとなのはがかすみにしがみ付かれていた。
「か、かすみちゃん！どうしたの？」
「昨日辛い目に遭ったから慰めてほしいの!!」
　詳しいことは言わなかったが、昨日やりたいことがあったが他人に邪魔されたとか。そんな感じの話。呆れてものが言えない。
「まったくそんなことでいちいちなのはを頼りにしてたらなのはの身が持たないわよ」
「うぅ～～～、ご、ごめんね、なのはちゃん」
「あ、いや、私は別にいいよ♪かすみちゃん身体温かいから気持ちいいし」
「夏場は暑いけどね」
「なのはちゃ～ん！アリサちゃんがいじめる～～！」
「もう、アリサちゃん。駄目だよ？かすみちゃんが泣いちゃうよ」
「はいはい、教室行くわよ」
　もう本当にやってられない。
　かすみは教室までずっとなのはから離れなかった。それがあまりにも目について他の生徒が奇異の目で見ていた。こいつ昨日は私が

なのはとイチャイチャしていた時周りの目がどうたらと言っていたのに人のこと言えないじゃないの！まったく・・・・・。あっ、・・・いや、別にあれはイチャイチャしようとしてイチャイチャしたわけじゃなく、いやいやそもそもあれはイチャイチャではなくて、ほ、ほらあれ、ものの例えというか、そう！言葉のあやというか、なのはがイチャイチャしてほしそうだったからイチャイチャしただけで、って、ちがっ、イチャイチャじゃない！えっと、これは、そ、そうだ！全部かすみが悪いのよ！かすみがイチャイチャとか、好きだとか、愛しているとか、そんな感じのことばっかりなのはに教えるから、こっちがそれに流されてしまっているのよ！そうよ！全部かすみのせいよ！ああもう！顔が熱い！

「どうしたの？アリサちゃん？」

「っ！な、なのは！な、なんでぇ!?」

いつの間にかなのはが目の前で顔を近づけていた。

「いや、アリサちゃん、顔赤いよ？」

その言葉を聴いて、私は教室までわき目も降らず走った。なんなのよ！顔合わせられないじゃない!!

教室につくとすぐあとからすずかがやってきた。

「アリサちゃん、だめだよ？廊下を走っちゃ」

「そんなの知らないわよ。全部かすみが悪いのよ！」

子供のような理論だ。ちょっとそれはないな～、と自分で思っていてもどうも止められない。悪い自分が出てしまっている。なんて情けないのだろうか・・・・・・。というかすずかも同じバスだから走ってきんじゃないのかしら？

すずかは困ったように自分の席に戻る。私も少し腑に落ちないことがあったが席に行きカバンの中の荷物を机に入れていく。教科書、ノート、筆箱・・・・・・次々と入れていく。

「あ」

一冊ノートを落としてしまった。とりあえず、机の中にものを入れてからにしよう。落ちたノートを見る。衝撃でページが開いていた。そのページを上にしている。開いたページには、友人たちの似顔絵

が・・・・・・・。

「・・・・・・・うわあああああぁぁぁっ！」

しまった！こっちのノートを持ってきてしまった！昨日の授業時間中にぼ～っと友達の似顔絵を描いたのだ。無意識のうちに描いたものだったからすずかたちにばれないようにしてたのに!?消せばよかったのかもしれないが、描いたものとはいぇ友人を消すのは嫌だった。だから、新しいノートに替えたというのに!!

「アリサちゃん、何してるの?」

かすみが現れた。なのははこちらを見ているが自分の席に行って荷物整理をしている。序でに私の席は窓際、一個飛ばしの隣がなのは、その斜め右後ろがすずかで、なんとかすみは私の前。

「あ、ノート落としてるよ?」

そう言って拾おうとするかすみ。この後の展開が見えてしまった。「流石アリサちゃん♪なのはちゃんへの愛がこもっているね♪なのはちゃんポイント５０００Ｐだよ♪」と言われていじられる。もしくは泣きまねして「ううぅ、ここまでアリサちゃんがなのはちゃんのことを好きだったなんて・・・これはなのはちゃん！なのはちゃんも大好きな気持ちを抱き着いてアリサちゃんに教えないといけないよ♪」とか言われていじられる。絶対そんなこと言わせるかぁぁぁぁぁあぁぁぁっっ!!!

拾って持ち上げるかすみの腕からノートをひったくる。

「・・・」

「・・・」

・・・

何の反応もなし。これは見られてないわね。きょとんとした顔をしている。本当に何が起こったのか分かっていない様子だ。

「ど、どうしたのよ、そんな顔して?ハトが豆鉄砲でも食らったような顔よ」

ノートをそっと机の中に隠しながらそう言う。よし！私の平穏は無事守られたわ！しかし、このあともこのノートを護らなければならない。そこが問題よね。

「・・・・・・ねえ、アリサちゃん？」
「ん？なによ？」
「今のって、なのはちゃんとすずかちゃんと、・・・私？」
「うわあああああぁぁぁっ!!!」
本日二回目。顔を押さえて机に突っ伏す。今日もまたこれをネタに一日中いじられてしまう。私の平穏はいつ来るのよ・・・・・・。
・・・・・・あれ？追撃が来ない？
おかしいと思って顔を上げると、じっと私を見ている。
「な、なによ？」
「いや、その、感慨深いというか、その、私もその中にいるんだ、というか・・・・・・」
「はぁ？そんなの当たり前でしょうが。なにいってんのよ？」
そう言うと今度は目を丸くして驚かれた。なに？こいつ？私友達として思われていなかった？いや、そんなことはない。いつも「大好き」とか直接言ってくるし、三年の付き合いだし。もしかして私から友達として見られていないと思ってたの？・・・・・・あり得る。あり得るからこそ、なんかむかつくわね。いっつもお気楽に私をいじり倒す癖にそんなこと思ってたの？こっちがどんだけ迷惑かけられているのか分かってないのかしら？ほんとにむかつく奴。
・・・・・・いや、そうじゃない。たとえあいつが本当にそう思っていたとして、それでも私はあいつに怒っているんじゃない。こっちは友達として見ているのにちゃんと伝わっていなかったことに対して、そしてそんな状況にした伝えなかった自分に対して、むかつく。
「かすみ」
「ん？なに、アリサちゃん？」
「私、あんたのこと大好きだから」
「う……………………………………………………………………
ん。
へ？」
・・・・・・・・あれ？あれ！ちょ、ちょっと待って！私大好きとか言ってしまった！なんで!?あ！かすみだ！かすみのせい

だ!!かすみがよく「好き」とか「愛してる」とか言うしなのはに言わせるしでつい自分の口から言ってしまった！つられて言うみたいに!!何してんのよ、私ぃ!!!
「え、えっと、アリサちゃん？そ、その、あの、えっと・・・・・・」
　かすみの頬がだんだん赤くなっていく。明らかに困惑していた。・・・・・こいつ自分が予想した展開じゃないとテンパるんだった。してやったわ！って、そうじゃないでしょ!!!!今かすみ明らかに勘違いしているじゃない！早く誤解を解かないと!!
「ちょ、ちが、えっと、と、友達としてよ！友達として!!こっちは友達として見てるんだから、しっかり自覚しなさいよね！それとも何？あんたは私のこと友達として見てないとか言うんじゃないでしょうね!?」
「い、いや、そんな訳！そ、そっか、友達ね、友達・・・そ、そうだよね～。アリサちゃんにはなのはちゃんがいるし、私にもなのはちゃんがいるし、どっちも先約があるよね～～。あはははは」
「そ、そうよ！先約があるものね・・・・・・って、ちょっと待ちなさい！」
「ふえ？」
　こいつはまだ混乱しているのか？それとも素なのか？狙ってやっているのか？・・・いや、今回は狙ってないわね。またきょとんとしているし。これって、一から説明しないといけないのかしら？頭が痛くなってきたわ・・・。
「かすみちゃん？どうしたの？」
「あ♪なのはちゃん♪なんでもないよ～」
　なのはとすずかがやってきた。正直助かった。あのままだとちょっとどうしていいかわかなかったから。今回のように途中で入ってくれるのは凄く助かる。
「そうなの？」
「そう言えば聞いた？三人とも？昨日行った動物病院で爆発事件だって。フェレットさんだいじょうぶかな？」
「？なにそれ？私聴いてないんだけど？」

「あっ、そう言えばかすみちゃんは一緒にいなかったよね。塾の行きにね怪我をしたフェレットさんをなのはちゃんが見つけてね、それで獣医さんに診てもらったんだけど。そこで事故だって。なんでもガス管が破裂したとかで」
「へぇー、そのフェレットさん大丈夫かな？」
「あ、あの、えっと、」
「ん？どうしたの♪なのはちゃん♪」
「そのフェレットさんなんだけどーーーーーーーー」
私は少し疲れて話を聞くだけにした。途中で相槌とかは打った気がするが、まぁ先程のやり取りが強烈すぎて仕様がないと思う。一応昨日のフェレットがなのはの家で飼えることとフェレットの名前をユーノって名前にしたのは聞いた。
そうして、予鈴が鳴った。

一時間目。国語。正直簡単すぎて詰まらなかった。
少し欠伸をしていると、前から紙を渡された。見ると

”アリサちゃん、ありがとう。私昨日少し悩んでいたんだけど、アリサちゃんの「大好き」って言葉を聴いて悩んでいたときの不安がなくなりました！本当にありがとう！私もアリサちゃんのこと大好きです。大好きな人に「大好き」って言われるとすごく温かい気持ちになれるよね。だから、私もアリサちゃんに「大好き」ってちゃんと声にして後で言います。アリサちゃんからもまた「大好き」って言ってほしいな♡
あなたが大好きな友達　茅野かすみ”

私は恥ずかしさで顔を机に突っ伏した。
今日も一日からかわれるのか、と思って。

第三話　魔法少女ハーレムなのは計画　再実行

次の日。

次の日っていうのは、リーゼアリアさんに捕まった次の日ね。あの後のことは正直思い出したくない。ん？何があったかって？な、なに恥ずかしいこと言わせようとしてんのよ!?こっちは長時間拘束プレイを強要されていたのよ！なのはちゃんならまだ知らず、他の女の人からそんなプレイをされても喜ばないよ!!え？なのはちゃんならいいのかって？何そんな当たり前なこと訊いてんのよ!?勿論でしょーが!!そのあとスターライト・ブレイカーで打たれたいよ!!!全力全開を感じたいのよ!!

・・・・・とまぁ、それはおいておいて。結論だけで言いうと、アリアさんからは厳重注意されただけでした。どうしてかと言うと、私があの爆発事故を引き起こしたことにしたからだ。何故って？今回のことはあまりにも予想外かつ原作大ブレイクの可能性がありすぎる。そこでいつもは半分以上なのはちゃんに分けていた脳内リソースも一部そこにまわしてアリアさんにどう説明するかを考えた。

まず前提として、原作関連の知識はいたずらに話さない。正直どうなっていくかわからないから。原作の知識は未来予知を超える。それは何が起きるかだけでなくどうして起きるかもわかるからだ。それほど強い力。だから、この世界の人たちには例外なく誰にも話さないようにしようと考えている。なのはちゃんが相手でもそう。たとえ迫られても・・・・・少し考えるかもしれないけど言わない。もちろん全体として良い方向に誘導はするだろう。なのはちゃんが辛くならない程度でね。しかし、原作知識としては教えない。・・・・・まぁ、未来を知らないほうが良いこともあるしね。

次に、ありのまま起こったことを話した場合。つまり実際に私が経験したこと。アルファスに出会ったこと、広域思念通話で呼ばれたこと、行ったら誰もいなかったことを言うということだ。しかし、それだとジュエルシード事件に必ずリーゼさんたちが関わってくる。彼女たちも管理局員だからね。忘れていたけどこの時のリーゼさん姉

妹は確かギル・グレアム提督とその使い魔として生きる伝説と呼ばれていたはず。つまり、現管理局最強戦力。もちろん彼女たちが戦闘に加わらなくてもアースラを呼んで原作よりも早く来る恐れもあった。そんなことになればなのはちゃんとフェイトちゃんの友情フラグがへし折られてしまうことに。それはフェイトちゃん闇堕ちフラグで、連鎖的になのはちゃんも自分を責めて同じく闇堕ちし、闇の書事件で誰も救えずにバットエンド。・・・もちろんこれは最も悪いケースであり、可能性の話だ。でも少なからずフェイトちゃんは救えない可能性は高い。救えたとしても時間がかかって闇の書事件に間に合うのか不安である。取り敢えず、リスクが高い気がする。まぁ、なのはちゃんがよりつらい思いをする可能性があったからその時点で言う気はなかったのだけど。

そして、ひらめいたのが、彼女たちの立ち位置を利用しようということ。リーゼさんたちは管理局員であり管理外世界で原因不明の魔法関連事件を無視できない。しかし、闇の書関連があるからあまり表だって活躍したくない。それなら私が魔法の練習で事故ったと言えば、多少怪しまれても本人が言っているし反省の色も見せるし、そうするとおおごとにはならなくなる。と、思った。

それでも結構穴があるからどうなるかと思ったが厳重注意といくらかの魔法禁止だけで済んだ。本当は管理外世界での過度な魔法使用はしっかりとした理由がない限り厳罰となるのだが、初犯ということで大目に見てもらえた。あと、魔法の管理外世界での秘匿もしっかりと叩き込まれて初めて解放された。何かあったときの連絡先も教えてもらったが、これは当分使わないだろう。上記の理由でA，sまでは封印かな。

しかし、魔法が使えないのは正直な話私にとっては大ダメージだ。魔法禁止でデバイスの一部が封印。もちろん、一定時間が経てば勝手に消えるのだが・・・・・・。その期間はどのくらいと思う？一か月よ！一か月!!具体的に、一か月Bランクまでの魔法しか使えない!!私はAランク周辺の魔法ばっかり覚えてきたからほとんど使える魔法がない。無印終わるまでほとんど何もできないじゃん!!え？なんで

初級魔法を覚えなかったのかって?それは転生特典の話になるから説明するのが面倒くさい!!べ、べつに初級魔法のほうが私にとって難しいとかそんな恥ずかしい理由ではないよ?ほ、ほんとだよ。

序でに、アリアさんがここにいた表向きの理由は休暇で妹のロッテさんと一緒に遊びに来たとか。まぁ、ありきたりな建前だよね。知っていない風に見せていたので騙された振りをした。向こうも信じてくれてたようだ。結構私って演技が得意なのかしら?こんど私がお姫様でなのはちゃんが王子様役の劇でも作ろうかな?もちろん逆でも、い・い・け・ど・ね♪

とまぁ、それが昨日の出来事でした。あと、アルファスには流石に全部話した。私が転生者であるとかこの世界がアニメになっているとか、まぁ色々と。丁度なのはちゃんがユーノくんからジュエルシードについての説明を受けるのと同じように授業中念話で。アルファスは最初驚いた感じであったが、協力してくれることになった。これでなのはちゃんを守り隊に強力な助っ人が登場した瞬間である。

そして、現在放課後。アリサちゃんとすずかちゃんとは先程分かれた。帰る方向が違うけど、久しぶりのなのはちゃんと二人っきりを味わいたかったので回り道だが途中まで帰ろうと二人並んだ帰宅道。

ジュエルシードが発動した。

なんで!もっと二人だけの時間を増やしてよ!!いやね、今日がその日であることは知ってたよ。でもね、昨日さんざんな目に遭ってなのはちゃんに一日中甘えたいと思っている時に限ってだよ!なのはちゃんが「ごめん!今日急ぎの用事がるんだった!」と嘘をついた時の苦しそうな顔をして走っていったんだよ!?おい、誰だ!?なのはちゃんにあんな顔させた奴!!ジュエルシードゆるさん!!・・・まぁ、行っても何もできないんですけどね。

しかし、今回の私は違う!カバンを開けるとデジカメ。昨日も使うはずであったそれを取り出し、周り見る。そして、今度は特典を使ってセットアップして飛行魔法使って神社へ、レッツゴー。昨日の雪辱をここで晴らそう!!

～～～～～

「リリカル！マジカル！ジュエルシードシリアルＸＶＩ、封印!!」
桜色のリボンがジュエルシードの暴走体へと伸びる。光は弾け、そこには倒れた子犬と上から落ちてくるひし形の青い結晶体。封印が成功した。
「これでいいのかな？」
「うん、・・・これ以上ないくらいに・・・」
ジュエルシードをレイジングハートに格納してからそう訊くなのはにそのままの感想が口から出た。正直な話、昨日魔法と初めて会った人とは思えない。ランクの高い封印魔法を使えれるだけでも凄いというのに、それに加えて大きい魔力量、それから来る高い防御力、魔法への素早い順応。明らかに魔法のセンスがずば抜けている。
「と、取り敢えず、この子どうしよっか？あの人のだよね・・・たぶん」
なのはが子犬を抱えて階段を上ってきた。気絶して倒れている女性のほうを見る。放っておくのは流石に心配だ。気が付くまでここにいることにしたほうがいいだろう。本当は僕が回復魔法でも使ってあげればいいんだけど、今は魔力が戻っていない。それだからなのはにも手伝ってもらうことになったのだし・・・・・・。
「ユーノくん？どうしたの？なんだか暗い顔してるけど・・・」
「あ、いや、・・・なんでもないよ、なのは」
「もしかしてなのはちゃんに迷惑かけたって落ち込んでるの？」
「そうなの、ユーノくん？」
「えっと、その、ごめん」
「べつに謝らないで。ユーノくんのお手伝いしたいって思ったのはなのはだよ。ユーノくんのせいじゃないんだよ」
「で、でも・・・」
「もう！なのはちゃんがいいって言ってるでしょ！そんな暗い顔したらなのはちゃんが悲しむからＮＧ行為だよ。なのハーレム要員Ｎｏ．３のユーノくん♪」

「なのハーレム?・・・・って、君だれ!?」
　いつのまに!なのはの横にいる黒髪黒目のなのはと同じ学校の制服を着た少女。さっきまではいなかったはずなのに、さも当然のように会話の中に入ってきた。この子はいったい。なのはも同様に驚いている。しかし、その驚きに違和感が。
「かすみちゃん!ええ!?どうしてここに!?」
「ふふふふ、なのはちゃんいるところ、かすみありってね」
「ふえ?」
　ええっと。いったいどういう状況なのだろう。この子、僕と普通に話してたよね?フェレット姿の僕と。なのはとも知り合いのようだし、一体・・・。
『なのは、なのは』
『あ、ユーノくん?』
『ええっと、この子は?』
『ああ、茅野かすみちゃん。私と同じ小学校の友達だよ』
「どうしたの?急に黙り込んで?念話でもしているのかな?」
　その言葉に僕は戦慄した。この子念話のことを知っている。魔法関係者?しかし、管理局なら最初に現れたときに名乗りあげるし、それがないってことは管理局とは関係ない人、最悪違法魔導士の可能性がある。
「ふええっ!かすみちゃん、どうして念話のことを!?」
　警戒を高める僕とは違って、驚きながらも親しいものへの表情を向けるなのは。なのはの友人だから別に警戒することもないのかもしれないが、今僕が集めているのはロストロギア・ジュエルシード。違法魔導士の手に渡ればどうなることかわからない。
「ふっふっふっふっふっ、私はなのはちゃんのことなら何でも知っている。先月買った下着の色がピンクで少しお子様っぽいと思ってはいるけどお気に入りで毎日鏡の前でニコニコしていることも。何もない所で転んで周りを確認しながら恥ずかしそうに立ち上がってその場を後にしたことも。この間怖い夢を見ておねしょをしてしまい桃子お母さんに恥ずかしそうに報告していたことも。・・・全部知っ

てるよ♪」
「にゃあああああぁぁぁっ!!」
　なのはがその場でうずくまってしまった。・・・うん、しょうがないと思うよ。それは恥ずかしいよね。色々と。というかどうしてこの子はそんなことを知っているのだろうか？魔法の気配は一切ないから探査魔法や監視魔法ではないと思うのだが。もしかしてレアスキルの類かな？
「あなたは、いったい・・・」
「あ、私は茅野かすみって言います。かすみって呼んでね。ユーノくん」
「・・・どうして僕の名前を？」
「ん？だって、今日なのはちゃんが拾ったフェレットさんにユーノって名前を付けたって言ってたから」
「それならどうして驚かないんだい？今もだけど。この世界で動物は基本しゃべらないはず。それなのにどうして」
「驚いたよ？でもそれはさっきの戦闘中に十分したから今は大分落ち着いているかな」
「魔法に関してもだ。この世界には魔法文化がない。それなのに君は驚いているような様子を一切しない。どういう事だい？」
「・・・・・・もしかしてユーノくん。私のこと色々と疑っている？」
「えっと、・・・まぁ、一応」
　本当はさっきのなのはとのやり取りで大分警戒心は削がれたのだが、一応こちらの事情もあるのでかすみには悪いが少しきつい言いかたばかりをしてしまった。立ち直ったなのはも心配そうにこちらを見ている。まだ若干頬が赤いが・・・・・・。二人にはあとで謝ろう。
「う～～ん。ユーノくんにどんな事情があるかは知らないけど、取り敢えず私はなのはちゃんの味方。それは絶対に変わらない普遍の原理だよ♪それだけは信じてほしいな」
　なんだか毒気をぬかれる。こう、真面目な話をしているはずなのに、どこか気の抜けた話し方。少しでも警戒しているのが馬鹿らしくなってきた。

その後、かすみの話を聞いた。春休みにデバイスのアルファスデアムゾルと出会った話、それで魔法を練習しだした話、昨日広域思念通話が聴こえたが一緒に住んでいるおじいちゃんに見つかってごまかすのが大変だった話、遅れて着いたらなのはが逃げていたのを見た話、管理局を名乗る人に捕まった話ーーーーー

「ーーーーって、管理局員と会ったの!?」

「あ、うん。休暇だって。でも、今日の朝方本局に帰るとかなんとか」

「れ、連絡先とかは!?」

「あー、あれね。ちょっとアルファスが調子悪かったのかな?間違って削除してしまったみたいで・・・・・」

「I，m sorry. I had errors.」《ごめんなさい。誤作動を起こしたようでして》

「そ、そんな〜〜・・・」

まぁ、こっちに来るときに管理局には連絡をしたのだが、回収のための局員派遣は大分遅れるそうだ。だから、休暇中の局員がいるのなら手伝ってほしかったんだが・・・・・・。

「そう言えば、なんでかすみちゃんがその警察みたいな人たちに捕まったの?」

「あ、えっと。だって、あれだよ?壊れた電柱、破壊された道路、そこから逃げるなのはちゃん。・・・・・・これってなのはちゃんが犯人のパターンだよね?だから、私が代わりに犯人になったわけだよ」

「え!?・・・ごめんね。私のせいで・・・」

そうしてこちらの事情を説明した。ジュエルシードを僕が発見したこと、それが次元船の事故か人為的な理由で墜落し散らばったこと、それを僕が集めていること、なのはが助けに来てくれたこと。取り敢えず、昨日までに起きたことを簡潔に話した。最初かすみはうんうんと相槌を打ちながら聞いていてくれたのだが、昨日の話になると暗い顔をしてうつむいた。

「え、えっと、かすみさん?」

「・・・それで全部?」

「はい。これが昨日までに起きたことです」

「・・・・・・あのさ、ユーノくん」
「はい?何でしょうか?かすみさん」
「昨日のなのはちゃんの活躍・・・どうだったの?」
「え?えっと、とても初めて魔法にあった人とは思えないくらいに魔法の才能を感じ「そうじゃない」え?」
かすみが顔を上げる。その顔は、すごく真剣でどんなことを訊かれるのかと戦慄した。かすみの口が開くのを今か今かと固唾をのんで見守るしかなかった。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なのはちゃんは、格好良かった?それとも可愛かった?」
「えっと、かっこかわいかったと・・・・・・あれ?」
予想外の質問に普通のことのように答えてしまった。あれ?僕普通に恥ずかしいこと言わなかった?なのはを見ると少し困ったようなでも恥ずかしそうな笑顔で頬を染めている。不覚にもドキッとしてしまった。顔が赤くなるのを感じる。
「えっと、にゃははは。ごめんね?ユーノくん。かすみちゃんが変な質問して」
「いや、えっと、べつに・・・こちらこそごめん」
「ふえ?なんでユーノくんが謝るの?」
「ふふふ、これはユーノくんも堕ちたかな?」
「ちょっと!かすみさん!?」
この人がだいたいどんな人なのか分かってきた。かすみが僕にウインクを返してくる。
「かすみって呼んで。なのはちゃんを"なのは"って呼んでいるのに私だけ呼び捨てじゃないのはなんだか違和感があるわ。それと敬語も禁止ね」
それからかすみの覚醒魔法で女の人と子犬を起こして大丈夫なのを確認して、帰った。かすみは今リミットがかかっているためほとんど魔法が使えず、手伝いと言っても後方支援ぐらいにとどまるだろうという話もした。こちらとしても残念だったが致し方ない。そもそも現地の子たちに任せている現状に罪悪感を覚える。しかし、今は頼

るしかなかった。

～～～～～

「う～～～ん！やっぱりここは落ち着くの♪」

今日はかすみちゃんが新しくビデオカメラを買いたいというので、四人で電気屋さんに来ています。なのはちゃんは相変わらず家電の匂い？を嗅ぐのが好きなようで、猫さんのようにあっち行ったりこっち行ったり。なのはちゃん、可愛い♪

「しかし、急な話よね。まぁ、どーせなのはを可愛く取りたいから！とか言うんでしょ？」

「流石アリサちゃん。正解♪撮った動画はダビングしてアリサちゃんにも上げるね♪」

「ちょっと、かすみちゃ～～～ん／／／」

あ、なのはちゃんが戻ってきた。赤くなったなのはちゃんはどうしてこんなに可愛いんだろう？ちょっと世界の神秘だね。あとでかすみちゃんからもらった写真と今度来る動画を見比べて検証しようかな。

「あれ？すずかちゃん、どうしたの？難しい顔して？」

「あ、いや、何でもないよ、なのはちゃん♪」

ああ、なのはちゃんが可愛くてどうかなりそうだよ♪それでいて格好いいところもあるし。アリサちゃんにカチューシャをとられたとき一番に私を助けてくれた。おかげでアリサちゃんとも友達になれた。なのはちゃんと会ってから私にはうれしいことがどんどんと訪れてくる。だから、なのはちゃんは天使でもあり王子様でもあるのだけれど、幸せを運ぶ女神様でもあるんだ。

・・・・・でも、それを思うたびに感じる痛み。私はかすみちゃんのように積極的になのはちゃんに近づくことができない。それはべつに恥ずかしいからとか奥手とかではなく、単純な理由。

私は人間ではないから。

「ーーーーーずかちゃん。すずかちゃん？」

はっと気が付く。なのはちゃんが心配そうに顔をのぞきこんでくる。心の中を見られそうなほど瞳が近く、私は心臓の高鳴りを感じる。これはちょっとヤバイ。瞳の色が変わりそう・・・！
「ご、ごめんね。なのはちゃん。それで何の話だっけ？」
顔をそむけながらそう訊く。なのはちゃんはまだ心配そうな顔をしている。
「もしかしてすずかちゃん、具合悪い？」
かすみちゃんも心配そうに近づいてくる。ああ、ちょっとだけ失敗しちゃった。こんな時にいやなことを思い出さなくてもよかったのに・・・。最近血を呑んでいないから余計に思い出してしまう。
「う、うん。ごめんね。少し立ちくらみがして・・・そこの椅子で休んでるから三人とも買い物してきていいよ」
「ちょっと、すずかだけ一人にさせとくのもいけないわよ」
「そうだよ。私が残ろっか？」
「だめだよ、なのはちゃん。なのはちゃんはかすみちゃんからどんなのがいいか相談されてここにいるんでしょ？ね、かすみちゃん」
そう言うとかすみちゃんは困ったように頷く。
「ま、まぁ、そうなんだけど、・・・すずかちゃんが体調悪いなら、帰ったほうがいいかもね」
「ううん。大丈夫。少し休めば元気になるから・・・・・・だからね、なのはちゃんはかすみちゃんの買い物に付いていって、ね？」
それでも渋るなのはちゃん。もちろんかすみちゃんの用事もわかっているし、でも私が心配でもある。本当に優しい子。だから、私はなのはちゃんが大好きなんだ。そんな顔しないでほしい。
そんな中アリサちゃんは一つ溜息をついた。
「なら、私がすずかに付き添うわ。だから、かすみとなのははさっさと決めて買っちゃいなさい」
「で、でも、アリサちゃん。私といても詰まんないよ」
「はあぁ!?何言ってんのよ！友達といて詰まんないことなんてあるわけないでしょーが!!」
その言葉に胸が締め付けられるような気がした。友達という言葉。

いい響の関係。結局アリサちゃんの言う通りにかすみちゃんとなのはちゃんはビデオカメラのコーナーまで行った。そして、私とアリサちゃんは近くの長椅子へと座る。
「ごめんね、アリサちゃん」
「そこは〝ありがとう〟って言うところよ」
アリサちゃんの言葉にまた胸が苦しくなる。
夜の一族。それは昔から続く吸血鬼の一族。古より人間の血をすすり、生きながらえてきた。それを知っているのは一族と少しの人間だけ。私を友達だと思ってくれる三人はまだ知らない。それが〝友達〟という言葉に対して私が罪悪感を覚える理由。もし。もしも3人に私のことを教えたら、今まで通り接してくれるのだろうか？・・・・・・私には自信がない。
「ちょっとすずか！話聴いてる？」
「っ！ご、ごめん。アリサちゃん。ちょっと考え事してて・・・」
「・・・・・・・・・言えないこと？」
「え？」
アリサちゃんは少し悲しい顔をする。
「友達の私たちにも言えないこと？」
「・・・・・・・うん。・・・ごめんね」
「・・そっか、そうよね。友達でも言えないことくらいあるわよね・・」
アリサちゃんがうつむいてしまった。そんな顔をしてほしくてアリサちゃんやなのはちゃんと友達になったわけではないのに・・・。どうしよう？どうすればアリサちゃんは笑顔になるの？このときかすみちゃんがうらやましくなる。あれだけのことがあったのにあんなに明るくできるかすみちゃんが・・・・・・。
「でもねっ！」
そんなことを考えていると、アリサちゃんがキッとかみつくような勢いでこちらを見た。何かを振りほどくようなその表情。私は怒られるんじゃないかと思って震えてしまったがその瞳から視線が離せなかった。そして、しばらく見つめあった後、アリサちゃんがふっと微笑んだ。

「言いたくなったらいいなさいよ。私もなのはもかすみも、あんたの友達だからね。たとえどんなことを聴いてもどんなことを知っても、私はどんなすずかでも受け入れるから」
「アリサ、ちゃん・・・・・・」
なんだかその言葉は。温かかった。アリサちゃんの顔が赤い気がするが、きっと私も赤いのだろう。だって、まだ春先なのに顔が熱いから。
言ってもいいような気がした。私のこと。夜の一族のこと。でも、まだ少し勇気がでない。でも、それは恐怖から来るものではなく、もっと違う覚悟。今はまだ言わなくてもいい。だって、きっと言うから。それまで待っててね。アリサちゃん♪
「アリサちゃん、・・・カッコいいの」
声がしたほうを向くと感心した顔のなのはちゃんが立っていた。
「な、なのは!いつの間に!?って、かすみはどうしたのよ!?」
「ん?かすみちゃんはもう買うの決めてレジで店員さんの話を聞いてるところ。先に行っていいよって言われたからこっちに来たの。序でにここに来たのはアリサちゃんがちょうど「友達でも言えないことくらいあるわよね」ってところからだよ♪」
「それって、ほぼ最初っからってことじゃないのおおぉっ!!」
アリサちゃんが崩れた。一気に顔がより赤くなっていってる。そ、そこまで恥ずかしがるとこっちもなんだかどんどん顔が熱くなってくる。『ーーーーー私はどんなすずかでも受け入れるから』いやあああああぁぁぁっ!あれれ!?ちょ、ちょちょちょちょっと、それって、ここここ告白っぽい気がしてきたよ!?
「まあまあ、アリサちゃんかっこよかったよ?ね、すずかちゃん・・・ってすずかちゃん大丈夫?」
「え?えっ!あ、うん!?そうだね!アリサちゃんはいつだって私の王子様だから!」
あれれ!?私何いってんの!?ちょっとどうそれば!これこれってどうやったら収集できるの!?
なのはちゃんは不思議そうな顔をしたが、すぐに微笑んで私の手を

取った。てぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！なのはちゃんが私の手を!?なのはちゃんの手やわらかい。じゃなくて!!
「私もね、すずかちゃんに言いたいの。まぁ、アリサちゃんが言ってくれたんだけど。私もどんなすずかちゃんでも大好きだから、ね♪」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ありがとう」
やっとのことで絞り出したのはそんなありきたりな言葉だった。恥ずかしさとうれしさと、色々と混じった気持ちがぐるぐると体の中を心地よく回る。ああ、私死んでもいいかも。そう思ってしまうくらいには・・・。
「あっ！そうだ。この間ね、かすみちゃんが教えてくれた友達を元気にする方法があるんだ。それをすずかちゃんにしてあげるね♪」
「・・・え、えっと、かすみちゃんが？」
「うん♪」
なんだかすごく笑顔だけど、かすみちゃんからって言うのが不安。アリサちゃんはまだぶつぶつ言っているし誰も助けがない。
「え、えっと、なのはちゃん。それって具体的に何をするの？」
「ん？それはねーーーーー」
そう言って、なのはちゃんは隣に座り顔を近づけてーーーーー

ペロッ
「ひゃんっ！」
耳たぶをなめられた。
「ちょ、ちょっとなのはちゃ、ひゃんっ」
なのはちゃんが左手で頭を右手で肩を抱いて逃げようとした私を固定する。
「すずかちゃん。頭動かすとなめずらいからじっとしていてね♪」
「ちょ、だから、ひゃん、あ、ひゃめて。あんっ、ちょちょっと、あ、だめぇ♡」

約十分後。

「えっと、これってどういう状況?・」

戸惑っているかすみちゃん。立ち直ったアリサちゃんは顔を真っ赤にさせて、なのはちゃんはすごく満足そうな顔。・・・・・私は快楽におぼれて、たぶん半分目が死んでいると思う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・まぁ、なのはちゃんが満足しているなら、いっか♪」

元凶のかすみちゃんの声がこだまする。かすみちゃん、いつか仕返しをするからね・・・・・。

～魔法少女ハーレムなのは計画　再考中～（閑話休題）

例題1　　これがイチャイチャ度八割？だ!!

ーーーーーアリサの場合

私はアリサ・バニングス。バニングス社って言う海外企業の社長の一人娘。将来の夢はそこの会社を継ぐことよ。今から勉強を必死になってやってるわ。

私には大好きな友達が三人いる。この三人とは小学校一年の時から同じクラスでずっと仲良しな四人娘。

高町なのは。喫茶翠屋三人兄弟の末っ子。いつも元気で可愛い私たちのマスコット的立場の子。私たちが友達になれたのもこの子のおかげ。

月村すずか。月村重工業の二人姉妹の妹。おっとりして物静か、私たちが喧嘩したときはよく間に入ってくれる。しかし、本人も時々暴走するわ。

茅野かすみ。一番のトラブルメーカー。お祖父さんと二人暮らしで色々と大変なことも遭ったけど、本人のお気楽な性格で逆に周りを困らせている。一番困った奴。

そんな色々と笑いあり涙ありの毎日だけど、やっぱり好きな子たちと一緒にいられるっていうことが一番の幸せだと、私は思う。

・・・・・ごめん。ちょっと現実逃避しすぎて、違うキャラになっていくところだったわ。危ない危ない。

目を前に戻すと、私の部屋にさっき話した友達がいる。それはいい。それはよくあることだ。だけど、

かすみがなのはをベッドに押し倒していた。

「なのはちゃん・・・私もう、我慢ができないのだけれど・・・・・」

「・・・かすみちゃん？」

ちょっとどうなってんのよおおおおおおぉぉぉぉっ!!たしか今日は

お茶会に呼んで、それで私の部屋が見たいからとかすみが言って、だからそれでここに案内した。そしてこうなった。うん！わかるかああああああああああああああぁぁぁぁっ!!!!どうすればこう言った展開になんのよおおおおおおおおおおおおおおぉぉぉぉっ!!!!

膝をなのはの脚の間に入れ、左腕は顔の横に。そうして、かすみは右手をなのはのあごにそっと添える。

「なのはちゃん、・・・キス、していい？」

「ふえ？」

「ちょおおおおおおおおおおっと、待ちなさい!!」

私はかすみをなのはから引きはがした。「やんっ」とか言っていたけど気にしない！こいつはいったい何をしようとしているんだ!?

「あんっ、アリサちゃん。ちょっと、強引だよ♡」

「うっさい!!知るかそんなの!!?」

「なら、私となのはちゃんがキスしようとしたから・・・嫉妬した？」

「嫉妬じゃない！怒ってんのよ!?私の部屋で変なことすんな!!」

一通り叫んだら疲れた。のどが渇いたわね。飲み物も一緒に持ってくるべきだったわ。

「アリサちゃん。今のど乾いたって思ったでしょ？」

「・・・それがどうしたのよ？」

床の上にぺたんと座ったかすみがニコニコ笑っている。これはまだ何か考えているな。

「知ってた？キスってのども潤せるんだよ？」

私は逃げた。しかし、かすみは私を追いかける。

「あんたはいったい何がしたいのよおおぉ!!」

「最近なのはちゃんとイチャイチャしてなかったから禁断症状が!!キスをしないと死ぬよおおおぉぉっ!!」

「死ぬわけないでしょおおおがっ!!」

って、私に迫るってことはなのはじゃなくてもいいってこと!?わけわかんないわよ!!

「え、えっと、私ならべつにいいよ。かす「あんた何言ってんの!?」ふえ？」

私はなのはの両肩を持つ。こいつの常識はかすみに歪められているからおかしいことになっている。私が何とか直さないといけない。
「いい?なのは?キスは大事な人としかしちゃいけないんだよね?」
「うん。だから、かすみちゃんとはしていいんだよね?」
いったいどおおおおおおおおおおなってんのよ!!!
「あっ、もちろん、アリサちゃんとすずかちゃんとも大事な人だから、キスしていいんだよね?かすみちゃん」
「ふふふふふ、アリサちゃん。もう手遅れなのよ」
いつの間にか後ろにいたかすみが私の肩をつかむ。
「ふふ、涙目のアリサちゃんもかわいいよ♪」
「ちょ、ちょっと、や、やめなさいよ・・・」
そう言って、かすみの唇が私の唇とかさーーーーーなる前に、手のひらにキスをした。
「かすみちゃん、駄目だよ。無理やりは」
なのはの手だった。って、私なのはの手のひらに、キキキキキキスしちゃったの!?
「それにアリサちゃんは、私とキスがしたいんだよね?」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え?」
そう言ってそっと顎を持ちあげるなのは。え?え?え!?
訳が分からず、真正面のなのはを見る。もう目と鼻の先に淡い桜色の唇が。
「アリサちゃん、顔赤くして・・・かわいいよ♪」
クスッと笑うなのは。私は口をパクパクさせるだけしかできない。
そして、なのはの唇が私のとかさーーーーーー

〜〜〜〜

そうして、目が覚めた。窓から入る日差しはすがすがしくて気持ちがよかった。
私、なんて夢を・・・・・・。今日、学校行けるかな・・・。

ーーーーーなのはの場合
「あれ?すずかちゃん、どうしたの?」
ここはアリサちゃんの部屋。さっきアリサちゃんにキスをしたら崩れ落ちてしまった。全然動かなくなってしまったのだ。かすみちゃんはアリサちゃんを必死に写真で撮っている。
そうして、暇になったので周りを見るとすずかちゃんが部屋の隅でうずくまっていた。
「すずかちゃん?」
声をかけるが全然反応がない。そばによって体をゆすってあげて、やっとこっちに気が付いてくれた。
「なのは、ちゃん・・・?」
「そうだよ。どうしたの?すずかちゃん?何か悩みごと?」
そう訊くと、すずかちゃんはまたうつむいてそして頷いた。
「私ね、最近のけ者にされている気がするの・・・」
「え?のけ者って、私たちから?」
「・・・うん。でも、三人がのけ者にしようと思っていないのは分かるの。ただ、・・・」
「ただ?」
「私に勇気がないから・・・。私が壁を作っているから・・・。みんなそれに気が付いて・・・」
すずかちゃんが泣き出した。とても静かに、だけど苦しそうに。友達がここまで苦しそうにしているのに今まで気が付かなかった。
「・・・なのはちゃん、私ここにいていいのかな?」
「っ!もちろんだよ!」
すずかちゃんに抱き着く。今の私にはこれぐらいしかできない気がして。
「すずかちゃんがこんなに苦しんでいるのに、私友達なのに分からなかった。すずかちゃんが壁を作るのはきっと私たちを信じられないから。信じられる友達になれなかった。私こそすずかちゃんの友達失格だよ」
「そ、そんなこと!」

「でもね」
　そう言っていったん体を離す。すずかちゃんは名残惜しそうに服を引っ張るが別に私は離れるわけではない。すずかちゃんの瞳を見た。紫色のキレイな瞳。
「でもね、私がすずかちゃんのこと大好きなのは、信じてほしいな」
「なのはちゃん・・・」
　すずかちゃんの口から声が漏れる。でも、それには続きがない。まだ、信じてくれないのかな。
「どうしたら、・・・どうすれば、すずかちゃんに信じてもらえる？」
　つい、そんな質問をしてしまった。本当は、いやきっと自分で考えださないといけなかったんだ。それなのに私はすずかちゃんの気持ちを分かってあげないとーーーーー
「なのはちゃん」
「ん？なに、すずかちゃん？」
「キス、して・・・」
「え？」
「キスしてくれたら、信じられる・・・かも」
　すごく赤くなっているすずかちゃん。なんだかかわいい。不謹慎かもしれないけど、でもすごく抱きしめたくなった。
　両手をすずかちゃんの頬に添え、目線を合わせる。すずかちゃんの顔がさらに赤くなった。
「なら、――――」
　私はそのまますずかちゃんの唇をうばーーーーー
　　～～～～～
　携帯のアラームが鳴った。布団からどうにか手を伸ばし携帯のボタンを押す。
　朝だ。夢ははっきりとは覚えていないけど、何とも悲しいような、でもすごく満たされたような、そんな夢だった気がする。
　そっと唇に指を当てる。あっ、そっか。私キスしたんだ。誰と？大切な人と。

ーーーーーすずかの場合
なのはちゃんがキスをしてくれた。私が落ち込んでいたところにすかさず訪れる。やはり、なのはちゃんは私の王子さま。でも、女の子だから、女騎士様？どういえばいいんだろう？
なのはちゃんはまだ私に抱き着いてキスをしてくれている。甘いような柔らかような。これが夢なら覚めないでほしい。きっと朝にはまた独りだ。夢は必ず覚めると独り。二人一緒に寝ない限り。
「それなら今度は一緒に寝られるね？」
どこからともなく声が聞こえた。気が付くとなのはちゃんはいつの間にかいなくなっており、場所もアリサちゃんの部屋じゃなくなっている。どこか暗い宇宙のような場所。
「ここは、どこ？あなたは、だれ？」
「ここは、あなたの中。私は、あなたの憧れ」
そう言って目の前に姿を現したのはかすみちゃん、だった。いや、髪の色と瞳の色がかすみちゃんとは違う。けど、ひどく似ている。
「かすみちゃんが、私の憧れ？」
そう言うとかすみちゃんはひょうひょうとした表情で頷く。
「そうだね。引っ込み思案なあなたは茅野かすみという自分にはないものを持っている人物にあこがれを抱いている。しかし、彼女とあなたは一つだけ共通点がある」
「共通点？」
「高町なのはを好きなところだ」
それは、・・・そうかもしれない。しかし、かすみちゃんのなのはちゃんが好きな気持ちと私のそれとはあまりにも差がありすぎるような気がした。
「ははは、気持ちというのは比べるものではなく、ただ自分の中にあるのを感じることなんだ」
「？」
すると、景色が薄くなってくる。
「そろそろ目覚めの時だ。そうそう、来週は待ちに待った温泉だね。そのときにまた会いましょう」

その言葉を最後に私は意識を手放した。

～～～～～

目が覚めるといつもの私の部屋。だいぶおかしな夢だった。確かおかしな人で、えっとかすみちゃんか。かすみちゃんを私はあこがれていると。よくわからない。確かに私はかすみちゃんのバイタリティーは凄いと思っている。私にはない彼女の魅力だ。でも、だからと言って普段の素行を見る限りでは憧れとは違うような・・・・・・。

その前はどんな夢だっけ・・・えっと、確かなのはちゃんがいて、なのはちゃんに夢だからと思ってお願いしたんだけど、なんの・・・・・・あれ？あれ!?あれれれえええええええええっ!!き、キスしたんだった！何であんなお願いをしてしまったのよ!!?いやいやそもそもなんて夢を見てしまったんだ。・・・もしかして欲求不満？そうだ!?かすみちゃんのせいだ！昨日の電気屋さんでのことは忘れていない。あれのせいで私はあんな夢を。・・・・・・かすみちゃんにはいつか仕返しをしないと。

ーーーーー学校

お昼休み。アリサちゃんとすずかちゃんとかすみちゃんと一緒にお昼ご飯。いつもの屋上。少し風が強いくらいかな。

「なのはちゃん、今日は一日ご機嫌だね。何かいいことでもあったの？」

「あ、うん♪今日はね、夢を見たの」

「ゆ、夢!?」

かすみちゃんの質問に答えるとアリサちゃんとすずかちゃんが驚きの声を上げる。どうしたんだろう？私が昨日の夢の話をしている間ずっと下を見てぶつぶつ言っていた。なんだか顔も赤い気がするけど・・・。

「へぇー。そんな夢見たんだ・・・・・・。アリサちゃんとすずかちゃんはうつむいてどうしたの？」

「いいいいや、べつに。・・・ね、すずか？」

「う、うん、そうだよ。なのはちゃんと同じ夢見てたなんてことないか

ら・・・あ」
「え?・すずか、あんたも・・・って!」
「え?・もしかしてすずかちゃんとアリサちゃんもおんなじ夢を見てたの!?」
そう言ったこともあるんだ。たしかかすみちゃんが言うには同じ夢を見るのは同じことを考えているからだとか。仲良しの証なんだとか。なんだかうれしいな。ついついほっぺが緩んでくる。
「あ!・なら、かすみちゃんも同じ夢見たんじゃ・・・・・・あれ?どうしたの?・かすみちゃん?」
今度はかすみちゃんが顔を下に向かせてぶつぶつ言いだした。どうにかそれを聴きだそうと耳を近づける。やっとのことで聞き取れた。
「ーーーーたしだけ、私だけ、・・・同じ、夢じゃない」
「・・・」
今日一日かすみちゃんが拗ねました。慰めるのにとても疲れました。

例題2　ユーなの?・すいません、なのユーっぽいのしか思いつかなくて・・・
これは少しだけ先のお話し。
アースラに初めて乗った、その帰りの話。かすみちゃんとはすでに別れて一人と一匹。いや、ふたりだけの帰り道。ユーノくんは私の肩に、いつものように落ち着くように。私はそんな軽い重みに安心するように、だけどいつもよりはずかしい感覚を。それぞれ味わいながら歩いていた。ただ黙々と。
「え、えっと、・・・ユーノくんって男の子だったんだ」
「なのは?・それってさっきも訊いてきたよね?」
「あ、あれ?・そうだったっけ?」
うんそうだよ、と言って笑うユーノくんは本当にいつも通りだった。なんだかそれが私だけ落ち着いていないような気がして、まだ子

供のような気がして、少しむっとした。
「なのははそんなに僕が人間だってことにおどろいたの？」
「それは驚くよ！だって、ずっとフェレットさんだって思ってたんだから。だから、着替えと入浴とか、その見られても何も思わなかったし／／／」
「あ、あああぁ！ご、ごめん！本当にその時はごめん!!」
「ううん。別にいいよ。そもそも私たちが誘ったんだし、ユーノくんのせいじゃないよ」
「で、でも・・・」
　少し慌てて、そして少し申し訳なさそうな恥ずかしそうな顔をするユーノくん。ユーノくんの恥ずかしそうな表情を見ると、なんだかさっきまでむっとした気持ちが少し和らいだ気がする。これってもしかしてーーーーー
「ねえねえ、ユーノくん。話変わるんだけど・・・」
「あ、うん。なんだい、なのは？」
　肩にいたユーノくんを両手で目の前に持ってくる。ユーノくんは先程の顔からいつも通りの優しい表情をした。お父さん曰く、賢そうな、というのが付きそうな表情。そんなユーノくんを見ていると今からする質問はすごく的外れな気がするが、でも悪戯心が上回った。
「ユーノくんって、なにをされたら恥ずかしい？」
「え？・・・ええぇ!?」
「ほら、何かあるでしょ？例えばお腹をくすぐられるのがはずかしいとか、ガムを口から出すのを見られるのがはずかしいとか」
「いやいや！何で急にそんなことを!?」
「ん？私がユーノくんの恥ずかしがっている姿が見たいから、かな？」
「かな、って・・・」
　呆れた顔をするユーノくん。あれ？私ってそんなに呆れられること言ったっけ？またユーノくんが落ち着いた顔してる。むう・・・。
あっ！そうだ！
「ねえねえ、ユーノくん？」
「な、なんだい？なのは・・・」

ユーノくんが警戒している。私が今からしようとしていることを読み取ったのかな？私ってそんなに顔に出やすいのかな？でも、悪戯心は止まりません。

「ユーノくん？キスされたら、恥ずかしい？」

そう言って、ユーノくんの返事を待たずに鼻先へチュッとした。

「・・・・・・・・・・・・え？え！ちょ、ちょっと、なのは!?／／／」

最初は何をされていたのか分からなかったような表情から真っ赤っかなお顔になるユーノくん。なんだかこころがすっきりする。こういった時かすみちゃんのアドバイスは役に立つよね♪あっ、そうだ！かすみちゃんがこういった時は、最後とどめを刺さないといけないんだった。えっと、・・・

私はユーノくんに悪戯っぽい笑顔を見せて、

「ユーノくん・・・今度は男の子の時に、する？」

フェレット姿のユーノくんがガクッとなった。顔から湯気が出ている。これで完璧♪

私はユーノくんを抱えて、家へと向かった。

第四話　魔法少女ハーレムなのは計画　記録

私は何をしていたのかな。

なのはちゃんと秘密を共有してから数日。え？ユーノくんもいるって？いや、そうなんだけど、ほらそこは、ね。三人だけの秘密♪ってするよりかは、ふたりだけの秘密♡って言ったほうがいいでしょ。まぁ、それは横に置いて、私はそこでやっとなのはちゃんの魔法戦闘シーンをカメラに収めることができました。・・・・・・めっちゃくちゃぶれてたよおおおおおおおおおおおおおっ!!!

え？なんで？あんまり激しい戦闘ではなかったよね!?それでも結構動きがあったからそれでぶれてしまったの!?本当に何してんのよ!!!これで三度目だよ？こういったの！

一度目、なのはちゃんとアリサちゃんとの喧嘩のシーン。熱を出して行けず！

二度目、なのはちゃんの初戦闘シーン。おじいちゃんに阻まれて行けず！

三度目、ぶれてちゃんとした写真がなかった・・・・・・。二度あることは三度あるとは言うがここまで律儀にまもらなくても・・・・・。もしかして呪われている？お祓い行ったほうがいい？

しかし、次はすぐ目の前だ。だから、落ち込んでいる暇など私にはありはしない！そこで、私はひとつひらめいたのだ。ビデオカメラにしようと。これならある程度被写体が動いてもぶれない。何でこんなことを今まで思いつかなかったのよ!!?私はバカなの？阿保なの？間抜けなの??

これを思いついたのは、前世で見たとあるカード系魔法少女の親友ポジを思い出したからだ。そうだよ！知○ちゃんだよ、○世ちゃん!!一応私も服作れるし、主人公に対する愛も彼女と双璧をなすものだと自負している。まぁ、お嬢様ポジションはアリサちゃんとすずかちゃんに、ビデオ操作の知識はなのはちゃんに譲るしかないのだが、結構いいアイディアだと思うよ!!これでなのはちゃんの勇士を一瞬の隙でも見逃さずにとり収めていく。あれ？でもそっちの話だと、最後ラ

イバルポジションの子に完全に取られるんだよね？なのハーレム作れるの？・・・・・ま、まぁ、そこは頑張るよ。そもそもなのはちゃんの幸せが最重要項目だからね。・・・べ、別に不安じゃないよ？そうなったら悲しいとか思ってないよ？ほ、ホントだよ？

ま、まぁ、取り敢えず落ち着こう。それを何とかするのが私の役目だ。それを考えると他作品の展開なんて関係ない！あっちは見守る愛でこっちは囲む愛だ!!・・・そろそろ話を戻そう。あれから数日経ったんだ。その間なのはちゃんとの魔法の練習を朝や学校終わりにするという本当に幸せな日々だった。ユーノくんもなのはちゃんに対して意識しているような気配もあって眼福眼福。あ、もちろんユーノくんの教えは分かりやすくて訓練の時は常に真剣だったよ。ただ帰るときとかに色々と反応を楽しませてもらいました。初々しいとはこのことだね～～。なのはちゃんはまったく気が付いていない様子だったけど。

そして、今日。この日のために色々と撮影の準備をしてきた。それが何を意味するかというと・・・・・・。

なのはちゃんとプールだああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああ
あぁぁぁぁぁぁっ、ぁ、ぁ、ぁ・・・・・・・・・・・ふう
うぅぅぅぅぅぅぅっ！もう一度言うわ！なのはちゃんとプール
だああああああああああああぁぁぁぁぁっ！

待ちに待った今日！体調は万全！邪魔するものはいない！新しく
ビデオカメラ（防水）も買った！もちろんなのはちゃん用のカメラも
持っていく！水着はすでに下に着ている！私たちは今日！この日の
ために生まれてきた!!そして、この日のために生きてきた!!この日を
迎えられることを、なのはちゃんに感謝!!!!!

・・・・・さてと、出陣じゃ。

〜〜〜〜〜

「あは♪恭也さんだ」
「あ、恭也お兄ちゃん」

着替え終わってプールへ向かうと監視員姿のなのはちゃんのお兄
ちゃん、恭也お兄ちゃんを見つけた。
「ああ、アリサとかすみか。早いな？一番乗りか？」

恭也お兄ちゃんは、格好いい。もしなのはちゃんがいなかったら私
もやられていただろうくらいには。もちろんなのはちゃんがいない
世界は考えられないのでそもそもそのような仮定ができないのだが、
もしできるとして考えたときという意味でだ。まぁ、考えた所で意味
はないけどね。
「はい。なのはとすずかはまだ着替えてます」
「そうか。ん？かすみ、その荷物はなんだ？」

恭也お兄ちゃんが私の背負っているバッグに気が付いた。

「あ、これですね？・・・これはですね、・・・・・・」
　そう言って私はバッグの中身を恭也お兄ちゃんに見せるように開いた。
「ん？・・・ティッシュ箱三箱とビデオカメラのバッテリーか？バッテリーは分からんでもないが、ティッシュというのは何でだ？」
「もちろん、なのはちゃんの水着姿を見たときの鼻血対策です♪」
　恭也お兄ちゃんとアリサちゃんが一気に呆れた顔になった。
「あんたねぇ、・・・また去年みたいに鼻血流してぶっ倒れるんじゃないでしょうね？」
「いやいや、今回はなのはちゃんの水着も普通のを選んだんだし、流石に鼻血出すだけでしょ」
「鼻血を出すのは前提なんだな・・・」
　そう、前回は私があまりにも調子に乗りすぎてなのはちゃんにとある水着を着せてしまった。あれだよあれ、三角ビキニ！それがあまりにもセクシー過ぎたため私は血の出し過ぎで気絶。私だけ恭也お兄ちゃんにおぶられて途中で帰るという失態を犯してしまった。そのおかげでなのはちゃんの水着姿を覚えていない。今回はその反省も含めてみんなで一緒に選んで買った。言っとくけどめちゃくちゃ可愛いやつにしたからね。本当にかわいいやつ!!今からたのしみだよ～～。序でに試着の時は私が見れないようにアリサちゃんとすずかちゃんに阻まれた。まぁ、店で鼻血を出すのは流石に申し訳ないしね・・・・・・。
「あ、アリサちゃ～～ん、かすみちゃ～～ん、お兄ちゃ～～ん」
「あ、恭也さん」
　噂をすればなんとやら！私はすでにセットしていたビデオカメラを声のしたほうに向ける。そこにはーーーーー水着姿の天使がいた。
「って！かすみちゃん！鼻血、鼻血！鼻血でてるよ!!」
「おおっと！」
　早速鼻血を出してしまった。バッグからティッシュを取り出し詰める。そんな私をなのはちゃんは心配そうに見てくる。あ、可愛い。もう一度言う、可愛い。もう死んでもいいかも・・・・・・。死んだ

らなのはちゃんが悲しむのでやっぱりなし!!
　なのはちゃんの水着はピンクを基調とした色合いでトップス・ボトムスのフリルがゆったり感を出しているもの。タンクトップビキニにボトムスもスカート状のフリルが付いているやつだよ!!そして、そしてなにより!トップスとボトムスが分かれていることにより見える、可愛らしい、・・・おへそ!!おへそだよ!?お・へ・そ!!それもなのはちゃんのおへそ!!!ちょっと、これヤバイよ!いやだってあれだよ!?例えばだよ?例えば、あのなめらかな白い肌の上を滑っていると想像しよ?ええ、しばらく滑っているとだんだんと下へ下へと落ちていく。すると、最終的に到達するのは魅惑的で神秘的な、おへそ!!!可愛らしくへこんだ、おへそ!!あのおへそだよ!!なのはちゃんの、お・へ・そ♪あああああああ

すずかちゃんが折角だからと言って水着を見ることになった。みんな新しいのをすでに買っているというのにもう一度。更に、何故か私が着せ替え人形になってしまって、仕舞にはこの水着を買ってもらった。あ、買ってもらったのはお金がね・・・。悪いよって言ったんだけど、「私がかすみちゃんのために買いたいと思ったから」とニヤニヤの一点張りでしぶしぶ。それでアリサちゃんが「買ってもらったんだから明日絶対これ着なさいよ」とこちらもニヤニヤで言われて今の状況。正直この髪に合わないと思ったのだが、まぁ恭也お兄ちゃんが言うのだから似合っているのでしょう。この人はあまりお世辞とか得意ではないし、とくに似合わないからと言って恥ずかしがることでもない。まぁ、女の子なんだから少しは気にしてしまうけど・・・。どうでもいい話だけど、さっき着替えの時私が普通にこの水着を着ていたらすずかちゃんとアリサちゃんが悔しがっていたような・・・どうしてだろう？

「あれれ？恭ちゃん、かすみちゃんにはそんな言葉がすぐに出るのに、私たちにはないのかな？」

「そうですよ、恭也様。みなさん平等にほめてあげないと」

「え、いや、その・・・」

恭也お兄ちゃんが口ごもる。流石イケメンお兄ちゃんだ。そう、私が『魔法少女ハーレムなのは計画』を思いついたのは恭也お兄ちゃんがすごくモテていたから。それで時々周りの人がお兄ちゃんを取り合う光景を見て、ピンッと来た。これなのはちゃんでやりたい・・・と。ああ、序でに前に言ったかもしれないが、昔訳あって高町家に居候をしていたの。で、そのときの光景の一つがさっき言った恭也お兄ちゃんが修羅場ってるところです。

まぁ、今は恭也お兄ちゃんには忍さんっていう彼女さんがいるから、そうそう修羅場展開は起きていないらしい。でも、そのしゃべりと行動にはモテ要素が豊富だ。だから、なのはちゃんにはお兄ちゃんのマネをしたほうがいいよ、と言ったことがある。・・・・・どうなったかって？一部だけだけど御神流をなのはちゃんがマスターしました！流石なのはちゃん♪もう素敵♪それで普通の体育が苦手っ

ていうＩＮＮＯＣＥＮＴで見たような可愛らしさ。はぁ、もう許されるのなら激しく抱いてほしいな♡・・・え？何かおかしいだろうって？さて？なんのことやら。
「恭也さん、あれはなんですか？あのお立ち台みたいなやつ」
「ああ、そのまんまだよ。希望者が歌って踊れるステージなんだよ」
「「ええ～～っ!!!」」
　いつの間にか話が進んでいた。ああ、あのステージね。サウンドステージでは確かアリサちゃんとすずかちゃんが歌っていたっけ。折角なんでアリサちゃんが歌っている映像も撮りましょうか。でも、自然な感じで誘わないと・・・。
「誰か歌う？あっ、アリサちゃんどう？歌わない??」
「な！何で私なのよ、かすみ！」
「だって、アリサちゃん歌上手いでしょ？」
「いやいやすずかやなのはのほうがうまいでしょ！」
「えええ～～！わ、私無理だよ・・・」
「わ、私もちょっと・・・」
　ああ、そう言えばなのはちゃんの歌もここで聴いてみたいな♪上手なうえに楽しそうに歌うから本当に、大好き♡まぁ、無理強いはいけないよね。
「なら、美由希さんかファリンさんか」
「だめだめ、私歌下手！」
「わたしなんてもっとですぅ～～」
「やはりここは、言い出した方が先陣を切られるべきでは？ね、かすみお嬢様」
「・・・

な流れだった!!アリサちゃんが言い出して全員が無理って言って、それでノエルさんの最後の一言・・・。忘れてたよ!!?仕方がないじゃん!だって、アニメとは違ってサウンドステージは数回しか聞いたことなかったんだし!!それも前世での話だし!!え?私歌うの!?うっそ!これは何かの罠ぁ!?これ誰得!??ホントに!!ここはあれだ、なんとか言い訳を・・・。

「ええっと、ちょっと今日はのどの調子が・・・」

「かすみちゃん、歌わないの?」

なのはちゃんがなんだか残念そうにそう言った・・・・・・・・・・。

結局歌って踊ることになりました。・・・なんだかすずかちゃんとアリサちゃんがすごく満足そうな顔だったのが印象的だったよ。よくわからないけどすごく悔しかったです。なのはちゃんが私のビデオカメラで私を撮ってくれました。なのはちゃんを撮るために買った新しいビデオカメラなんですけどね・・・。道行く人々が微笑ましそうにこっちを見ていました。本日プールでの最初の感想、すごく恥ずかしかったよおおおおおおおおおおおっ／／／

～～～～～

かすみちゃんの歌は上手だった。まぁ、何度かみんなでカラオケに行ったときに分かってはいたんだけどね。歌っているときのかすみちゃんは顔を真っ赤っかにしてとてもかわいかったの♪いつもは周りをからかうことばっかりするけど、たまに見る恥ずかしがっている姿もかすみちゃんらしいと思う。かすみちゃんは嫌がるけど、私は恥ずかしがっている姿も大好きだな。

良い声してたわよってアリサちゃんが言ったら「いやいや釘宮理恵ボイスほど感染力はないよ」って言ってたの。釘宮さんってだれだろう?あと、アリサちゃんとすずかちゃん、特にすずかちゃんは凄く満足そうにしていたな。そんなにかすみちゃんの歌が気に入っちゃったのかな?

その後はふつうにプールを楽しんだ。アリサちゃんはノエルさんに泳ぎを教わっていたし、すずかちゃんはお姉ちゃんとどちらが速く泳げるか競争していたし、その後かすみちゃん考案の罰ゲームですずかちゃんがさっきのステージで歌ったり、すごく恥ずかしそうな悔しそうな表情のすずかちゃんと満足そうなかすみちゃんの顔が印象的だったり、ウォータースライダーでフリルが少しめくれただけでかすみちゃんがまた鼻血を出したり、ユーノくんが浮き輪を使って泳いだり、私が浮き輪でぷかぷかしているとかすみちゃんが鼻血を出したり、ユーノくんが少しここら辺を見て回ると言って離れたり、流石に血が足りなくなってかすみちゃんがベンチで休んだり、色々と・・・。

でも、そんな中で時々思い出すのは、青い宝石ジュエルシードのこと。ユーノくんは今日は気にせず遊んでって言ってくれたけど、やっぱり気になる。今どこにあって発動してないか誰かの手にわたってないか、色々と考えてしまう。かすみちゃんは今強力なリミッターをかけられていてあまり戦いには参加できない。ユーノくんも魔力がまだ全然戻っていない。やはり私が頑張らないといけないんだ。

ふと視線に気が付く。ノエルさんに膝枕をしてもらいながらベンチで休むかすみちゃんが残念そうにこちらを見ている。にこっと笑って手を振ると、また鼻血を出した。・・・本当に大丈夫かな？

しばらくジュエルシードについて考えていると、突然感覚が波打った。ジュエルシードだ。発動した？

その後すぐに結界が張られる。時間の流れが極端に遅くなる感覚、周りにいた人が次々に消えていく。ゴチンッ！と音がした。かすみちゃんがベンチに後頭部を打ち付けたのだ。・・・ノエルさん消えたからね。たしか結界っていうのは元の空間を切り取って時間の流れを何とかする的なことをユーノくんが言っていた。よくは分からなかったが取り敢えず向こうから見て急に消えたように見えるわけではない、と言うことだ。だから大丈夫らしい。よくわかんなかったけど。

「なのはちゃん！」

ふらふらのかすみちゃんがこっちにやってくる。血が足りなくて

まだ休んでいないといけないのに・・・。
「かすみちゃんは休んでて!!」
「で、でも・・・」
「私が行ってくるから、かすみちゃんは待っててね」
そう言って走る。途中でレイジングハートを起動させて、ユーノくんの念話で説明があって、誰かを巻き込んだ話を聞いた。それがアリサちゃんとすずかちゃんであったのは本当に驚いたが、ユーノくんの睡眠魔法で眠らしてくれた。それで魔法を打ち込んだのだが・・・。
「ジュエルシードがない!?」
「うん、それにまだ気配が残っている」
「って、うわ!!?」
水の柱が襲ってきた。レイジングハートが防御魔法を張ってくれたおかげでダメージはなかったが、これは少し厄介なの。触手のようにうねうねと攻撃を仕掛けてくる敵。しかし、本体が分からない！
「ユーノくん！こういった時どうすればいいの!?」
「ええっと、こういった場合は拘束魔法で敵を止めて戦うしかないんだけど、僕はまだ魔力が戻ってい「チェーンバインド！」って、かすみ!?」
紫色のチェーンが水の柱を縛り上げる。しかし、それに反して柱は激しい動きでその鎖を断ち切ろうとした。更にーーーーー
「かすみちゃん!?危ない!!」
残った水の柱がかすみちゃんを襲う。かすみちゃんはもう片方の手で防御魔法を発動。なんとか防いだが、とても苦しそうだ。
「っ！なのはちゃん！私は魔力出力が制限されているからあまり時間が持たないの!?なのはちゃんのほうで拘束を!!」
拘束魔法。今朝練習したのはそれだが、そのときは失敗した。でも、今度はッ!!
「レストリクトロック!!」

〜〜〜〜〜

私要らなかったな～～。
すでになのはちゃんがジュエルシードを封印し終わってからそう思う。まぁ、だれも怪我がなくて良かった良かった。私もほとんど何もしていなかったから大分回復したし、・・・そんなに早く戻るのかって？回復魔法ですよ。笑いたければ笑っていいですよ？戦う前から回復が必要な状況ってことに。それもなのはちゃんに興奮しずぎ鼻血出し過ぎて・・・。いまでは普通に歩いてなのはちゃんのもとに行けるぐらいには回復しました。ええ、本当にバカらしいですね！ま、ビデオカメラも一緒に持ってきたから、帰ったらいい動画が見れるけどね♪そう言えばさっきのジュエルシード、サウンドで聞いた時よりなんだか状況が違うような・・・・・・まぁ、あまり聴いてなかったから記憶違いかな。
「あ、かすみちゃん大丈夫？」
「あ、うん。さっきの間回復魔法使ってたから・・・それよりさっきの拘束魔法何!?収束系!?」
「ああ、なのはが使ってたのは収束系の上位魔法だね。なかなか使い手がいない魔法だよ」
「流石なのはちゃん♪たしか収束系ってかなりの魔力や集中力がいるんだよね？なのはちゃん疲れたりしてない？」
私もユーノくんほどではないがなのはちゃんよりかは長く魔法の勉強をしている。だから分かるのだが、収束系の魔法はそれ自体が難易度が高い。周辺に散らばった魔力素を一点もしくは線や面状に集めて固める。特にどういう風に集めるのかによって魔力と集中を要する。私は収束系で使えるのは回復系の魔法のみ。それも使った後はかなりふらつく。しかし、なのはちゃんはケロッとしていた。
「あ、ううん。集中はしたけどそこまで疲れてないよ？」
「う～～ん。たしかに魔力はほとんど消費していないね」
「もしかしてレアスキル？」
「そうかも」
「レアスキルって？」
あ、なのはちゃんが可愛く首をかしげる。うなじがキレイに映る。

ああ、めっ、っちゃ天使!!・・・あ、また鼻血が。やっぱりさっきので鼻血がちょっとばかり出やすくなってるな・・・。
　ユーノくんがレアスキルの説明をしている。簡単に言えば、レアなスキル。・・・・・・簡単すぎって？でも、本当にそれぐらいしか説明ができないんだよね。取り敢えず、定義としては一般に人が持たない・持つことができない技能。これは訓練とか練習とかで手に入るとかではなく、もともとある程度使える人か全く使えない人に大別されるということを示している。それならX（イクス）以降のティアナはどうなるのかって？知らないよそんなの！私が分かるわけないでしょ!?まぁ、そこら辺は追々わかっていくということで・・・。
「まぁ、なのはちゃんのレアスキルは魔力を収束させるのにほとんどもしくはまったく魔力を用いないってところかな？」
「う～～ん、たぶん、おそらく。もっと色々と試さないと分からないけど・・・・・・」
「あ、ついでに私もレアスキルあるよ」
「「え？」」
　あら？言ってなかったっけ？まぁ、いいや、そう！あるんですね。レアスキル。これこそまさに神様からもらった特典だ。
「かすみちゃんのレアスキルって何？」
　なのはちゃんが期待するような視線を送ってくれる。うん！その期待に応えたい！
「私のレアスキル、それは!!」
「「そ、それは？」」
「一言で言うのなら！・・・・・・・探知不可」
　ユーノくんは驚いたような顔をしたが、なのはちゃんはいまだよくわかっていないようだ。もっと正確に言うと”隠蔽”になるのだが、・・・。
　転生する前神様が「一つ選べ!!」と言ってトランプ枚数ぐらいのカード束を突き出した。抜いたカードには”隠蔽”とだけ書かれていた。はぁ？インペイ？どういうこと？どこの厨二病??と最初思ったよ。いやだって、何が”隠蔽”されるとか、何が”隠蔽”できると

か一切書かれていなかったんだよ!それでどういった転生特典なのか本当にわかんなかった。あのときまでは・・・・・・。

分かっている者もいると思う、そう!なのはちゃんの御着替え中の写真だ。つまり、下着姿のなのはちゃん。

当時はまだ小学校入学前で私のなのはちゃんＬｏｖｅもまだまだ未熟で暴走していた時であった。なつかしい・・・・・・。え?今でも暴走しているって?残念。今の私でも引いてしまうくらいに変態でした・・・・・・。バカだったよ!!・・・・・・話を戻そう。その時に転生特典のことを思い出して「もしかして・・・」と思って部屋に忍び込んでばれない”イメージ”をしたら、できてしまった。さらにアリサちゃんたちにその写真を見せるまでそのままばれずにいた。・・・・・もうやるなよって?うんやらない。その後おじいちゃんを呼ばれた上で士郎お父さんと桃子お母さんに注意された。その時初めておじいちゃんが怒った。・・・・・もう怒らしたくない。いや、それだけじゃないよ!?なのはちゃんもさすがに怒っていたから・・・。あのときのなのはちゃんは怒ってるような恥ずかしそうな涙目で、・・・・・・・・・・・・すごくよかった。いやいや反省してるよ!?一歩間違えてるとなのはちゃんを悲しませてしまってたから。・・・なのはちゃんに誓ってもう絶対にしません!!

とまぁ、そんなことがあって取り敢えず身を隠せるということが分かったのだが、アルファスが現れてからそれがレアスキルであるということと、また魔力変換資質として魔力隠蔽なるものがあると分かった。もっと正確に言うと魔力及び視認による探知に引っかからないというものだ。その時のアルファスはうるさかったな～～。魔力反応がないのに魔法が使えるとか、どちらも前例がないとか、流石お嬢さんだとか。こっちとしては、なのはちゃんのためになるかどうかさえ分かればいいだけなので必要なところだけ訊いて他は全部黙殺した。ただ自分のリンカーコアも隠せるので闇の書事件では襲われないとかはあるけどね。ただ自分と自分の魔法、それから自分が触れているものに対してしか発動できないということ。これでもすごいと思うのだけれど、離れたなのはちゃんを隠して助けるのは不可能だ。

だから、なのはちゃんは間違いなく襲われる。
　余談だが、リーゼアリアさんに見つかったのはそれを使わず認識阻害の魔法の練習もかねて現場に向かったから。認識阻害の魔法は魔力がある程度ある人には普通に見破れる。つまり、アリアさんには簡単にばれた。そして、その後焦って使うの忘れて捕まった。レアスキルと言えど、意識して使わないと使えない。・・・・・・いざというときに使えていないって・・・・・私って凄く無能なんじゃ・・・・・・。あとこれも余談で、隠蔽魔法の多くはＡＡランク。それをレアスキルでＡ―ランク程度の実力で出せるようになっているのだが、どっちにしても魔力出力リミットで使えない。・・・・・・・・本当に何もできないんじゃないのかな？
　ま、まぁ、それは考えない様にしよう。取り敢えず、転生や原作云々を除いてなのはちゃんたちに教えたら、凄く残念なものを見るような顔で見られた。
「かすみちゃんって、そんな希少なちからをそんなことに使ってたなんて・・・・・・・ほんとに残念なの」
「ぐっ！」
「ま、まぁ、姿が隠せるっていうのはすごく便利だよね」
「例えば？」
「え、えっと、潜入調査だったり、相手から逃げるときだったり・・・」
「戦いには何か役に立つの？」
「・・・・・・・・・隠れたり逃げたり？」
　あれ？今思ったのだけれど、私ってリミットがかかってなくても使えない奴なんじゃ・・・。使えたとしてもほとんど直接戦闘に関係ない!?・・・・・・・・・本当に要らない子。
「ああ！ひとつ！一つあるよ!!」
「え？どんなの？」
「隠れて背後からの奇襲!!」
「それってジュエルシード相手でも役に立つの？」
「・・・」
　容赦ない一言が私の胸を貫いた。魔力出力が制限されているから

あまり意味がないですね・・・・・・。
「・・・どうせ、どうせ、私なんて、無能・・・・・・」
「あっ、・・・ええっと、ほら、かすみちゃん?元気出して?ええっと、な、なのはは別にそんなこと思ってないよ!!なのははかすみちゃんが近くにいてくれるだけでうれしいし!!」
「そ、そうだよ!一人よりも二人いる方が戦術の幅も広がるし!ジュエルシード封印には直接かかわれなくても・・か、かすみも役に立ってないわけじゃないんだよ?」
「いいよいいよ!ふたりして慰めなくても!流石のなのはちゃんでも同情や慰めはいらないの!!いいもんいいもん!!今日はなのはちゃんの戦闘シーンを見て気分を紛らわせるもん!!」
　二人が複雑そうな表情をする。でも、仕方がないと思う。私は結構活躍できると思っていたわけだけど、よ～く考えると戦闘向きじゃないし、幻術が使えるかというとまだ使えないし、っていうかあれランクはそこそこだけど魔力量がかなり食われるからほとんどじっとしとくしかないし。今さらながらにティアナってすごいと思うよ。
　そんなことを考えながら私は絶好の撮影場所に設置したビデオカメラを手にする。そして、気が付いた。
「あ・・・」
「ん?どうしたの?かすみちゃん?」
　なのはちゃんの声が遠い気がする。だって、・・・・・・

「ビデオカメラの電源入れるの忘れてた〜〜!!」
ベンチに横になっている時切ってました。

第五話　魔法少女ハーレムなのは計画　脇道

なのはちゃんと秘密を共有してから一週間が経とうとしていた。
プールでの一個と学校での一個を合わせて、なのはちゃんが所有しているジュエルシードは五個になった。ん？プールの時は大丈夫だったかって？そうなんですよ。撮影ができていないと気が付いたときの絶望感はちょっと本気でどうしようかと思いましたね。ですが！心配無用!!なんと、アルファスが映像を撮ってくれていました！流石アルファス！というかよくよく考えるとアニメとかで映像撮っているのってデバイスでしたね。忘れていましたよ・・・。最近本当に物忘れが激しいような気がする。特に前世での記憶が。もしかして前世の記憶少しずつ忘れている？ただたんにど忘れ？そもそもすぐに思い出すから大丈夫だと思うのだけれど・・・。心配し過ぎかな？

と、まぁその話はおいておいて、アルファスが撮ってくれました！さらにレイジングハートも映像を提供してくれたので、動画編集も完璧♪あ、なのはちゃんにも編集を手伝ってもらいました。え？なのはちゃんがよく許したなって？そこは強引に、ね♡なのはちゃん、機械系の話になると目の色を変えるから、手伝わないと言ったにも拘らずついつい口をはさんでしまってて。それに気が付いて顔を赤くしてそっぽを向く・・・・・めっちゃ可愛いかったよ～～～。ん？ただ撮影し忘れていたのを同情されていただけだって？・・・・・・・・・それは忘れて。

序でに、訓練の時間はもちろんちゃんとしたけど、休むのも訓練のうちってユーノくんが言ってたから、それで無理やり共同作業させた♪ああ、無理やりって言葉が何だかいけないことしているような!!ベッドに無理やり押し倒されたなのはちゃん！信じていたものからの裏切り！涙目なのはちゃん！そして、震えながら言うの「な、なんで？どうして？どうしてこんなことするの？」って!!・・・・・・・・・ふぅ、妄想はそこまでにしよう。もちろんなのはちゃんが本当に嫌がっていたらしないよ。長い付き合いだからそう言った見極めはお

手の物。これはまだアリサちゃんやすずかちゃんにはできない私のアドバンテージ♪・・・・・・まぁ、いつかそんなのもなくなるんだろうけども。

学校のジュエルシードでもなのはちゃん大活躍!!今度はビデオカメラとふたつのデバイスを使っての撮影に加え、サーチャーも使いました！え？魔法の無駄使い？なのはちゃんの活躍が撮れるのに、どこが無駄遣いなのよ!!ちょっとＯＨＡＮＡＳＨＩしようか!?

ああ、そうそう。学校のジュエルシードだけどアニメとかではすぐに終わってたけど、校舎の中にまで入ってジュエルシードを探しました。結局見つからず外に出て校舎全体を覆う封印魔法で丸っと飲み込こんで封印完了。簡単に封印してたけど、流石のなのはちゃんもお疲れ気味・・・。私が手伝えたらいいんだけど、まだ一か月経ってないからね。まだ四分の一もいってない。

そして、明日はいよいよあのバカップルが、じゃなくてリア充のサッカー少年とマネジャーの女の子がジュエルシードを発動させてしまう。そして、なのはちゃんは昼間男の子が持っていたのに気が付いたのを気のせいと思い、でもそれは気のせいじゃなくて発動してしまい、自分を責めると・・・。私はそれを絶対に阻止したい!!もちろん、これはなのはちゃんが自分の気持ちに対してしっかりと向き合う大事なシーンでもある。それによって将来エースオブエースにまでなって頑張っていけるのだと思う。しかし、それはつまりストッパーが壊れかけているとも言う。人間は無意識下で力をセーブするものだが、原作のなのはちゃんはそれが狂っていたと思う。狂っていると無茶ができる。流石になのはちゃんに無茶はしてほしくない。それならば、例えエースオブエースになれなくともストッパー付きの無茶をしない方向になのはちゃんを向かわせる、と言うのが私の考え。まぁ、ストッパーが付いていたとしてもなのはちゃんなら上り詰められるだろうとも楽観視しているが。それよりも私というイレギラーもいるんだ。墜落のシーンが大けがじゃ済まなくなる可能性もある。それなら早い段階でその芽を摘みたい。

という訳で、明日はなるべく早起きしてサッカー観戦時のシミュ

レーションをしておこう。

・・・・・・・・・・そんなことを思っていた時期が、私にもありました。

まさか寝坊するなんて！あり得ない！目覚まし時計が止まっていたのも充電器のコンセントがぬけていたのも最悪だったが、今日と言う今日に限って、おじいちゃんが朝早くに出かけてしまっていて起こしてくれることもなかった。いや、いつも同じくらい早いから起こす習慣がないのだろうけど・・・・・・。でもこのままだと遅刻してしまう！そうなると、昨日考えた完璧無敵のプランが簡単に破棄されてしまう。急いで準備するが、部屋の時計は原因不明の沈黙（きっと電池切れ）を放っている。今度こそ充電されている携帯電話はサッカーが始まっている時刻を示していた。遅れのメールはもうしてある。そして、このままだとサッカー観戦のほとんどを見れないことも確定している。まぁ、それはいい。ジュエルシードの確認及び封印を行えればいいのだから。それよりも試合に遅れあまつさえ観戦できなかったりすれば、アリサちゃんの雷が落ちる事間違いなし。

「そもそも、何で起こしてくれなかったのよ!?アルファス!!」

「Ｉ　ｃａｌｌｅｄ　ｙｏｕ　ｏｖｅｒ　ａｎｄ　ｏｖｅｒ　ａｎｄ

ａｇａｉｎ．Ｂｕｔ　ｎｏ　ｒｅａｃｔｉｏｎ　ｆｒｏｍ　ｙｏｕ」《何度も何度も起こしたわ。だけれども、まったく反応がなかったのよ》

アルファスの言葉を聞きながら取り敢えず、家から飛び出した。あと五分でバスが到着する。すぐの四つ角を右に曲がり、林を抜け、廃墟を横目にしながら走る。

私の住んでいる場所は山側の住宅地。試合のある河川敷のサッカー場までは約２０キロ。バスはあるが自宅の近くのバス停は本数が少なく、今本数の多いところまで足を酷使しているところだ。まぁ、多いと言ってもに１０分に五台中一台しか向かわない。一つ乗り遅れるだけでサッカーが終わる。

腕時計を見る。あと２，３分以内に着かないといけないとわかる。

四つ角を左に折れ、小川の橋を渡り、病院を横目にしながら通りに出る。バス停が見えた。いや、バスが停まっている！腕時計は時刻表とぴったり。急ぐ、間に合え！

「え？きゃっ！」

「ほわっ!?なっ！」

・・・・・・・・横道から急に出て来た車椅子にぶつかり横転。乗っていた少女は目を回して倒れている。停まっていたバスは発車した。そのとき、私は「急がば回れ」という言葉を思い出していた。

～～～

前半戦、サッカーの試合はお父さんのチームが得点を入れてハーフタイムとなった。相手のチームもいいところまで行ったのだが、キーパーがシュート全てを弾くというファインプレーをして休憩となる。そこで漸くかすみちゃんのメールに気が付き、アリサちゃんが爆発していた。

「何よアイツ！毎回毎回呪われてんの!?あんだけ言っときながら当日遅刻って、阿保か!?」

すずかちゃんと二人でアリサちゃんをなだめながらも苦笑してし

まう。
　かすみちゃんは楽しみにしていた行事のほとんどをまともに参加したことがない。一年の時の遠足も事故を起こし病院へ、一緒に温泉宿に泊まりに行っても途中で発熱し病院へ、海やプールでは鼻血を出しすぎてこれまた病院へ。
「これでまた病院に行ったら、一週間で二回も病院に行くことになるわね！」
「この間のプールも帰る時になって倒れちゃったからね・・・・・・」
　すずかちゃんがなんとも言えないような顔をして眉を寄せる。三人で一緒に溜息を吐いた。
「・・・・・・かすみってなのはが絡むと・・・なんというか、よりダメになるのよね」
「あ、うん。言いたいこと分かるよ、アリサちゃん。今日だって、そうだしね」
「ん？どういうこと？アリサちゃん、すずかちゃん」
　こちらを向く二人にそう言うと、アリサちゃんとすずかちゃんが呆れたように溜息を吐いた。私、何か変なこと言ったのかな？
「取り敢えず、かすみはいつ来れるって？」
「えっとね、あと三十分くらいだって」
「それって、・・・試合終わるじゃない！何しに来んのよアイツ!?」
　アリサちゃんの再熱した声がフィールドに響く。はっと周りを見ると注目されていた。三人で赤くなりながら小さくなって今度こそ鎮火した。
　そこで、携帯の着信が入った。
〝なのはちゃんへ
　病院で検査をすることになりました。
　応援行けなくなり、本当にごめんなさい。
　　茅野かすみ〟
　さてと、アリサちゃんにどう伝えようか・・・・・・。

～～～

背筋と言わず頭と言わず、冷汗が流れるし思考停止に陥っている今日この頃。いかがお過ごしでしょうか?私は茅野かすみ、絶賛車椅子の少女を押し倒しています。

目の前の少女は美少女でなのはちゃんやアリサちゃんたちと並ぶほど可愛いです。左の前髪にバッテン印の髪留めがアクセントとなって彼女の愛らしさを引き立てています。まつげも長いし、鼻もすっと伸び将来美人さんになるでしょう。湿ってつやのある唇なんて齧り付きーーーーって、こんなこと考えてる場合じゃない!!

「だ、大丈夫ですか!?」

急いで立ち上がり、呼びかけながら彼女の身体を確認する。反応はないが少なくとも血が出るような怪我はしていない。それが唯一の救いだ。

今度は身体を揺すってみる。反応がない。周りを見る。そこそこ交通量があるというのに歩いている人はいない。車もただ通りずぎて行くだけ。・・・・・別にやましいことなんて考えていません。電話して救急車を呼ぶか?近くに大学病院があるから担ぎ込んだ方が早いか?を考えていただけです。

「ん、ん~~・・・?」

逡巡していると、少女の意識が戻った。

「だ、大丈夫ですか?」

「ん、っと。・・・・・・えっと、どちらさんですか?」

少女と目が合いながら関西弁イントネーションと敬語の混じった独特の返事を聞く。

「覚えていませんか?先ほどぶつかってしまったものなのですが・・・・・・」

そう言いことのあらましを説明していく。少女は最初ボーっとしていたが私の話を聞くたびに意識がはっきりしていった。徐々に反応を取り戻していく。

「ああっ!あ~あ~、思い出したわ。って、あんた大丈夫やったんか!?うち、結構なスピード出てたやろ?」

・・・・・・・・すいません。魔法で身体強化して走ってたので無事でした。むやみやたらと使うなとアリアさんに言われたというのに守らなかったどころか、人を轢いてしまった。車とは行かないが、自転車ほどの力が出ていたと思う。
「私は大丈夫だけれども、あなたは？私もかなり速く走っていたから」
「うちは大丈夫やけど・・・・・・あっ」
ん？、と思い少女の向いた方へ振り向くと車輪が拉げた車椅子が倒れていた。頭から血の気がすっと引いた。これほどの力でぶつかったという証拠だ。下手をしたら大怪我だ。少女の顔も引き攣っているように見える。
「ほ、本当にごめんなさい！車椅子弁償します!!身体大丈夫!?早く病院に行こう!!」
「え、ちょっと！」
ろくに返事も聞かずに少女を抱えて近くの病院へ急ぐ。ここが大学病院の前でよかった。今はまだ大丈夫そうだが、急に様態が変わったら怖い。近くならすぐに対処ができるだろうし、そもそも運ぶことも簡単だ。
病院内に入る。入ると大勢の視線にさらされるが気にしないで受付に行く。
突然やってきた私たちに目を見開いた受付の看護婦さんに事と次第を伝える。互いに走っていたこと、ぶつかったこと、車椅子が壊れたこと、そのまま病院に来たこと・・・　ｅｔｃ。女性は話を聞くと柔和な笑顔に戻り待つように言った。
私たちはソファーへと向かう。いろいろと落ち着いたからか、そこで漸く少女の視線に気が付いた。
「あ、えっと、ごめん。抱えられるの嫌だった？」
「え？う、ううん、べつに大丈夫やで。ああ、ただそろそろ降ろしてくれへんか？結構視線が集まってるからな」
「視線？私は別に気にしないけど」
「うちが気にするんや!!」
すぐに検査室に行けるようにと思ったのだが、顔を真っ赤にして言

うので、そのまま少女を椅子に下ろす。魔法を使っていたから私は平気だが、抱えられたままだと彼女が辛いかもそれないしね。周りの人たちが微笑ましいものを見るようにこちらを見ているが、なぜだろう？見当がつかない。

序でに、車椅子は病院の人が取りに行ってくれるようだ。車椅子どうするか失念していたから助かった。

「それよりも自分、結構力持ちなんやな。急にお姫様抱っこされたときはビビったけど、なんやすっごい安定しとったしあったかいしで安心してもーたわ。それで速いと来た。見た目普通の女の子なのに、まるで魔法でもつこーとるようやな」

少しまだ赤いが可愛らしく少女は微笑む。しかし、私の心臓は一回ビクリと大きく鳴った。

「え！えっと、ま、まあ、普段から鍛えてるからね？こ、これくらい余裕だよ？魔法なんて使ってないよ？ホントだよ？」

「ん？どうしたんや、急に慌てて？」

あ！阿保だわ自分。こんな怪しく否定しても意味ない！な、なにか話題をそらさないといけない。

「な、なんでもないわ！それより私たちまだ自己紹介がまだだったわね。私、茅野かすみ。かすみでいいわ。あなたは？」

「そ、それもそうやな。うちは八神はやて。よろしゅうな」

捲し立てるように言うと、はやては少し引き気味に答える。よかった。反省したすぐ後に魔法を使うなんてちょっと動揺していたようだ。それで追及されるとは、目も当てられない。まぁ、追及は逸らせたからいいが・・・。って、あれ？八神はやて？・・・・・・はて、どこかで聞いたことあるような名前だが・・・・・・思い出せん。

顎に手を当て考えていると、後ろから慌てた声がかかった。

「はやてちゃん、大丈夫!?轢かれたって聞いたけど・・・・・・」

「石田先生、さっきぶりです。轢かれた言うんはちょっと大袈裟ですが」

「・・・ほ、ほんとね。どうやら大丈夫そうね。だけど、一応検査はしてもらうわ。・・・で、えっと、それでその子は？」

こちらに気がつく女性。私は自己紹介と事情説明をする。もちろん魔法のことは伏せて。はやてもところどころ補足してくれる。
そこで初めてはやての方の事情を聞いた。どうやら急に車椅子の調子が悪くなって速度が制御できず飛び出してきたらしい。だからと言って私の件（魔法使用）はどちらにしてもギルティだが。
「ならあなたも検査していきなさい」
「え、でもお金今そんなに持ってないですよ」
「今回は私が払うわよ」
「え、でも流石にそれは・・・」
「いいのよ。今回だけだから」
「しかし・・・・・・」
石田先生が検査を押してくる。身体強化をしていたのでする必要がないが先生が安心するならした方がいいだろう。但し今行くのはこちらの事情で行けない。正直今から河川敷に向かっても試合には間に合わないが、行かなかったら行かなかったでアリサちゃんが怖い。それにジュエルシードを抑えないといけない。なのはちゃんが気が付いたのも翠屋でのことだし今からでも間に合うだろう。それにお金を払ってもらうのは申し訳ない。それならあとでおじいちゃんと一緒に来た方がいいだろう。故に渋る私を見て、少し考える石田先生。
「もし検査しないでどこかで倒れたら大変でしょ？」
「それは、まぁ、理解してます」
「それなら、はやてちゃんと一緒に検査してもらったほうが、こちらとしても助かるんだけど。そっちのほうが手間もかからないだろうし」
確かに、ばらばらで来られるよりも二人だけなら一緒にやった方が手間がかからない。それに病院の先生ならお金の負担も少ないと言われた。ここまで強く推す理由が分からないが、先生は折れる気がなさそうである。そもそも返事をする前に検査室に連れてこられた。それでも嫌そうな私に、担当の人にもう話をつけているから、と言われ、いつの間にか逃げ場所を塞がられていたことを知らされる。なぜここまで強引なのだろうか？そして、諦めた。そのあとなのはちゃん

にごめんなさいメールを送った。
「なんかごめんな～。いつもは優しくて冷静な先生なんやけど・・・・・・」
次に会った時のアリサちゃんの反応に怯えていると、新しい車椅子に乗ったはやてが苦笑いする。
はやてすら知らない事実。一体何が石田先生をそこまでさせるのか。も、もしや、私があまりにも可憐すぎで先生と生徒との禁断の恋か!?いやだめだ、私には心に決めたなのはちゃんがいるのだから。先生すいませんが、あなたの気持ちにこたえられそうもありません!!
「そんな心配しなくても大丈夫だからね。それと、私は先生だけど、あなたとの関係はどちらかと言うと先生と患者さんかな」
「な！いつの間に私の心の声を!?」
「いや、口に出てたで」
おっと、妄想駄々もれ。これは流石に恥ずかしい。顔を抑えながら検査室に連行される私。
検査自体はすぐに終わった。先に検査してもらったため、今ははやての番で少し待たされている。今からなのはちゃんの許に行きたいがしばしの我慢だ。加害者である私が先に帰っていい訳がないのである。
そうすると白衣ポケットに手を突っ込んだ石田先生がこちらに来た。
「えっと、かすみちゃん。だったわよね」
「あ、はい。はやてのほうは終わりましたか？」
「んー、もう少しかな。その前に少しだけ私とお話ししない？」
なるほど、ＯＨＡＮＡＳＨＩ☆ですね。わかります。気を許した後に背後からズドンですね。その手には乗りませんよ。
「いやー！本当におしゃべりだから！」
「いや、私を無理矢理連れてきた前科があります。あれでしょ？私にエロいことするんでしょ!?エロ同人みたいに!!エロ同人みたいに!!」
「・・・・・・・・・・はやてちゃんのことなんだけど」
あ、はい。すいませんでした。

私は少し自重するように身を縮めた。序でに頭を抱えた。最近の私、頭沸いているな～～。
「かすみちゃんははやてちゃんとは今日初めて会ったのよね？」
「え、ええ・・・。そうですね。始まりはしばしば街角で起こりますから」
おや？自分で言ってて今気が付いたが、これって恋愛もののテンプレ的な出会いだな。但し今回は登下校中でも、パンを咥えている訳でもなかったが。
「その、出来ればでいいんだけど、これからもはやてちゃんと会ってあげてほしいのよ。友達として」
「？・・・・・・えっと、よければ理由を教えてもらってもいいですか？」
急に真面目な顔になる石田先生。心なしか雰囲気が重いものになっている気がする。もしかして訊いちゃいけないことだった？いやいやそれならあんなお願いしたりしないだろう。
案の定、石田先生は語り出した。はやてが原因不明の病気にかかっており足が動かないこと。両親が事故で亡くしており、病気の急変も心配されるため学校には通っていないこと。海外の親戚が現保護者で頻繁に会えず、今は独り暮らしであること。重い内容から胡散臭い内容まで色々と聞かされた。というか、どっかで聞いたことある内容だ。
「本人は平気なふりをしているけど・・・やっぱり寂しそうなのよね。だから、何か楽しみを見つけてほしいのよ」
「なるほど・・・それで手っ取り早いのが同年代の友達を作ること、と・・・・・・・・」
石田先生は一つ頷くとこちらの反応をうかがう。これはあれだ。あんなにも検査を強引に推し進めて来た理由はこれを言うためか。もちろん本当にこちらを心配しているのは本当だろうし、はやてと一緒の方が二度手間にならなくてよいというのも本当だろう。だけれでも、軽くやられた感があった。
ここまでやられちゃ仕様がない。返事なんて決まっている。

「あなたにはやてちゃんの友達になってほしいの」
「お断りします」
　ええ、そりゃあもういい笑顔で言ってやりましたよ。痛い沈黙が場を支配するのを覚悟で。
　予想外の言葉だったのか石田先生は数秒固まった後、なんでって顔をした。私はそんな先生には目もくれずに声をかける。
「はやて、終わったんでしょ？」
　検査室のドアの向こうでびくっと反応がある。こちとら魔法使い。手に取るように居場所がわかる。というか最初から扉が少しだけ開いていたのに気が付いていたのだ。盗み聞きとは情けないぞ、はやてくん。
　扉を開けてはやてが顔を出した。私はその手を強引につかみ、引っ張り出す。
「帰るわよ」
「・・・・・・・え？」
「それでは石田先生。私たちはこれで帰りますので。失礼します」
　喋らなくなった石田先生を尻目に私ははやての車椅子を押して病院を出た。はやても私も終始無言であった。
　同じバスに乗った。乗る時に手伝ってはやてからありがとうと言われたが無視した。私は非常に機嫌が悪くなっていたのだ。
　春の陽気はのんびりしているのに、私たちの周り1メートルは冷えていた。ビールはキンキンに冷やした方がおいしいからね。降りる時もはやての降りる所で降り、はやての家まで車椅子を押していった。はやてはどうしていいかわからないようで借りてきた猫のように座っていた。私は時々道を聞く以外何も話さなかった。
「えっと、・・・ここがうちの家や。かすみちゃん、ここまでええよ・・・・・・・」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」

ここまでで何度も繰り返した会話をすると、諦めてはやてはカギを開けた。そして、二人して中に入る。車椅子は内と外用と分けていたので、再びお姫様抱っこして乗せ換えた。
そのままリビングに行き周りを見渡す。昼間の閑静な住宅街の閑静な家。誰もいない。仕事に出ていないとか、買い物に出かけていないとかではない。嫌なことを思い出して余計機嫌が悪くなる。
「・・・・・・本当に独りで暮らしているんだ」
「え?・・・ああ、うん。石田先生も言いよったやろ?五年前事故で亡くなってもうてな。まぁ、もう慣れたから特段気にすることもないんやけどな」
私ははやての言葉を聞きかじりながらダイニングのふかふかソファーに身を沈める。
「えっと、かすみちゃん・・・なんでここまで来たん?」
「別に?普通だよ」
「いやいや!普通やあらへん!普通やったら友達になりたくないもん所に行こう思わんやろ!?」
流石に少し切れ気味なはやてさん。まぁ、無理もない。石田先生のお願いを却下して、急にテンションが変わって、傍若無人にも家にまで上がり込んでソファーでふんぞり返る。私ならすでに怒鳴り散らしている所だろう。しかし、一つだけ訂正しておきたい。
「私は別にはやてと友達になりたくないとか思ってないよ」
「は、はぁ?ならなんで石田先生にはあんなこと言ったん?」
「簡単よ。ムカついたから」
私のセリフを聞いたはやては頬を引き攣らせながら、子供かよ、と吐き捨てた。それは否定しない。と言うか否定できない。絶賛子供なのだから。
「で?なんでムカついたん?事と物次第じゃ怒るで」
「・・・・・言っとくけど、私は石田先生に怒っている訳じゃないわよ」
「ん?じゃあ、誰に怒ってるん?」
小首を傾げるはやて。それに対して私はすごくいい笑顔で言い

放った。
「・・・あなたに怒っているのよ。はやて」
狸みたいな顔のくせに鳩のように驚くはやて。ますます腹が立つ。理解していないのが余計に腹立つ。
「あなた、大人にお願いしてもらった子と友達になろうと思ったの？」
「そ、それがどないしたんや？別に普通やろ？」
低音の私にはやては流石に身構えている。一度大きく息を吐き出す。溜息ともつく深い吐息。そして、息を吸い込みはやてを睨みつける。
「別に普通？どの口がほざくのかしら？友達作ろうという気がないくせに！そうじゃなきゃ石田先生が心配したりしないでしょ！作ったとしても大人から与えられて上っ面の関係で済ませようとして！そう！さっきの話よ!!知ってる？子供が興味を失ったおもちゃの埃被った姿。想像できないと言わせないわよ！あなたは私をそんなもののように扱おうとしたのよ!!失礼にもほどがあるわ!!そんな扱いにするくらいならあのとき飛び出て『うちは人をおもちゃくらいにしか思えへんから友達作らんのや』って思ったまま言いなさい！この！半端な寂しがり屋め!!それともなに？そんなことはミジンコも思ってなかったというの？それこそ逃げよね。あなたの病気が何なのかは知らないけど、何もかも諦めた面しなさんな！辛気臭い!!加齢臭より酷く臭うわよ!!自分に酔うな！自分を飲んでも飲まれるな!!この酔っ払い!!」
一気に言い終わり、息が荒れる。呆気にとられたはやてはしばらくして何を言われたのか理解して顔を真っ赤にして口をパクパクさせる。
確信した。図星を突いてやったと。どの言葉が核心を付いたかは知らないが、どうやら逆鱗に触れられて怒り心頭。作った二つの握りこぶしを太ももの上にめり込ませていた。
「で？何か言いたい事でもある？言いたい事あるならどうぞ？お目々真っ赤っかさん」
「・・・・・・・う……と……せに」

「はぁ？なに？聴こえないわ。口あるの？言葉分かる？ごめんなさい、私睨まれて伝わるような星の住人じゃないのよ。・・・・・・それとも怖くなって何も言えないとか？」
「うちのこと、なんも知らんくせに」
「ちっさい!!」
　すると、はやては唾を飛ばさん勢いで怒鳴り出した。
「うちの気持ち知らんくせに、よう言うわ!!寂しくて何が悪い!?そもそもうちは人様に迷惑かけてあらへんで!!あんたが言ったことぜーんぶあんたが勝手に思っただけの妄想なんや!!被害妄想！捏造！ダメ絶対！ただの痛いやつやん!!なん妄想でどつき倒すんや!?阿保なん？バカなん？妄想癖あるとかマジ怖いわ！現実と妄想の区別付いとりますか～？お医者さん紹介しましょうか～？妄想癖変態女!!」
「はぁ？何他人に対して期待しているようなこと言ってるの？「言っとらんわ！」うちの気持ちがどうタラとか言ったでしょうが！忘れんぼ！「あんたこそ変態やろが!!」私が変態ならあなたは糞ニートか引きこもりまっしぐらよ!!自宅を警備してますって（笑）？」
「ならあんたは犯罪者予備軍や！うちの許可なく家に上がり込んでるし、すでに不法侵入しとるやないか！「それはあなたが止めなかったからでしょうが！」止めんかったら入ってもいいんか!?「気が付いて止めなかったら大丈夫でしょ！」いや、有無を言わせぬ態度やった！恐喝や恐喝!!お巡りさん！ここやで～～。幼気な車椅子の美少女を恐喝して無理矢理家に押し入った輩がおるで!!」
「自分で幼気（笑）な美少女（笑）とか（笑）。あなたが幼気な美少女なら私は可憐でお淑やかな御令嬢でしょうが！「ここは捏造大会やあらへんで～。お帰りはあちらから」誰が捏造よ！それはあなたでしょ!!あなたこそ出なさい!!「ここはうちの家や！」知るかそんなもん!!」
「第一何？大人がお願いした友達？始まりなんてかんけーないやんけ！なに？友達になるのにトイレや風呂の入り方まで気にせんといけんのか？めんどくさい女やわ！」
「別にそんなことは言ってないでしょうが！なに勝手に勘違いしてるんでしょうね、この自称美少女の妄想女が！私はあなたが阿保らしい

こと考えているから怒ったのよ!!ね、半端なかまってちゃん?」
「誰がかまってちゃんや!!そもあんたの方が妄想女や!!阿保らしいことって、勝手にあんたが妄想したことやんか!!「妄想じゃない!」自覚しい!妄想癖のある変態は変態らしくしいな!「変態じゃない!!」変態や。どうせうちが気絶してた時もなんや変なこと考えてたんやろ!?「・・・・・・・・・・・・」・・・・・・・いや、そこ黙るところちゃうで」
しばしの沈黙。そして、どちらともなく腹の底から笑った。はやては車椅子から落ちないように、私はソファーから転げ落ちるように。その家は五年ぶりの笑いで満ちた。
「い、いやあああぁぁ〜〜、久し振りに笑いすぎて顎痛いし、腹痛いし」
「ふ、ふふふぅ〜〜、鍛え方が足りませんな」
「鍛え方って、ふふ。笑うためのか?」
「うん、笑うための」
「あはははは!」
床をバンバンたたく。余裕がない。はやてがどうなっているのかわかんない。次に顔を上げるとはやてが車椅子から落ちて床で震えていた。笑いがこみ上げてくる。また、二人して笑った。
「く、く、下らいことで、わ、笑いがあはははは!」
「や、やめい!は、腹が痛くてふ、ふふふふふ!」
ただひたすらしばらく笑い続けていた。子供のような喧嘩に、子供のような言い草、そしてくだらないことで笑う。
そうやって、私ははやてと友達になった。

〜〜〜〜〜

笑ったあとしばらくして帰った。流石にあのまま居続けるのは悪いだろうと思って。
帰るときはやてが寂しそうにしていたが、また来るというと元気な顔になった。まぁ、もう大丈夫でしょう。加齢臭放つ顔からいくぶんか子供らしい表情になっている。

良いことをした、と思いルンルン気分で帰路に着こうとする。はて？何か忘れているような・・・・・・。

「Ｌａｄｙ？Ｄｏ ｙｏｕ ｆｏｒｇｅｔ Ｊｅｗｅｌｓｅｅｄ？」

《お嬢さん？ジュエルシードのこと、忘れてない？》

「あっ」

その時、街の方で膨大な魔力反応がした。

第六話　魔法少女ハーレムなのは計画　邪魔

ジュエルシードの発動を感じ、なのはと現場に向かう。広域結界がすでに張ってあった。かすみは魔力制限があるから、この規模の結界は作れないはず。一体誰のものなのだろうか？

「ユーノくん！あれ!?」

なのはがビルの上を指差す。金色で目立つ人がいた。僕達はそこの階段を駆け上がる。

屋上につくと一人の派手な男の子がいた。それもただの子供ではない。その魔力量はなのはの倍はある。この人が結界を張ったのか？

「あなたは誰ですか？管理局の方ですか？それとも・・・」

警戒しながら訊く。

基本的に魔道士は大きく分けて2グループに分類できる。管理局魔道士と違法魔道士。後者は悪いことをし、前者はそんな人たちを取り締まる。もし目の前の子が管理局の人じゃない場合は戦闘になるだろう。

僕となのはの間で緊張が走る。男の子がこちらを振り向く。すると、目を見開き口元を釣り上げた。

「おう！俺の嫁！」

・・・

「うっせー、淫獣！俺となのはの会話を邪魔すんじゃね!?」
絶句した。
初対面で暴言を吐くとは。失礼なことをしただろうか？男はそのまま歩いてなのはのところに行く。僕は何も言うことが思いつかなかった。
「よう！なのは！」
「え、えっと、し、失礼ですが、どこかでお会いましたっけ？」
なのはが慌てて取り繕う。向こうは親しげだが、やはりなのはの知り合いではなかったようだ。それではなぜこんな態度を取れるのだろうか。
少年は少し考える素振りをして、ニカっと笑った。
「ないな!!」
ないのかよ！ならなんでそんな態度なの!?って、そんなこと考えてる暇がない！
「なのは！そいつは無視して、早く封印を！」
「う、うん。でも、ジュエルシードの場所が・・・・・・」
た、確かにこの広範囲に影響が出ている。この場合探すのは手間であった。サーチャーが使えればいいのだが、なのはにはまだ教えていない。いきなりは使えないだろう。
どう探そうかと考える。突然なのはがそうだ、と言って魔法陣を描いた。その絵図に驚愕する。
「・・・なのは、それって探査魔法だよね」
「うん！町全体を探すのは大変だから魔法で探せないかなっと思って」
サーチャーが飛び出す。そして、四方に散らばった。それからなのはは集中のため沈黙する。全く教えていない魔法を想像だけで作り出すなんて。レイジングハートの補助があってもそう簡単にはできない。デバイスがあってできるのなら管理局は人手不足にならないだろう。やはりなのはの才能は計り知れない。
おかげで、あとは見つけたら即封印するだけだ。現状特に何もなく魔法が作動している。なのはの魔力量ならそこまで難しくないだろ

う。それよりも目の前の少年だ。急に黙ってからずっとなのはを見ている。それもよいとは到底言えないような表情で。なのはの気が散るからやめてほしいんだけど・・・。
「見つかった！」
「そうか！それで、どこにあるんだ？」
なのはが探索を終えるやいなや食いつく少年。目をギラギラさせ、猛獣のようだ。その様子に慌ててなのははジュエルシードがある場所を教えてしまった。
「なら、俺がジュエルシードを封印してやろう」
うんうんと満足そうに首を振りそう言うと、上空へと舞い上がる。
そして、
「王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）」
黄金の魔力光が煙のように空間へ広がる。そして、驚くべきことに、その光の中から無数の質量兵器が出てきた。あっと思う間もなくそれらはぶっ飛んだ。
ただの質量兵器ではない。一つ一つに膨大な魔力が宿っている。それらはこれまた驚くべき破壊力で街のビルを破壊していった。一発もジュエルシードに当たらずに・・・・・・。
「ちょっと、町が!!」
「む。なかなか当たらないものだな」
何発かが僕たちがいるビルにぶち当たった。足元が大きく揺れる。
「や、やめて！代わりに私がやるから壊すのはやめて!!」
「ハハハ、なに遠慮することはない。なのははそこで俺の勇姿を見ているだけでいいのだ!!」
だめだこいつ。言葉のキャッチボールが成り立たない。絶大な魔力の槍が隣を貫いた。
結界が張っているから元に戻る。だから、なのはほど僕は街の心配をしていない。それでも崩壊する建物に目を逸した。普通こんな破壊活動はしない。狂っているのか、ただ単に馬鹿なだけなのか。
なのはも諦めた様子だ。無視して砲撃の準備をする。って、ここから当てるの!?

なのはの砲撃は見事命中して、木々が消えていった。・・・・・・・本当になのはの才能は計り知れない。
男はそれを見て結界を解いた。スプラッタになった町がきれいに戻っていく。
「・・・えっと、それで」
なのはが困った顔で少年を見る。少年はすごくいい顔でこちらを見ていた。
「流石なのはだ！俺ほどではないが一発で封印できるとはな！」
何を言っているのだろうこの人は。悪意という悪意は感じられないが、客観的に考えてその言葉は馬鹿しか口に出せないと思う。
ジュエルシードがなのはの元に飛んで来て、そして、レイジングハートへと格納された。
「えっと、それであなたの名前は？」
おずおずと尋ねるなのは。そう言えば、といった顔をして少年は髪をどこのボンボンかと思わせるかのように梳きあげた。
「ハハ！俺の名は、ギル・ガ・メッシュ・ゲイツ！この世の財宝は全て俺のものだ!!」
高笑いし始めるギル。そのあまりの異様さに気持ちが後ろへと行ってしまいそうになるが、なんとか踏みとどまる。
「え、えっと、それで君は管理局の人かい？」
「管理局？ふん！あんな偽善集団と一緒にされては困るな」
「・・・・・・それじゃ、君はどうしてここに来たんだい？」
「フッ・・・さっきも言っただろ？この世の財宝は全て俺のものだと。美しいものは全て俺が所有すべきだ」
ま、まさかジュエルシードを!?思わず身構える。やはり違法魔道士なのか!?なのはも思い至ったのか身構える。さっきも言ったが、魔道士には二種類ある。そしてギルは管理局を否定した。それなら彼は違法な魔道士で、ロストロギアを狙っている可能性が高い。
しかし、彼と敵対して勝てるか？先程は命中率の低さに目が行った。しかし、その一つ一つの一撃は先程なのはが放った砲撃の倍の魔力をまとっている。それを何発も放つ底なしの力。二人一緒でも勝

負になるだろうか？
少年をにらみつける。そして、口を開いた。ジュエルシードが狙いなのかを訊くために。
「・・・・・・それは、つまりジュエ「そう！なのは！お前は美しい!!」・・・・・・

「ということは、俺とお前とは相思相愛ということだな!!」
「はにゃ?」
いつの間にかなのはのそばにいるギル。あっという間もなく彼女の顎に手をあて、クイッとさせる。そして、二人の顔と顔との距離が近くなってーーーーーーー

「はい!ストーーーーーーーーーップ!!!」
かすみが間に入ってきた。

〜〜〜〜〜

危うくなのはちゃんのファーストキスが奪われるところだった。なんてやつだ、と所謂踏み台転生者を睨みつける。
「ん?誰だ貴様?」
訝しげにこちらを見る少年。イレギュラーもイレギュラー。最も考えたくなかったうちの一つ。そして、『魔法少女ハーレムなのは計画』の最大の障害となり得るもの。〝他の異世界転生者〟。先程なのはちゃんを知っていたことと前世で知ったテンプレっぽい踏み台のセリフ（若干違うが誤差の範囲）から判断した。
私はなのはちゃんを奴から離しながら、誰だ、と訊かれたことに反応する。
「誰だかんだと訊かれたら!」
「Ｗｅ　ｄｏ　ａｎｓｗｅｒ　ｉｔ　ｆｏｒ　ｗｏｒｌｄ　ｓｙｍｐａｔｈｙ!」《応えてあげるが世の情け!》
「世界になのハーレムを築くため!」

「On the worlds, to defence Nano—Harem!」《世界のなのハーレムを守るため!》
「愛と真実のなのはちゃんを愛でる!」
「We are lovers of lovely and cute Nanoha!」《ラブリーでキュートななのはの味方!》
「かすみ!!」
「Alphas!!」《アルファス!!》
「次元をかけるなのハーレム要員の二人には」
「Raging Heart, unbearable mind waits us!」《レイジングハート、不屈の心が待ってるわ!》
「「・・・・・・・・・・」」
決まった。アルファスと一緒に考えた完璧なセリフ。マスコット枠(?)がいないのが欠点だ。今度ユーノくんも誘ってやってみよう。
ユーノくんとの初対面のときに色々と疑われたので、その対策に作った自己紹介シーン。本当はフェイトちゃんとかクロノくんとかの前で披露する予定だったがこの際仕方ない。
・・・・・・なんだか三人とも黙っている。そのうち二人が呆れた顔をしている。なんでかな?感動で打ち震える姿を想像してたのに。
「かすみ・・・もうちょっと普通の登場の仕方ないの?」
ユーノくんが、心底つまらんみたいな顔で苦言を呈した。なぜに!?最高傑作だったのに!!アルファスも完璧よ、って感動極まった声で言ったのに!!どう言うこと!?
・・・・・・・・・取り敢えず、仕切り直しだ。この場は流そう。
「そ、それよりも、なのはちゃん!なのはちゃんはもう少し危機感を持ったほうがいいよ!」
話の矛先をなのはちゃんに向ける。当のご本人はなんのことかといったご様子。これは気がついていないようだ。ここは幼馴染としてしっかりと注意しておこう。
「あのね、なのはちゃん。そう簡単にキスされそうになっちゃだめなんだよ。それでキスされちゃったら嫌でしょ?」
「え?でも、キスするのはもっと友達になりたいって意思表示なんで

しょ？この間かすみちゃん、そう言ってなかった？」
　はい！言いました。私のせいでした。あいすいません!!
「でででで、でもね。こんな見るからに悪い顔する人とはキスしちゃだめだよ？」
「カスミちゃん！そんなこと言っちゃだめだよ!!ギルくんだって好きであんな顔してるわけじゃないんだから!!」
「いやいや、あんな表情をするのは悪いこと考えている証拠だよ？」
「本当の意味で悪いことを考えている人はいないんだよ。悪いことをしてしまうのはそれ相応の理由があるの。だから、かすみちゃんも簡単にギルくんを悪者扱いしちゃだめなの!!」
　な、なんと心の清いなのはちゃんなのか。こいつを庇った上に「ギルくん」と呼んで友達扱い。でも、ここはしっかりと現実を教えないといけない。そうしなければ、後々大変なことになる。これはなのはちゃんのためだ。真実を教えるのは辛いが致し方ない。ああいった人に騙されないようするためにはそれしかない！
「なのはちゃん、だけどね」
「そもそもかすみちゃんだって、よくあんな顔してるでしょ？かすみちゃんは悪い人じゃないから、あの人も悪い人のはずないよ!!」
「……ハイ、ソノトウリデゴザイマス。ワタシガマチガッテマシタ」
　なのはちゃんに言い負かされた。いやこれは負かされたというより自爆しただけなのだけれども・・・・・。なのはちゃんは、すごくいい顔をしている。ユーノくんは呆れて何も言えなくなってしまってる。
　って、あれ？
「えっと、あいつ。ギルがいなくなってるんだけど・・・」
「え!?」
　二人が周りを見渡す。あたりは三人だけだ。金ピカの目立つ少年はどこにもいない。
　ビルの下から車や人の雑踏が聞こえる。空の雲は朱色を写していた。そろそろ帰らないといけない時刻だ。

しばらく三人で探したが見つからないままそれぞれ家に帰った。

～～～～～

通学用バスから降り、下駄箱に行き、階段を登って、教室の扉を開ける。いくつかの机を通り過ぎ、自分の机の前の席にたどり着く。
「え、えっと、ア、アリサちゃん・・・？」
そこにはかすみがいた。
「こんの・・・バカチンが!!」
ヒッ、と声を上げ頭をかばうかすみ。私は精一杯声を張り上げて睨みつける。
「何が”絶対に遅刻しないから安心して”だ！遅刻どころか来やしない!!病院って何よ!?また病院かよって思ったら人轢いたって何してんのよ！注意散漫!!遅刻厳禁!!なんで学校には遅刻しないのに、休日は遅刻すんのよ!?呪われてんのか!?阿呆なの？馬鹿なの？それとも間抜けか!?この・・・バカチンが!!」
一気に喋って一気に疲れた。呼吸が乱れる。なんで私はこいつのことになるとここまで怒りが湧いてくるのか。聖祥七大不思議に選ばれても不思議じゃないわね。
かすみが縮こまって、「あいすいませんあいすいません」と何度も謝ってる。流石に怒り過ぎたかしら。
「ちょっと、アリサちゃん。廊下は走っちゃいけないってこの間も言ったよね」
教室に来たすずかが荷物を置きながら注意する。
「怒鳴り声も外まで響いてたよ」
「え、っ！そこまで声出てたの？」
すずかがうなずく。なのはもやってきて疲れた様子で会話に加わる。
「ア、アリサちゃん。流石にかすみちゃんが可愛そうだよ？」
かすみを見ると、壊れたテープレコーダーのように謝り続けてる。少し反省。

「え、えっと、かすみ。その・・・怒りすぎたわ。ごめんなさい」
「・・・・・・ううん。行けなかった私が悪いから」
「ええ。それは否定しないわ」
間髪入れずに返すとかすみがいじけた。こいつはまだこりてない。
私は怒鳴ったことに対しては謝る。しかし、来なかったことを許しはしない。いつもああ言って流されて許してしまうのだ。そして、すぐに忘れたように私達をからかってくる。今回はその手に乗らない。すでにこいつの手口は見切っているわ！
「そう言えば、かすみちゃんとアリサちゃんって、今日日直だよね」
すずかがふとそんなこと言った。え、と思って黒板端を見ると”茅野かすみ”と”アリサ・バニングス”の字が書いてあった。知らない、覚えていない。休日を跨いでいたからか、すっかり忘れてしまっていたのか。
「あっ！今朝の当番はやっておいたから大丈夫だよ。あとは宿題ノートを集めて職員室に持っていけばいいだけだよ、アリサちゃん♪」
「・・・・・・・・・ありがとう。昨日のことは許してあげるわ」
ドヤ顔をするかすみ。悔しい！こいつに負けた！今日こそはお灸を据えてやろうと思ってたのに!!

朝のホームルーム前、宿題を全員分集めて職員室に降りる。かすみと二人で分けて運ぶ。
かすみは普段の調子を取り戻してニコニコ。私は悔しさに顔をブスッとさせている自信がある。
「・・・そう言えば。結局試合の日は何があったのか詳しく訊いてなかったわね」
「え？えっと、本当に人とぶつかっただけで、その後一緒に病院行ってお互いに検査して、ってだけだよ。ホントダヨ・・・・・・・・・。」
最後片言になった気がしたが・・・・・・・・・・・・。
「男？女？」
「女の子だよ。私達と同い年の」
「ふ～～～ん。で、検査ってそんな時間がかかるわけ？」

「それが予想以上に時間がかかってね。本当に行けなくてごめんなさい」
「それはいいのよ・・・もう。それより検査って何やったの？」
かすみが説明する。X線写真を撮ったとか、どこか痛いところはないか訊かれたとか。しかし、二人合わせてもそれだけで応援に行けなくなるほど時間がかかるとは思えない。
「え、えっとね。そ、その子ね、車椅子だったんだ。だから少しそれで、少し遅れた、の」
かすみは明らかに冷や汗をかいているし、しどろもどろにもなっている。非常に怪しい。たとえ車椅子が本当であったとしても試合後の翠屋での打ち上げには行けたんじゃないだろうか？
「・・・・・・怪しい」
「いやいや、怪しさなんてどこにもないでしょ？」
「車椅子の子とは連絡取れる？」
「あ、えっと、連絡先訊くの忘れてた」
「嘘じゃないでしょうね？」
「ホントホント！嘘じゃないよ！携帯の連絡帳見ていいから」
怪しさ満点である。しかし、今は判断材料が少ない。ぶつかった子と連絡が取れれば証拠も揃ったんだろうけど、今の言い方だと本当に連絡は取れないらしい。
そんなことを言い合っていると職員室前まで来た。かすみが開けようと、片足立ちで太ももにノートを置いた。扉に手を伸ばす。しかし、先に中からドアが開いた。
「あ、すいません。今どきま、す・・・・・・！」
「ああ、すいま、せ、ん・・・・・・!?」
中から出てきたのは、ブロンドの髪を耳が隠れるぐらいに伸ばした少年だ。顔は驚くほど整っており、百人が百人美少年と言うだろう。しかし、一番目を引きつけたのは、その紅い瞳だ。神々しさまで感じてしまうほどで、目が離せなくなる。
聖祥大付属の制服を着ている。転校生だろうか。しかし、そんな話は聞いてない上にこんな時期の転校だ。訳ありで急な話なのだろう。

別に珍しい話でもない。
・・・・・・それよりもかすみと少年が見つめ合って固まっている。少年は目を見開いて、かすみは睨みつけている。一体どういうことなのか？知り合い？しかし、金髪の知り合いなんて聞いたことないわね。なのはも言ってなかったし。それにかすみの目つきは威嚇警戒のそれだ。あまり見ない表情だ。かすみはなのはと出会う前は海鳴りにいなかったと言っていた。その時の関係だろうか？
沈黙を破ったのは少年の方だった。
「お、お前はＴＳ変態野郎！」
ＴＳ？なんの略称だろうか？と思った途端、かすみの拳が少年の顎に突き刺さる。目が警戒から明らかな激怒に変わっている。彼はそのまま職員室に舞い戻った。
「ちょ、ちょっと、かすみ⁉」
「さて、アリサちゃん。さっさとノート提出して教室に戻ろっか」
かすみが床に散らばったノートを拾いながら言う。無表情なのが怖い。
「い、いや、その人どうすんのよ」
「何？アリサちゃんはこいつの肩もつの？」
かすみの言葉にたじろぐ。そんな言い方されるとは思わなかった。というか、かすみが怒ったのを初めて見た。こいつこんなふうに怒るの？いつもヘラヘラニコニコしていた。何言っても何をしても怒らなかった。しかし、今は怒っている。それほどＴＳという言葉は彼女にとってひどい言葉なのか？序に、変態は自他共に認めているので、それで怒ったわけではないと分かる。
「ちょっと待て⁉テメー、よくもやり上がったな⁉ＴＳ野郎⁉」
「誰がＴＳだ⁉私は身も心も女だ！現世でせっかく女の子らしい身体になったのに、また漢女とか言われてたまるか⁉」
そう言って再び少年に殴りかかろうとしたので、流石に腕にしがみついて止めた。騒ぎを聞きつけて先生たちも止めに入る。
「ちょっと茅野さんどうしたの？いつも元気だけど、あんなことするような子じゃなかったでしょ？」

担任の先生がかすみに諭すように尋ねる。掴み抑えられたかすみは少年を睨みつけ指をさした。
「あいつが！ＴＳ！ｔｒａｎｓｓｅｘｕａｌ！性転換した変態って言ってバカにしたから!!」
なるほど、ＴＳとはその略なのか。でも、かすみがそうだと聞いていない。見た目相応に可愛らしい女の子だ。本人も今さっきＴＳを否定した。それなら根拠がない。三年の付き合いだ。根拠なしにここまで怒るとは思えなかった。
確かにあいつの言動は人に向けるべき言葉ではない。ましてや相手が本当にＴＳしていた場合は差別になってしまう。
それでも目の前のかすみは私が知ってるかすみでなかった。
先生が今度は少年に問い詰める。そこで少年の名がギルといい、私達のクラスに入ることを知った。少年は一切反省した様子はなく、殴ったことに対しかすみに謝罪を求めてきた。その態度にムカッとしたが、かすみがそれに反論してまた状況が混乱してギルは別室に連れて行かれた。話はまた放課後、となった。
かすみはギルが消えていった方を睨みつけている。身体が未だ震えている。どうすればいいのか。居心地の悪さに手持ち無沙汰になる。そこで持ってきたノートをかすみ同様撒き散らしていたことに気がつく。
先生もそれに気が付き一緒に拾うことにした。
拾い終わると申し訳なさそうにかすみが私達へ話しかけた。右手で左腕の震えを抑えるようにしていた。その右手も定まっていない。声も抑えるようにしているが、ところどころつっかえた。今の彼女は何もかもが珍しい。泣きこそしていないが、感情の高ぶりが見て取れる。話した内容は私達に迷惑かけたことへの謝罪と自分でも激怒したことへの驚愕だった。
「ごめんね。アリサちゃん」
だいぶ落ち着いてかすみが再び謝った。心底落ち込んでいる。
「何がよ？迷惑への謝罪はさっき聞いたわよ」
「驚かせたこと」

一瞬息が止まった。よく見てる。今でもさっきのがかすみとは思えないのは確かだ。その様子を感じ取ったのだろう。まぁ冷静でなかったから、もしかしたら私が彼女を嫌ったと勘違いもしているかも。

しかし、私は大きくため息をついた。

「ええ、びっくりしたわ。あんた、怒るとああなるのね」

「怖かった？」

「まぁね。怖かったわね」

「そう・・・・・ごめんね」

「まったく謝らないでよね。こっちとしては友達の普段見れない面が見られて良かったと思ってるんだから」

えっ、と呆けた顔になるかすみ。私は顔が赤くなりそうになるのを誤魔化しながら続ける。呆れたように振る舞いながら。

「そんな元気のない顔して教室に戻ったらなのは達が心配するわ。早くいつも通りになりなさいよ」

「え、えっと」

「それともなのは達に心配されたいの？格好悪いところを知られたいの？」

「い、いや。で、でも」

「何!?なんか文句あんの!?はっきり言いなさい!!」

「い、いや。え、えっと、ありません」

「つっかえるな！Ｓｐｅａｋ　ｓｍｏｏｔｈｌｙ!!」

「はい！文句ありません！」

「英語で言いなさい！」

「イ、イエッサー！」

「ｍａ，ａｍでしょうが!!」

「イエス、マム！」

「声が小さい!!」

「イエス！マム!!」

・・・・・・何をやっているのだろうか、私は。こんな馬鹿なことやって。しかし、そのやり取りを何度か続けてかすみが元の調子に

戻っていくのがわかる。無駄にならなくてよかったとしておこう。
一段落して大きく息を吐く。遠慮がちにかすみがニッコリと笑った。
「・・・何よ」
「あっ、いや。・・・ありがとう、アリサちゃん。元気づけようとしてくれて」
「別に、陰気な顔されたらこっちも気が滅入るのよ。それが嫌なだけ」
「それでも、・・・ありがとう♥」
めちゃくちゃニコニコしやがって。さっきまでの悲壮感はどこに行ったのよ！一割ぐらいは残しておきなさいよ。腹立たしい。
そう思いながらもホッとしてしまっている私もだいぶこの子に懐いたもんだと、心の底でおかしくなった。

「そう言えば、バニングスさんはどうしてここにいるの？」
担任の先生が今思い出したかのように口を開く。腕にはクラス全員分のノートが抱えられていた。
「私今日は日直で、茅野さんと宿題のノートを職員室まで運んできたんです」
そう言うと、先生が怪訝な顔をした。
「あれ？今日の日直って茅野さんと日野くんじゃなかったっけ？」
「・・・・・・え？」
日野とはカスミの前の席の男の子だ。そう言えば、そうだった気がする。しかし、さっき見たときは”日野春人”ではなく代わりに”アリサ・バニングス”と書いてあった。どういうことだ？
「かすみ、あんた何か知らない？・・・って!?」
隣にいたはずのかすみがいない。廊下の先に目を向けてやっといた。忍び足で階段の方へ曲がろうとしている。
そこで思い出した。日直欄、消したような跡の上に名前が書かれていたことを。つまり、誰かが書き換えた。
「あんたか!!かすみ!!」
かすみが走った。私は追いかけた。先生が後ろから声をかける。

「廊下は走っちゃいけません!!」

第七話　魔法少女ハーレムなのは計画　主人公

行ってきますの一言で家を出る。暖かな陽気に伸びをした。今日も小粋な小春日和。

おじいちゃんの短い返事を背中に、扉を閉め、今日はすずかちゃんの家に遊びに行く。まぁ、遊びと言ったが実際その大半はお茶会なのでなんとも遊びに行くという感じがしないが。いや、ＴＶゲームもあるのだから遊ぶことには遊ぶんだけれどもね。まぁ、若い子達がキャッキャウフフしてるのが見れるからいいか。え？お前も若いって？いや確かに身体は子供だけど、頭脳は大人っていうか・・・・・。

そこで私は先週の踏台（あいつ）とのことを思い出す。怒り罵倒、そして震え。いい大人がするようなことではない。私は頭を抱え、顔から煙が出た。

メッチャ子供っぽかったよ～～!!!何が体は子供、頭脳は大人(笑)だ!?どっちも子供だろ!!何あれ、私ってあんなに怒りっぽかったっけ!?これでも前世含めると三十代半ば。なのに子供っぽくみっともなく!!さらにアリサちゃんと先生にまで見られてメチャクチャ恥ずかしい!!穴があったら入りたい!!実際に家に帰って蔵の中に逃げ込んだ。扉が扉だけに横穴に思えたのよきっと。アルファスが嘲笑の目を向けてきたのは忘れられない。デバイスだから目なんてないかもしれないけれども、そう感じたのよ!!アリサちゃんは黙っていてくれるようだけれども、それを盾にイジれなくなるかもしれないし。唯一の救いがみんなの前では露も気にしている風に見せていないことだけ。・・・・・・・・・そうだよね？できてるよね？できてなかったら泣きます。というか、泣いてます。

これも全てあのギルガメッシュのせいだ。もろＦａｔｅだよ！よく二次創作で扱われる踏台転生者そのままじゃない!?学校でもなのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんにバカの一つ覚えのように気持ち悪く言い寄っている。そして私には敵対している・・・・・・。

あれ？これってもしかして、二次創作テンプレのオリ主？私って主人公だった!?ま、まさか!?しかし、そんな気が・・・・・・・・。踏

み台がいて、それに対するオリ主が女って言うのは珍しいが、別にいけないわけでもないだろう。しかし、オリ主っていうのは面倒くさそうだな。なってなにか良いことでもあるのかな？思い付かない。原作介入とか？それ自体は当初の予定通りだから問題はない。私はなのはちゃん守り隊所属だからね。そもそもオリ主になるとどうなる？一番に思いつくのが、踏台（あいつ）に絡まれること。それならなりたいとは思わないな。踏台（あいつ）とは関わりたくないし、話もしたくないし、二度と顔も見たくないし。しかし、残酷なほどに同じクラスである・・・・・。

話を戻すが、そもそも主人公はなのはちゃんだ。それ以外に誰が考えられるというのだ。私が主人公であるとかなるとかはあり得ない。私はなのハーレムの構成員で、なのはちゃんの取り巻き第一号だ。なのはちゃんこそがハーレム主人公であり、終いにはほとんどの人がその加護を受けることになるだろう。そこにオリ主という存在はいない。すべての者がなのはちゃんの下で平等になる。なのハーレム構成員となるのだ。長くなったが端的に言うと、なのはちゃんは可愛い！それ以外認めない!!

勿論あの金ピカがなのはちゃん達に危害を加えるというのなら容赦はしない。拝むべき神もとい主人公もといなのはちゃんを間違えているのだから。その時は徹底的にヤツを叩き潰す。・・・・・・なんだか宗教っぽいな。いや、なのはちゃんを女神様と置くとすごく説明しやすいのは確かなんだけど、・・・まぁいいか。

ああだこうだと悩んだり当たり前なことを再確認したり決意表明したりしていると、病院が見えてきた。今日は家近くのバス停を使わずに病院前のを利用する。こっちの方がすずかちゃんの家に向かう本数が多い。私は小走りしてバス停へ急いだ。今回別に遅刻している訳ではない。バスもまだ余裕がある。遅刻だけで急ぐ訳ではないのだよ。

「かすみ～！」

バス停に可憐な美少女が一人。先週仲良くなった八神はやてだ。今日は一緒にすずかちゃんの家に遊びにいく約束をした。勿論すずかちゃん達には言ってある。

え?連絡先はどうしたんだって?・・・・・・あぁ、もしかして前回アリサちゃんに連絡先知らないって言ったこと気にしてる?・・・・・・・・・・・・連絡先を聞き忘れたと言ったな。・・・・・・あれは嘘だ。あの場限りの逃げだ。

「何一人でニヤケとん?気持ち悪いで」

「ふふんっ、美少女のニヤケ顔なんてめったに見られるものじゃないでしょ」

「誰が美少女や。冗談キツイで」

なんだと!?はやて、あなたは全国のかすみファンに喧嘩を売ったわ。覚悟なさい!!・・・・・・・・・・・・

仲良くなれる気がするの。しかし、何か嫌な感じを受けた。暗く深く冷たい感じ。それが何によるものなのかははっきりわからずモヤモヤしていたけれど、かすみちゃんの笑い声にどうでも良くなってきた。きっと気のせいだったのだろう。

驚いたことに、はやてちゃんとすずかちゃんがすでに友達で仲良く話をしていた。お互いに図書館で何度か見かけて気になっていたらしく、二週間くらい前に車椅子の車輪が段差に挟まったのをすずかちゃんが助けてそれから話すようになったという。だから最初から苗字ではなく名前で呼び合っていたのかと理解した。それを聞いたかすみちゃんがあんぐりと驚いて、はやてちゃんが「どや？さっきの仕返しや」とか満足そうにしていた。すずかちゃんも笑っていたけど、私とアリサちゃんとユーノくんは首を傾げた。

「いや～～、話し方からお嬢様お嬢様とは想像してたけど、本当にお嬢様やったとはな」

「そんなことないよ。普通だよ」

すずかちゃんは謙遜したが、はやてちゃんが胡乱な目になる。二人はお互いのことをまだ話し合っていなかったようだ。まぁ、出会って二週間だから当たり前かな。はやてちゃんが隣のかすみちゃんに囁いた。

「かすみ、私が間違ってんのかな？すずかちゃん、こんなすっごい屋敷に住んどって、当たり前の顔でこれが普通やて」

「大丈夫よ、はやて。すずかちゃんは天然のときがあるから」

そうよな、私間違っとらんよな、とはやてちゃんがホッとする。隣のすずかちゃんが可愛らしくむくれていたのが印象的だった。頬を突っつきたい衝動を軽く感じたが我慢するの。

「あんた達、呼び捨てで呼んでんのね」

半眼のアリサちゃんがボソッと言った。横を向くと対面のかすみちゃんを呆れたように見ている。若干不機嫌そうだ。

ホントだ、とすずかちゃんが呟いた。かすみちゃんが人を呼び捨てするのは珍しい。記憶の中を探るが、初めてかもしれない。でも、呼び捨てくらいでここまでの反応をするのはどうなのだろう？そもそ

もアリサちゃんは呼び捨てが基本なのに。
「おやおや?嫉妬ですかなぁ、アリサちゃん」
「・・・・・・べっつに、あんたが誰と仲良くしようと知らないわよ。けど」
　アリサちゃんが真っ直ぐとはやてちゃんの方を見た。キツくさせた両目に、はやてちゃんが息を呑む。アリサちゃん、もしかして怒ってるの?なんで?
「あんた、はやてって言ったかしら?」
「は、はいそうですが・・・」
「一つだけ訊いていい?」
　はやてちゃんがどうぞと言う。アリサちゃんがため息のように吐き出した。
「はやて。あなた、かすみに何されたのよ?まさか脅されてる?弱みとか握られてない?大丈夫?相談ならのるわよ。良い弁護士も紹介してあげるわ。脅されてないのなら、かすみと仲良くしようと思うやつなんて普通いないでしょ」
「ちょっと待ってよ、アリサちゃん!!どうしてそうなるの!?私そんなふうに見える!?というか、そんなこと思ってたの!?」
「私もなのはっていう人質がいるからね」
　どういうことだろうか?かすみちゃんも首をひねったが、すぐに思いついたようにニンマリとした。しかし、アリサちゃんがじろっと睨みながら口パクで「アノコトイウワヨ」と動かす。かすみちゃんは、そんな~と言って崩れた。あのことってなんのことだろう?というか、人質ってなんのこと?
　アリサちゃんは当然のごとくかすみちゃんを無視してはやてちゃんに話を振る。
「で、どうなの?」
　はやてちゃんは我に返って、少し悲しそうな顔を作った。まるで有名な女優のように迫真の演技だ。
「せや、アリサちゃん。かすみはうちの大事なもんを奪い取ったんや」
　アリサちゃんの目が釣り上がる。かすみちゃんは「やっぱり!!」と

叫びながら逃げ回る。はやてちゃんはお腹を抱えて笑っていた。
私とすずかちゃんは眉根を寄せて苦笑いを続けるしかなかった。どういう状況なのかよくわからなくて。
その後、かすみちゃんがアリサちゃんに捕まって、ユーノくんが猫に追いかけられて、ファリンさんが倒れかけて、お茶会はお庭に移動となった。

ローズマリーの甘い紅茶とミャーと鳴く猫達に時間の流れを忘れそうになる。助け出されたユーノくんは私の膝の上でぐったりとしていた。そういえばと言ったふうにアリサちゃんが口を開く。
「はやては犬派？猫派？」
「犬派やな。猫も好きやけど、やっぱり犬やな」
と言いながら、猫のあご下をコロコロとさせ、私達に目を向けた。
「みんなははどっちなん？」
「私は犬ね。家に何十匹も飼ってるわ」
「何十匹って・・・」
はやてちゃんが軽く引いた。
「いやなんで引くのよ？ここだって猫何十匹も飼ってるじゃない」
「いや犬と猫じゃ大きさがちゃうやろ」
「小さい犬もいるわよダックスとかチワワとか」
「小さい犬ばっかりなんか？」
「・・・基本大きいわね」
ほれ見ろ、と言わんばかりなはやてちゃん。犬は大きくても大丈夫なの、とアリサちゃんがのりだして言う。それから二人で言い合いが始まった。すずかちゃんはそれを心配そうに、かすみちゃんは逆に焚き付けるように見ていた。
「ええっと、わ私はもちろん猫だよ。ここの猫たちを見てもらえばわかると思うけど」
すずかちゃんが二人の間に割って入るようにそう言った。二人は言い合いをやめて、まぁそうだろうなというふうに猫たちを見た。猫の毛並みもいいし、お庭に猫の糞も落ちていない。ちゃんとお世話を

している証拠だ。もちろんお金がないと出来なことだけど、しっかりとした愛情がないと続けられるものでもないだろう。
「すずかちゃんの家は猫パラダイス。猫たちの楽園だよね」
「そういうあんたはどうなのよ、かすみ」
「私？私は、なのはちゃんだよ♡なのはちゃん派♡♡♡」
「あ、・・・うん。それで、なのはは？猫派？犬派？」
いつものことにアリサちゃんはかすみちゃんを無視した。はやてちゃんはとても引いていたが、私達はいつも通りに話を進めた。
「う～～～ん。どっちだろ？あまり考えたことなかったの」
「あぁ、なのはの家は喫茶店だしね。ペット禁止よね」
「うん。強いて言うのなら、フェレット派かな？おとなしいし、家で飼えるからね」
私がそう言うと膝の上のユーノくんがビックってなった。急に呼ばれて驚いたのだろう。かすみちゃんが口元を隠し、目をニヤニヤさせていた。なぜだろう？
話は他の動物まで広がった。どんな動物がいいかとか、この動物はちょっととか。私はカップを両手で持ちながら一息つく。麗らかなお昼の一時。のんびりとした気持ちの中で、リラックスしてしまう。こんな日もたまにはいいかな。
そんなことを考えている時、ジュエルシードの反応がした。

～～～～

はい、ジュエルシードのことすっかり忘れていました、茅野かすみです。
まぁ、原作通りユーノくんが走り去ってそれを追う体で、森の中へ。これまた予定通りに大きな子猫に目を回す二人。それには無理もなく、知っていた私でもあまりのシュールさに微妙な顔になった。先ほどの話じゃないけど、大きい動物は何十匹もいると困るよね。
さぁ、封印ということになって、ついについにあの子が登場。金髪赤目の美少女。元祖なのはちゃんの嫁にして夫（？）の、フェイト・

テスタロッサちゃん!!なのハーレム要員期待の星が現れました!!!・・・って考えている暇ないし!?
　フェイトちゃんがひと薙。なのはちゃんが空へと飛ぶ。「Ａｒｃｓａｂｅｒ」バルディッシュの言葉。レイジングハートがプロテクションを張る。弧を描く軌道の魔法の刃。そして、バリアに噛み付いて爆発。そこへフェイトちゃんが突っ込んだ。それを煙の中からなのはちゃんが杖で受け止めた。心なし原作よりも戦えているようで、ホッとする。
「なんで?なんで急にこんな」
「答えても、たぶん意味がない」
　両者離れ構える。レイジングハートはシューティングモードに、バルディッシュはデバイスモードになる。
　その時、子猫の鳴き声がした。なのはちゃんが気を取られる。
「ごめんね」
　光弾が襲う。なのはちゃんは反応が遅れた。魔法も間に合わない。絶体絶命。
　あたる、と思ったそのとき、光弾が途中で弾けた。ビリヤードの球のように、見えないもので弾かれて。
・・・・・・はい、私です。フェイトちゃんのフォトンランサーの横あいから魔法をあてました。成功してよかったです。
　フェイトちゃんが驚いて周りを見る。特典の〝隠蔽〟を使っているので、見つからない。そのすきに背後に回って、リングバインド。更にチェーンバインドにもう一個リングバインド。これですぐに逃げられることもないでしょう。予想以上に簡単な捕縛作業でした。・・・さてと、この後どうしよう。冷や汗が止まらない。
　なのはちゃんが近づいてくる。フェイトちゃんは拘束を破ろうと四苦八苦している。本来ならなのはちゃんが負けて怪我をして、フェイトちゃんが勝ってジュエルシードを奪い去る。そういう流れであったが、どうしてこうなった?
「・・・・・・・・・取り敢えず、なのはちゃん。ジュエルシード封印しとこっか」

あまりの呆気なさに私はそう言うしかできなかった。

なのはちゃんがジュエルシードを封印して、フェイトちゃんを囲む。全員地上に降り、一応フェイトちゃんはなのはちゃんのバインドをプラスされ、地面に座っていた。・・・・・・本当にどうしよう。原作とぶれまくってるじゃない!?え?これ私のせい?私がフェイトちゃんを捕まえなければこんなことにならなかっただと!!?いやいや捕まえとかないとまたきっとなのはちゃんに攻撃したでしょう。なのはちゃんも逃げる気はないだろうから、また戦ってどっちかが怪我をする。最悪ジュエルシードが再び暴走する可能性も。あの場で思い付く双方が怪我をしない方法を考えたら、こうなった。

・・・・・・でもどうしよう。原作崩壊は本望じゃない。ここで踏台(あいつ)が出てきて、フェイトちゃんを助け・・・いやあいつに借りを作るのは嫌だな。フェイトちゃんは原作通りなら優しい性格をしているだろうから、あいつに感謝してしまうのでは?そうなったらなのハーレムどころかこの後の人間関係に支障でも出かねないだろうか?う〜〜〜ん・・・・・・・。

すると、なのはちゃんが顔を近づけてきた。

「かすみちゃん。私、あの子と話してみたい」

「・・・・・・一応訊くけど。なんで?」

「うんっとね。なんて言えばいいかわからないけど、あの子すごく寂しそうな目をしているの。・・・だから」

原作でも思いましたが、なのはちゃんの洞察力というか、「ホントに子供!?」って驚きそうになる。普通〝寂しそうな目〟ってわかる?少なくともさっきのフェイトちゃんの目を見て私はそう判断できない。たぶん幼いときのことが原因だと思うけど、すごいと思う。

しかし、今話し合わせて大丈夫だろうか?原作とかけ離れていき、バットエンドになる可能性もある。

ま、そんときは私がなんとかするか。なのはちゃんが望むなら、私が叶えてあげないといけない。ということで、私は許可を出した。ユーノくんが若干渋った顔をして止めようとしたが、なだめた。

「私、なのは。高町なのはって言います。私立聖祥大附属小学校三年生で、家は喫茶店をしています。えっと、・・・あなたのお名前、訊いてもいいかな？」
　緊張した面持ちで、しかし優しい顔で尋ねた。対象的にフェイトちゃんは無表情でなのはちゃんを見つめている。
「・・・・・・フェイト。フェイト・テスタロッサ」
「フェイトちゃんって言うんだ」
　なのはちゃんが満面の笑顔になる。フェイトちゃんは怪訝な顔したが、逃げ出すような素振りはなく話に応じるような構えをとった。なのはちゃんのコミュ力に脱帽です。なのはちゃんが続ける。
「フェイトちゃんもジュエルシードを集めてるの？」
「・・・ええ」
「どうして集めてるのか、理由教えてくれる？」
「・・・母さんに頼まれたから。それ以上は言えない」
「じゃあーーーーー」
　なのはちゃんとフェイトちゃんの応答を横目に考え事をする。このときのフェイトちゃんは話しをしてくれる精神状態だっただろうか？母親の笑顔を取り戻すために、母親の暴力に耐えながら犯罪に手を染める。原作では、なのはちゃんを取るに足りない相手として油断から名前を名乗った。気の緩みだ。もしくは気まぐれ？何にしても、今回は状況が逆だ。捕まっているし、なのはちゃんも多少は強くなっている。なんせ御神流を少しかじっているのだから。一二撃とはいえその実力はわかっただろう。油断なんてしないはずだし、気まぐれで話をするわけないだろう。それならフェイトちゃんが名前を教えて、かつ話に応じる他の理由として考えられるのは、ーーーーー時間稼ぎ！
「フェイトオオオォォ!!」
　アルフさんの登場です。拳がなのはちゃんに伸びる。しかし、なのはちゃんはレイジングハートで受けいなす。修行の成果ありだね。私はそっと〝隠蔽〟を使う。
「アルフ！気をつけて！もう一人いるよ！」

「わかってる!匂いでわかんだよ!そこだっ!!」
「おおっと!」
拳の衝撃が地面を陥没させる。避けたはずなのに、爆発で集中力が切れる。〝隠蔽〟が解けた。特典の欠点は集中力が切れると効果が消えるところだ。
匂いか。犬の嗅覚は人の１００万倍と言う。姿が見えなくても匂いの残像がアルフさんには見えていたのだろう。
その間にフェイトちゃんはバインドを無理矢理破る。痛みを堪えた顔。それでもジュエルシードを持ったなのはちゃんへと飛び込む。私の前にはアルフさん。拳を握っている。〝隠蔽〟を使う暇がない。私達二人は絶体絶命になった。
でも、一人忘れてますよね。
「チェーンバインド!」
フェイトちゃんとアルフさんに向かって翠の鎖が巻き付く。二人は何が起こったのかわからない風で、抵抗もなく捕まる。
草影にいたのはユーノくん。魔法陣から二本の鎖が揺れてる。
なのはちゃんと私は、加えて二人に拘束魔法を行使した。これで一段落。
「かすみちゃんすごいよ!かすみちゃんが言ったとおりになったよ!!」
「なのはちゃんに褒めてもらえるなんて、考えたかいがあったよ!!」
フェイトちゃん達は驚いた顔を崩せずにいる。ユーノくんも驚いた顔をしているが、それは二人とは意味が違っていた。
「ユーノくん、どうしたの?フェレットが豆鉄砲食らったような顔して?」
「いや・・・頭がいい素振りはあったけど、普段が普段だけに、今回の作戦がこんなにうまく行くとは思ってなかったから」
うん、驚いてくれるのはありがたいけど、ボケを流さないでほしいな。思った以上に辛いのです。こういった時にアリサちゃんの有り難さが身に沁みる。今度お礼に何かしよう。主にいじる方向で。
今回の作戦、事前に念話で二人に伝えたが、正直驚くことはない。

フェイトちゃんが捕まればアルフさんが来るだろうと、原作を知っている者にとっては朝飯前の発想だ。なのはちゃんたちには他に仲間がいるかもと言ったのだ。なのはちゃん達はそれを知らないから驚いてるだけ。別に私が頭いいとか悪いとかは関係なし。そもそもユーノくんがどこまで回復しているのかわからなかったから、知っていても成功しない可能性もあった博打的な作戦だった。成功してよかったよ。それよりもこの後どうしよう。冷や汗が目に痛い。

目の前には、拘束された金髪美少女と姉御系犬耳美女。生唾物です。・・・・・・すいません、もちろん冗談です。真面目な話、このままでは原作とあまりにも乖離してしまう。前にも言ったかもしれないが、このままではフェイトちゃん闇墜ちからのなのはちゃん闇墜ちからのはやて闇墜ちで、世界が滅びる。これはいけない。

・・・適当なところで、阻害魔法でも拘束にかけておこう。〝隠蔽〟で私がやったと誰も気づかないだろうし。阻害魔法というのは魔法の効果を弱めるもので、拘束魔法に使用すると拘束が弱くなる。弱めたらフェイトちゃん達は勝手に抜け出すだろう。流石に襲ってくることはないでしょう。ここまでやっとけば迂闊に手を出さなくなるはずだ。これでなのはちゃんが怪我をしなくて済む。いや、もしかしたらまだ襲ってくる？目を見ると戦意が失われていない二人。やっぱりこの案はやめたほうがいいかな。しかし、これ以外の方法で原作崩壊を阻止できるのが思いつかない。あとはフェイトちゃんたちと交渉でもするかな。それぐらいだ。

「その子達を解放してもらおう」

「え？」

男の子の声がした。振り向くと、フルフェイスの西洋風の黒兜に全身黒で覆われた鎧。背は同じくらいだが細身。片手には木の棒。・・・・・・木の棒？

「え、えっと、どちら様ですか？」

警戒しながらも訊いてみる。返事はない。棒切れをこちらに向けてくる。私もアルファスを構える。ユーノくんなのはちゃんもフルアーマーの彼に対した。しかし、木の棒である。

（なんで木の棒？）
踏台（あいつ）がいたから他にも転生者がいる可能性は考慮していた。彼も何かしらの特典を持っているのだろう。しかし、フルアーマーに棒切れである。ギャップに緊張感が出ない。木の棒ではバリアジャケットで護られた私達には一切効かない。フルアーマーだから防御力はありそうだが、攻撃されてもあまり痛くなさそうだ。男とはいえ少年くらいの腕力（魔法強化有り）ではダメージが入らないだろう。以上、アルファス談。
「かすみちゃん!?」
いつの間にか後ろの木に背中を叩きつけられていた。肺の中の空気が一気に出てむせる。何が起きたかわからない。というか、痛い。
その間彼はフェイトちゃんとアルフさんのところに行き、拘束をいとも簡単に切った。棒切れで。
「行け」
フェイトちゃん達にそう言って、私達に向かい合う鎧。黒い靄のようなものが見える。それが木の棒にも纏われていた。
「え、えっと、あな「ワーハッハッハッ!!」っ!?」
フェイトちゃんが口を開いたところで、ややこしい事に踏台（あいつ）も来た。
「俺が来たからにはもう安心だぞ、なのは。俺がそのよくわからん鎧を串刺しにしてやる!!」
そう言うか言わないかで王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）が開く。宝具すべてをぶっ放した。って、なのはちゃん達が!!?
「ふ、くだらん」
全身鎧の少年は棒切れを捨てた。走り出す。なのはちゃんに向かっていた槍を掴んだ。その槍で他の宝具を弾く。そして、槍を捨てる。また、飛んでくる宝具を掴みフェイトちゃんへ向った剣を叩く。捨てる。掴む。弾く。そして、捨てる。曲芸のような動きと速さで繰り返す。魔法で強化した視界でギリギリわかるくらいのレベルだ。
掴んだ斧を投げ返した。踏台の腹部に激突。呻きながら飛ばされて、ドサッと落ちた。それと同時に武器の雨は止んだ。あいつの動き

がない。・・・し、死んでないよね？嫌なやつだけど死ぬのは勘弁だよ。ここすずかちゃんの家でもあるし。
「・・・逃げたか」
ハッと見るとフェイトちゃん達が消えていた。
「さて、ぼ…私も帰るとするか」
「ちょっと待って！」
なのはちゃんが声を上げる。鎧は首を傾げたが、向かい合った。なのはちゃんはオロオロとしている。
「た、助けてくれたの？」
「・・・成り行きだ」
先程踏台(あいつ)から飛んできた槍のことだろう。鎧は成り行きと言ったが、なのはちゃんを助けたことに代わりがない。彼は魔法陣を出した。転移魔法陣のようだ。
「ちょちょっと、君は一体誰なんだ!?」
ユーノくんが叫ぶが、鎧は無視して私の方へと顔を向けた。フルフェイスの鎧が殺気を放っているような気がするのだけれども・・・・・・。
『原作介入をするな』
念話が頭に中で響く。どこかで聴いたことがある声だ。しかし、含まれている感情は怒りとか恨みとかそんなところのようだ。正直鳥肌が立つほど、怖い声だった。私が何かを言おうとした時、彼はどこかへと消えていった。その場には私達と子猫だけしか残っていなかった。
・・・・・・私って他の転生者に嫌われる素質でもあるのだろうか？

～～～～～

戻ってきてから二人の様子がおかしい。なのはちゃんはなにか思い悩むような顔をするようになったし、かすみは時々顔を蒼白にさせては何かを忘れるように首を振る。二人がユーノくんを追って森に

入ってから、よくわからないことが起きたがそれが原因か？世界が変わるような、すずかちゃんとアリサちゃんが消えて、一人だけになった世界。正直怖かったが、それもすぐに消えて元通りになって、二人と一匹が戻ってきたのだ。それについても聞きたいがすずかちゃんたちがいる前ではとてもできない。

「なのはちゃんもかすみちゃんもどうしたの？さっきからおかしいよ？」

すずかちゃんが心配そうに尋ねる。

「え？だ、大丈夫だよ、うん。ね、かすみちゃん」

「そ、そうね。それよりも私としてははやてとすずかちゃんがどうやって友達になったのか知りたいかな」

「・・・何言ってんのよ、かすみ。それ、今日最初に話してたでしょーが」

「あれ？そうだっけ？・・・あ、うん。そう言えばそうだったね。はまった車輪を助けたって言ってたね・・・・・・」

・・・・・・沈黙が重い。何が起こったんや！ホンマに!?かすみらしくない!!当の本人は落ち込んでるし、すずかちゃんは心配してるし、なのはちゃんは驚いてるし、アリサちゃんは問い詰めようとしてるし。めっちゃ話し変えたい。なんかないか？話変える話変える・・・・・・。あっ、これや。

「そ、そういえば、四人はどうやって知り合ったん？」

「「「え？」」」

見事にはまる四人。仲良えな。私は話を続けた。

「いや、普通に考えたら、不思議やで。アリサちゃんは世界的富豪の一人娘。すずかちゃんは日本有数の社長令嬢。ここまでは接点はわかる。同じお嬢様やんけな。けど、喫茶店の末っ子に、ただの変人「いや、ちょっと私だけひどくない!?」・・・・・・ここらの接点って想像つかんへんのや」

かすみが、無視されたとか言って落ち込んどるけど、まぁほっといてみんなを見る。

「私達の出会い、ね・・・まぁ、端的に言えば、なのはのおかげよね」

そう言ってアリサちゃんが話し始めた。アリサちゃんがすずかちゃんのカチューシャを奪ったこと。なのはちゃんがアリサちゃんを叩いたこと。二人の喧嘩をすずかちゃんが止めたこと。なのはちゃんが時々恥ずかしそうにして、顔を覆ったのは可愛らしかった。かすみが言うだけのことはあるな。・・・って、かすみの話が一切出てこなかったのはなんでや？

「えっと、で。かすみは？」

「ああ、かすみはなのはのおまけで付いてきたのよ」

「酷いよ！アリサちゃん!!春のパン祭りじゃないんだから!!」

「はいはい。でも、間違ってないでしょ？」

「う〃・・・そりゃ、出会いはそうだけど・・・・・・」

「あら、その後も似たようなもんだったでしょ」

「・・・今のは普通に傷ついたよ、アリサちゃん」

「え？ご、ごめんなさい。冗談よ冗談」

「うぇーん！なのはちゃん。アリサちゃんがいじめるよ～」

「もうアリサちゃん、かすみちゃんをいじめないの」

ふぅー。良かった。さっきまでの雰囲気に戻った。良かった良かった。なんだかアリサちゃんが押され気味になってるけど、まぁ尊い犠牲やな。

「え、えっと・・・そそういえば、すずかのカチューシャって誰に買ってもらったの？すごく大事なものってのはあのとき知ったけど、詳しくは聞いてなかったわね」

アリサちゃんが苦し紛れに話を変える。すずかちゃんがしょうがないなと言う感じでカチューシャを外し手にとった。

「このカチューシャ、お姉ちゃんが買ってくれたの」

「忍さんが？だから、大事にしてるの？」

「う～～ん。ちょっと違うかな。・・・説明すると長くなるけどいいかな？」

私達はうなずいた。

「えっとね。私が人見知りが激しいからって、お姉ちゃんからもらったの。けどこのカチューシャをいつもつけてるのは他にも理由が

あってね。あれは私が五歳になったばかりのとき。だから、小学校に上がる前の話だね」
　みんなが話に集中する。すずかちゃんは続ける。
「家族で海外に行ったことがあるの。パーティーに家族全員誘われて、ドイツに。けどね、私誘拐されちゃって」
「はいストップ。すずか、あなた、誘拐されすぎ。この間も誘拐されてたって聞いたわよ。すぐに助け出されたって言うけど、注意が足りないわよ」
「ご、ごめんなさい」
「ま、まあまあ、すずかちゃんも反省しているし、続き行きましょう」
　かすみがそう言ってすずかちゃんに先を促す。
「ええっと、それでね。車で移動されて廃工場に連れてかれて、監禁されたの。その時にどこかでカチューシャを落としたらしくて携帯も取り上げられてて、両手両足縛られてすごく心細かった。けどね、そこにね女の子が現れたの」
　それからすずかちゃんは不思議な話をしてくれた。現れた女の子は長い白銀の髪を揺らしながら、その場にいた誘拐犯たちを倒して戦闘不能にしていった。全員が動かなくなるとすずかちゃんの縄を解いて、落としたカチューシャを渡したという。その子はお屋敷近くで落ちていたカチューシャを届けに来たらしい。屋敷から監禁場所まで遠いし、車で移動した。どうやってここがわかったのか？誘拐犯たちをどうやって倒したのか？色々と訊きたいことがあったが、二言三言喋っただけでどこかへと消えていったという。お礼も言えずに。その後忍さんたちがやってきて事件は無事終わった。
「ホント、不思議な話ね。その人、見つかったの？」
「うんん。見つかってないの。だからね、このカチューシャをつけてればまた会えるかなって思っていつも付けてるの。会えたらお礼も言いたいしね」
　なるほど、だから大事なものなんやな。
「顔はわかるんか？」
「白いお面をかぶってたから・・・。ただ、白銀の長くてきれいな髪に、

お面から覗く紅い目が特徴って言うのだけわかってる感じかな」
特徴的な髪色に瞳だけど、少なくはないから見つけられるかはわからない。何か考えていたかすみが口を開く。
「えっと、話が若干変わるけど、忍さんはどうやってすずかちゃんの居場所がわかったの？その人が匿名で連絡したとか？それならある程度どこの誰かとかわかるんじゃないの？」
「あ、えっと言ってなかったね。このカチューシャ、センサーがついてるの。それで届けてくれたお陰で私の居場所がお姉ちゃんに伝わったの」
「センサー・・・」
アリサちゃんが呟く。かすみが呆れ声で言う。
「えっと、そのセンサー、カチューシャを落としたら意味ないよね。次もそういったことにならないとも限らないでしょう？」
「うん。だからね、あのときの反省からお姉ちゃんがカチューシャを改造しててね。・・・お屋敷以外でカチューシャを外すと、お姉ちゃんの携帯に連絡が行くようになってて」
「え〟っ!?」
アリサちゃんが決して乙女の出してはいけない声を出した。
「も、もしかして、私のときも・・・」
「うん。あまり心配をかけたくなかったんだけど、お姉ちゃんの携帯に連絡が行って。しばらく外していたから、家では大騒ぎになってたらしくて」
すずかちゃんが苦笑いをする。アリサちゃんは引きつった顔でごめんなさいと頭を下げた。・・・・・・まぁ、何にしても人のものをとってはいけないということやな。
その他にも色々と話をした。今度の連休温泉に行くから一緒に行かないかとか、連絡先をみんなと交換したり、楽しい時間を過ごした。こんな日が毎日続けばいいなと思う。本当に私の人生で稀な幸福日和やな。
お茶会が終わり、バスに乗った。家は病院よりも向こうにあるの

で、かすみとは途中で別れた。あ、かすみにあのとき起こったこと訊くの忘れてた。まぁ、次会った時にでも訊こうか。
バスを降り、独りぼっちになった帰り道。帰っても誰も答えてくれない家。でも、前までの寂しさよりかはまだましやな。
「あなた、八神はやて、よね」
前から来た女の子に突然呼びかけられた。髪は桃色。着ている服は青の巫女服（？）に狐の耳としっぽをつけていた。
「え、ええ。そうですけど」
「古くて鎖で縛られた本を持っているよね」
なんでそんなことを、と思ったがうなずいてしまった。なんだろう、頭がぼーっとしてきた。
いつもは持ち歩いている本。今回はすずかちゃんの家に行ったから、気味悪がれるのではと思って持っていかなかった。まぁ、彼女たちなら持っていっても特に何も言わなかっただろう。気に入っているから今度会うときに持っていこうとは思っているが。
「ごめんなさいけど、それ、譲ってもらえないでしょーか」
「えっと、何でか訊いてもいいですか？」
「う～～んと、ね。色々とあるのですが、第一に私がもとの場所に帰るために必要なものなんですよ」
帰るために？どういうことだろうか？あの本があったとしても帰れるわけでもない気がするが。なにか特殊な事情があるのだろうか。なんだか眠いし、頭がだるい。
「えっと、あの本があれば帰れるんですか？」
「う～～んとね、他にも色々とやらないといけないし、他にも帰れるかもしれない方法があるのだけれど、あの本が一番帰れる可能性が高いし、手にも入りやすいしでここに来たというわけよ」
「わかりました。なら、家にありますので、家までご一緒しますか？」
何でかこの子を誘ってしまった。でも、どうでも良い。あの本は大事なものだった気がするが、気のせいだったのだろう。この人のためなら何でもあげていいと思えてきた私は車椅子を進める。狐耳の少女が私の背後に回って、車椅子を押してくれた。

「ありがとうございます・・・」
彼女は、いいえっと言って黙った。私はよくわからないまま家の近くまで押してもらった。
家についた。
「ここが私の家です」
そう言って、鍵を取り出そうとしたとき、すずかちゃんの家でも感じたことがあるあの気配がした。まるで世界が切り取られるようなあの感じ。私は目が覚めた。
「その子から離れなさい」
振り向くと、頭ピンクの女の子に対して白銀の髪の女の子がいた。お面を被っていて表情はわからないが、鋭い剣を相手に向けている。
「ロリ玉藻とか、それってあなたの趣味？気持ち悪いわね」
「っち、転生者かよ」
と言うやいなや、玉藻と言われた少女は逃げる。しかし、白銀の少女は回り込み一振り。少女は真っ二つになった。と思ったら二枚の紙へと変わり地面へと落ちていく。
「式神ね。面倒くさい」
そう言い、私の方に向き直る。
「あなた、大丈夫？」
「え？ええ、だ、大丈夫です」
「びっくりしたでしょうが、このことは誰にも話さないほうがいいわ。検索するなとは言わないけど、好奇心猫をも殺すと言うからやめときなさい。あなたの身のためにも」
どういうことだろうか。わからないが、取り敢えずうなずいた。彼女はいい子ねっと言って、背中を見せた。
「それじゃ私は帰るわね。一応近くにはいるわ。あいつみたいなのがあなたに接してきたら、今みたいに追っ払っておくから、安心なさい」
そう言って、彼女は消えたのだった。突然過ぎて置いてけぼりを食らったが一言言える。
なんとも不思議な体験だった、と。

第八話　魔法少女ハーレムなのは計画　フェイト

どうしてこうなった。それが私こと茅野かすみの思ったことだった。

先日のお茶会から数日たったある日。私は学校帰りの途中道であった。

ジュエルシードの暴走も最近は見当たらず、平和な日常が過ぎていると思っていたのだ。

目の前に、赤眼で金髪ツインテの美少女が、自身の身長ほどある得物をこちらに向けてくるまでは。

「あなたの持っているジュエルシードを渡してください」

金髪幼女ことフェイト・テスタロッサちゃんがそう言う。

なぜこうなっているかって？簡単だ。下校時、なのはちゃんたちと途中でお別れ。そして、一人でとぼとぼと帰る途中、曲がり角を曲がったら、フェイトちゃんに出会った。本当に偶然って怖い。

フェイトちゃんはこちらのことを覚えていてすぐに変身、バルディッシュを構えて来た。通常変身物のアニメでは変身時は顔が思いっきり出ているにもかかわらず、友人にもばれないというご都合主義を発揮するのだが、こと『魔法少女リリカルなのは』に限って言えばそうでもないのが、悲しい。

私は両手を上げて、この状況をどうしようかと悩んでいた。

……とりあえず、話しかけてみようかな。

「え、えっと、確かフェイトちゃん、だっけ？」

睨んできた。さぞや前回捕まったのをまだ根に持っているのだろう。なのはちゃんのためとはいえ、なぜあんなことをしてしまったのか。なのはちゃんのためだったので、後悔はないが他になかったのか疑問は残る。

「消えないでください。魔法を使った瞬間に、攻撃します」

アルファスと念話をしようとしたが、やめた。果たして、念話は魔法に入りますか？　魔法世界出身ではないので、わかりません。転生特典も使えない。これでどうやって逃げればいいのか。

「痛いことはしたくはありません。どうかジュエルシードをこちらに渡してください」
「……嫌だ、と言えば？」
訊くと、視線が鋭くなる。なんとも、泣き出しそうな表情で、怖さはない。
「その時は、無理矢理にでも、奪います」
「じゃあ、あげる」
「どうしても渡したくないというの……え？」
アルファス、と呼ぶと、アルファスからジュエルシードが吐き出される。それを慎重にフェイトちゃんのバルディッシュに渡した。バルディッシュは受け取った。
「え？　え？　え？」
「渡しました。これでいい？」
私が持っているジュエルシード二個を全て渡した。フェイトちゃんは相変わらず、意味がわかっていないようだ。
「渡したから、一つだけお願いを聞いてもらっても良い？」
「お願い……？」
うん、と頷いて言う。
「なのはちゃん……私ともう一人いた女の子だけど、その子の話をしっかりと聞いて話してほしいの。それだけ」
「……」
「お願い、聞いてくれるかな？」
フェイトちゃんは迷った様子を見せる。
「うん、わかった。話してみる」
「ありがとう」
私はできるだけ、柔らかい笑顔を心がけた。